

## 窩紋土器研究序説（後篇）

——肥厚系口縁部土器群とその変化——

大塚達朗

### 1. 序

先の論考〔大塚 1990 c〕では（以下前篇と略する）、今日に於いても依然として窩紋土器が無視される背景に、“団塊の世代”や“団塊の世代直後”及び“新人類世代”とに亘って、遺跡と土器に密着した研究がきわめて希薄であること、そのことを省みないままの不明瞭な研究の異常な突出等をあげ、それらの批判にかなりの紙数をさいた。それほどにあえて批判するべきかどうか第三者的立場から見れば別意見があるであろうことを承知しながら色々と考えあぐねた末、批判すべき事柄が元来錯綜した研究状況を引きずる草創期研究に於ける研究者どうしの議論の応酬上の原則的な問題に関わる上に、今後ますます研究の担い手になるべき“団塊の世代”から“団塊の世代直後”や“新人類世代”までが当事者であること故に、批判の対象となる研究者たちが振りまいた研究態度に異議を發することを決意した次第である。いい加減な関係性の中で同時代を共有するのでは、研究の発展に必要不可欠な相互批判は本来的な意味では成立しないであろうと危惧したからである。

しかし、前篇のような批判を展開したからといって、一朝一夕に理想的な情況が開けるわけではないだろう。理性的に反省するか感情的に反發するか、後は彼らの問題であるが、時間は有効かつ有意義に使うべきであろう。

遺跡と土器との対話が第一義的であろう。遺跡と土器との対話から何故に窩紋土器を追認したのか、早速統論に入っていく。

本篇では、1960年代から激化する“縄紋土器の起源”論争の中で忘失された小瀬が沢洞穴の調査成果〔中村(孝)1960 b〕を1970年代に蘇生させた佐藤達夫氏のさまざまな問題提起〔佐藤(達)1971 b, 1974 a・b〕の内、何が今なお有効か、何が今でも重要かを具体的に説き、関連資料の渉猟からどのように窩紋土器を今日的に評価していくかを考え、前篇で略説した通り当該土器型式を隆起線紋土器以前に位置づけるべき旨——斜格子目紋土器→窩紋土器(→隆起線紋土器)——を具体的に説明し、新たに大別として遡源期（隆起線紋土器以前）を設定し、結びとしたい。

思うに、いまだ縄紋土器の底が見えない現在、隆起線紋土器（豆粒紋を含む）、爪形紋土器、円孔紋土器、多縄紋土器などの再検討から草創期諸型式の再編と縦横連鎖構造の確認を踏まえ、今日的視点から小瀬が沢洞穴の調査成果に立ち返って、中村孝三郎氏が重要性を喚起し、佐藤達夫氏が

注目した窩紋土器に筆者なりに再評価を与えようとする時、何が小瀬が沢洞穴の成果に対して判断を誤らせたのか、何が小瀬が沢洞穴の成果に対して手がかりとなる見方か、そして何が今確実なのか、それらを総括しておかなければならないであろう。これが現在の縄紋土器起源論に関わる現実的課題と思えてならない。その場合、とくに“隆起線紋土器が最古”という認識が共有された問題点を清算しておく必要を痛感するのである。前篇で触れた様に、具体的な認識に差があれ、どうも隆起線紋土器を最古と見なした瞬間に縄紋土器の起源を追求する際の方針に狂いが生じたと思えてならないのである。筆者が佐藤達夫氏の編年の検証にこだわるのは、氏の案が、狂いの生じた方針に対し、それを質すものと思われてならないからである。筆者には、広く分布する隆起線紋土器が当初から共通性とともにも極めて地方差のあることから、より遡源的なものからの変化してきた土器型式群としか思えないのである。

まずは、窩紋土器の根本的問題を説明し、“隆起線紋土器が最古”に関する学史的総括から始めるが、先を急ぐ方は第2章を読み、すぐに、第4章以降を読まれ、そのあとで第3章に戻って来て頂ければ幸いである。

## 2. 窩紋土器の根本問題——隆起線紋土器以前の縄紋施紋土器

### 1. 小瀬が沢洞穴の窩紋土器

小瀬が沢洞穴は、1958年と1959年に中村孝三郎氏によって調査され、1960年に第一次調査報告〔中村(孝)1960 a〕と本報告が出されている〔中村(孝)1960 b〕。押型紋土器の下層から、多種多様な古式縄紋土器が検出された。その中には、隆起線紋土器や爪形紋土器や各種多縄紋土器が含まれていたが、下層によくまとまる「押点文土器」や「櫛目文土器」に対しては中村孝三郎氏が重要さを説いたが〔中村(孝)1960 b : 52-57頁〕、以後あまり省みられることなく時が過ぎ、1970年代に入って佐藤達夫氏が下層によくまとまるそれらに対し、既存型式に比定できないと見なし、あらためて「窩紋土器」、「篋紋土器」として(図1)、意義を喚起した次第である〔佐藤(達)1971 b, 1974 a・b〕。篋紋土器については問題があるのはすでに前篇で説明した。

窩紋土器に関する経緯をまとめよう。佐藤氏は中村氏報告の破片数5点の「押点文土器」を、窩紋土器と命名し直し、そのうちの3点について密接の窩紋の特徴を言及している。まず、中村氏は5点の「押点文土器」のうち、直接言及したのは、土器番号37〔中村(孝)1960 b : 図版(17)下〕, 97〔同 : 図版(20)下〕, 96〔同 : 図版(20)下〕で、この96例は唯一の口縁部が明確に残っている破片である。土器一覧表から検索できるのが、土器番号98例〔同 : 図版(20)下〕である。もう一点はどの土器であるか、残念ながらよく分からない。佐藤氏はそのような「押点文土器」5点から土器番号37・97・98を直接引用し(図1上段左3片<37・97・98の順に配列>), 窩紋土器の意義を説いたのである。佐藤氏は「押点文土器」を窩紋土器に置き換えているのであるが、口縁部破片の土器番号96については直接は言及していない。佐藤氏が他界されたため、その理由はいまでは確かめようがないが、この土器も含めて窩紋土器と命名していたことを再確認しておこう。

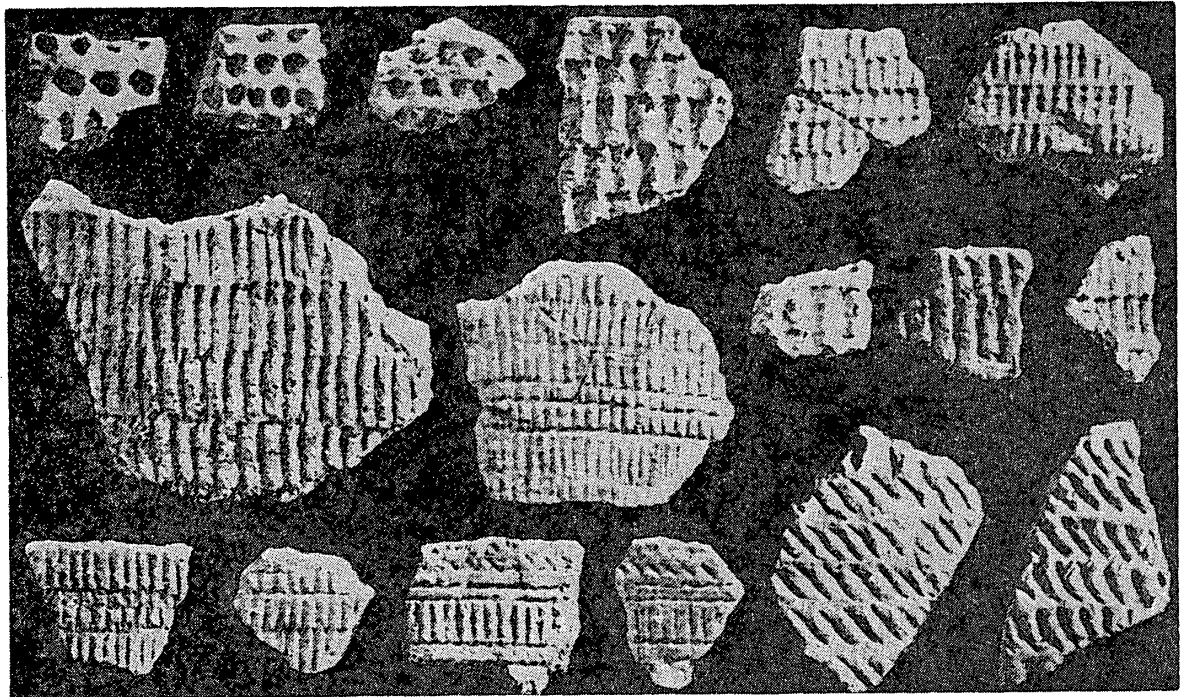


図1 佐藤達夫氏による小瀬が沢洞穴出土土器の分類：窩紋土器（上段左3片）・篋紋土器・爪形紋土器（下段右2片）——佐藤氏は中村孝三郎氏報告の「押点文土器」5片を窩紋土器と呼びかえるが、残り2片には言及しない点、小林達雄氏が窩紋は縄による施紋と指摘する点から再吟味する。

現在、長岡市立科学博物館の展示では、土器番号96例については、「窩文土器」とキャプションを付し展示してある。筆者が窩紋土器の名称にこだわるのは、佐藤氏による編年的位置づけの意義を尊重することと、研究と市民サイドとのインターフェイスを果たす博物館、この場合は長岡市立科学博物館で、佐藤氏の問題提起を尊重して「窩文土器」とキャプションを付し展示していることに鑑み、窩紋土器と呼ぶ訳である。

何故、こんなあたりまえのことをいうのか、理由を説明しておこう。栗島氏の窩紋土器に対する反論のなかで〔栗島1990〕、96例——本論図版3（版面左が天）上段左から2番目——も含め「押点文土器」が窩紋土器に扱われていないかのように、振る舞うからである。繰り返すが、佐藤氏は「押点文土器」をみな窩紋土器にあて、そのうち3点（図1）について、直接言及しているのであって、96例については発言していない、という事態になっている。

栗島氏の反論をよんでいて気がかりなことがある。ひょっとすると、中村氏の「押点文土器」を佐藤氏が窩紋土器と命名し直したのを知らないのではないかという疑問を抱かざるを得ない。栗島氏の窩紋土器の集成を見ていると〔栗島1990：6頁〕、中村氏が「押点文土器」の例として分類同定している98例を落としているからである。窩紋土器の経緯で確認しなければならないのは、名称は「押点文土器」→窩紋土器と変更されても、土器内容は変わっていないのである。問題は、佐藤氏が扱っていない土器があることだが、それらはこちらで論じればよいことであろう。佐藤氏が扱わない96例は筆者が前篇と別稿でより後出の可能性を説き〔大塚1990b・c〕、本編であらためて扱い、重要性を説く。

### ロ. 窩紋土器に於ける縄紋施紋

ところで、栗島氏の反論でもういくつか気になる点がある。これは窩紋土器の窩紋施紋手法のことに関わるだけに、看過できない。その疑問とは、もし、栗島氏が窩紋土器を見て筆者に反論したならば、すぐに沸き上がる疑問は、窩紋土器の窩紋は縄紋であって、大塚の位置づけはおかしいのではないか、佐藤氏の位置づけは誤りである、となる筈なのに、そう言わない点である。窩紋土器は筆者が実見し得た例——37・97・96例：図1上段左の2片、図版3上段左から2番目——では、縄の刺痕と思われる。窩紋土器の窩紋が縄の刺痕であるとの指摘は既に、小林達雄氏がおこなっている〔小林1978, 1987 a, など〕。筆者もこの点は、前篇で紹介した、筆者の研究発表（「縄文草創期研究の回顧と展望」：これには栗島氏も参加した）〔大塚1985〕で、小林氏の窩紋土器の紋様手法についての見解を好意的に紹介していたし、しかしその後、神奈川・寺尾遺跡〔白石1980〕の資料、その中には胴部に縄紋を持つ例があるが（図14-12）、それらを含めて隆起線紋土器以前としての窩紋土器を論じたときには〔大塚 1989 c〕、だが施紋具論は具体的には展開しなかつただけに、何故その点を問題にしないのか、とくに揚げ足取りを得意とする栗島氏だけに、疑問に思うのである。失礼ながら、栗島氏は窩紋土器＝「押点文土器」を本当に実際に見て発言しているのか疑わしい。もし、見えていても、気がつかないのは、研究以前の問題であろう。

窩紋土器の位置を一番明確に否定する小林氏の論拠は、窩紋が縄紋だからである。博物館側の事情が関係し、筆者は「押点文土器」5片全点を見ている訳ではないから忸怩たる気持ちであるが、小林氏はそれを理由に窩紋土器を否定するが、氏の議論を熟読すると、窩紋土器について、当の小瀬が沢洞穴資料中にある複数の段階があると思われる多縄紋土器のどれとも実は直接対比はしていないのである。こちらで、小瀬が沢洞穴資料を検討しても（残念ながら、全点ではないが）、小瀬が沢洞穴の各種多縄紋土器の胴部破片に比定できるものはない（図版1～4）。見た窩紋土器についてもどうみても胴部の破片と断じられないのである。栗島氏が胴部破片と断じするような破片ではない。現に一例、96例（図版3上段左から2番目）では窩紋が口縁部にあるから、胴部破片ではないとの観察所見と、口縁部に窩紋がある例の存在から、佐藤氏が直接言及した破片は口縁部破片と考えたのである。栗島氏の議論にはどこに自己の観察があるのか疑問であるし、窩紋土器を巡る論争を知らないと思われる節がある。筆者の観察による限り、窩紋土器は口縁部に窩紋が密接する例（図1上段左3片）と横位展開する例（図版3上段左から2番目）に分かれ、口縁部は肥厚しないものばかりとみなすべきなのである。しかもこれらは、隆起線紋土器及びそれ以降の既存型式に比定できないことが重大である。洞穴下層にまとまるという調査所見〔中村(孝)1960 b : 18頁〕と、既存型式に対比できないということから、それ以前と考えなければならないのである。

これらは、窩紋が密接する神奈川・寺尾遺跡の資料（図14-5～7, 9）に対比できると考えてきた。違いもある。寺尾例には口縁部がやや肥厚する土器がある。その時、口縁部の肥厚の度合いが少し違うのをどうするか、どう意味づけるか、それは前篇と別稿で述べた通りである。これも、本篇でその違いの意味を再確認する。では、窩紋土器を巡る問題点を総括しよう。

先ず以って認識しなければならないのは、小瀬が沢洞穴の窩紋土器は既存型式に該当しそうなものではないことである。しかも、縄紋施紋があることである。

果たして、縄紋施紋は隆起線紋土器より新しいのか、という根本的問題が出てくる。その問題の解決のためには、小瀬が沢洞穴の調査成果が忘失される原因となった、“隆起線紋土器が最古”の是非から検討しなければならないであろう。1960年代を振り返るならば、隆起線紋土器→爪形紋土器→多縄紋土器のために、小瀬が沢洞穴の調査成果が視野から外れるから、それを見直す必要がある。換言すれば、縄紋施紋の編年的位置づけを論じなければならない。縄紋施紋を問題にしない議論は、土器を見ていないか、知っていて議論しないかのどちらかと批判されても仕方あるまい。どちらの姿勢も正しいものではない。

本当に、縄紋施紋は新しいだろうかと自問しつつ、小瀬が沢例の縄紋原体の復元作業がきちんとともなうべきであるから、そのためには色々な条件に恵まれなければならない、故に慎重な態度でいた。窩紋土器を正しく評価するためには、十分に資料を検索出来たわけではない。だが、隆起線紋土器の縄紋についても資料が得られたので、縄紋の登場についていよいよ旗幟を鮮明にしなければならぬ。窩紋土器は隆起線紋土器以前の土器の存在を示す土器として、そして、縄紋装飾の起源を担う土器として評価しなければならないと筆者は考えるのである。この新案は、色々な先学の様々な所説を一層截断することになるが、それも止むを得まい。新案の提示とはこのような決断を伴うのである。周りを気にしていても仕方あるまい。

### 3. 隆起線紋土器最古説と小瀬が沢洞穴

#### イ. 小瀬が沢洞穴の調査成果を忘失させた隆起線土器最古説

“隆起線紋土器が最古”のために小瀬が沢洞穴の調査成果が忘失された経緯をまとめよう。なるべく簡潔にまとめることを心がけるので、おつきあい頂きたい。再述するならば、通説の通り〔戸沢 1964, 橋本 1988, など〕, 1962年以降, 年代観を巡って激しい対立が現出する中で縄紋文化起源論争が繰り広げられ——一方の旧石器時代の提唱〔芹沢 1962 a〕, 他方の縄紋式大別・草創期の提唱〔山内・佐藤 1962〕——, 長期編年・短期編年という形での年代観の対立が深刻化しながらも, 福井洞穴の調査成果に大多数の研究者の関心が集中するような学界状況が出現するとともに, 隆起線紋土器が最古という点で似かよった認識が共有されてしまうために, 小瀬が沢洞穴の成果が考慮の埒外に置かれてしまったのである（註1）。

小瀬が沢洞穴の調査成果を忘失から救い出そうとする佐藤達夫氏は、既成研究の矛盾点を見抜き、既成研究の方針に異議を申し立て、氏自身の方針を提示した——「一般に縄紋式最古の型式は隆起線紋土器であると考えられている。この種の土器は隆起線の太さによって三種類に分けられ、隆帯紋・細隆起線紋・微隆起線紋等と呼ばれ、この順序に変遷したものと説かれている。太い隆起線紋は長崎県福井岩陰を筆頭として、主として西日本に分布し、細い隆起線紋は中部・関東・東北等東日本に分布し、時期的には降るものとされている。その根拠は福井岩陰における、第3層太い隆起

線紋土器と細石器，第2層爪形紋土器と細石器，という層序関係にある。細石器の伴出は福井岩陰のみであって，本州・四国の諸遺跡には認められない。細石器は無土器文化以来の伝統であるから，福井の隆起線紋土器が最も古い土器と認定されたというわけである。／この推論は一見もっとものように思われるが，実はおかしな点がある。もし細石器の伴出が古い条件であるならば，福井の爪形紋も本州の隆起線紋より古くなければなるまい。また福井第2層の細石器を九州における地域的残存とするならば，第3層の細石器はそうでないという困難な判定を用意しなければならない。問題は土器の編年的位置づけを石器に求めたことであろう。前稿に触れたように（〔佐藤（達）1971 a : 123頁〕—大塚註），福井第2，第3層の細石器はおそらく無土器文化の段階に属し，土器は共存でなく混在であろうと推定される。一方土器は土器自体の比較に基づいてその古さを考えるべきであろう。」〔佐藤（達）1971 b : 108頁〕—，と。

そして，「隆起線紋土器を最古として，縄紋式土器の起源問題は決着したとしばしば断定的にいわれている。しかしかりに隆起線紋土器が最古であったとしても，それを言葉の厳密な意味において最古と断定しうる根拠は一体どこにあるのだろうか。小瀬ヶ沢の窩紋・篋紋土器も，見えない先は別にして，やはり今のところの最古というべきであろう。」〔同：122頁〕と，隆起線紋土器以前の縄紋式の段階の存在を説き，独自の結論——窩紋土器→篋紋土器→爪形紋土器→隆起線紋土器という新編年案——を学界に投げかけた。

ここから窺えるのは明らかに，学界の体制的認識である“隆起線紋土器が最古”を疑うことである。佐藤氏の問題提起に対し，草創期研究者である小林達雄氏が，「佐藤編年では，隆起線文系土器より古い爪形文系土器に先行して，窩文，篋文があり，最古に位置づけられるとする。しかし篋文には，口縁部に段がつく特徴的な形態があり，室谷第一群土器に共通する。室谷第一群土器との関係は密接で，間に爪形文，隆起線文系土器など数型式以上の土器が介在するとは考えられない。……総じて，佐藤編年には問題が多い。やはり，隆起線文系土器が最古に位置し，九州では細石刃を伴うのであろう。また，最近泉福寺洞窟で発見された短い粘土紐の貼付文が，粘土紐を帯状に貼付する隆起線文に先行するようである。」〔小林1974：28頁〕，と反論している。

小瀬が沢洞穴の調査成果の再評価に赴く佐藤氏に対し，隆起線紋土器最古説故に新編年案に否定的であることが引用からたやすく読み解けよう。ところで，このような反対の立場を筆者は〈隆起線紋土器東漸論〉と呼んだが〔大塚1989 f〕，佐藤氏の主張や反対の論点を長年検討してくるに従い，筆者の方でかなりおろそかにしていた問題があったのが分かってきた。小瀬が沢洞穴の調査成果が省みられなかった原因となった隆起線紋土器最古説には実はもう一つあることに気がついたのである。それは，山内清男氏や佐藤達夫氏自身がかつて福井洞穴の調査成果を全国編年の評価の基準にした〈もう一つの隆起線紋土器最古説〉である。

実は，佐藤氏自身も草創期研究の出発点では山内清男氏とともに，“隆起線紋土器が最古”という立場に属していたのである——「福井洞窟ではさらに下層から細隆起線紋のある土器を出した。これは全く著明なことであって，これに類する土器は四国，信濃，新潟，また山形にも発見され，縄

紋土器の最古のものと考えられてきた。」〔山内・佐藤1962：24頁〕／「35年福井岩陰，36年上黒岩岩陰の発掘により，隆起線紋土器が最も古く，次に爪形紋土器がくることが明らかになった。」〔佐藤（達）1969：9頁〕——。ということは，「土器は土器自体の比較に基づいてその古さを考えるべき」ことから，1971年に提出した，小瀬が沢洞穴の調査成果に依拠した窩紋土器→篋紋土器→爪形紋土器→隆起線紋土器，という佐藤氏の新編年案は，それまでの自説に誤りがあることを認めた上での自説の変更と見なければならぬし，佐藤氏の問題提起は氏自身や芹沢長介氏や山内清男氏も含め大多数の研究者が思い従った，“隆起線紋土器が最古”，に重大な変更を迫ったものと考えなければならないのである。なお，山内氏は晩年まで，「この結果（日向洞穴，小瀬が沢洞穴，室谷洞穴，福井洞穴等の調査—大塚註）を総合して見ると隆起線紋土器が最も古く，次に爪形文が来ると思われる。隆起線紋土器は遠く信濃，山形でも既に発見されて居たが，その古さが漸く縄紋最古と定まったのである。」〔山内1969b：7頁〕とあるように，“隆起線紋土器が最古”と見なしていたのである。これが，筆者が見のがしてきたもう一つの隆起線紋土器最古説である。

#### ロ．二つの隆起線紋土器最古説

先ず，〈隆起線紋土器東漸論〉を総括しておこう。

この見解は，福井洞穴出土の細石器を伴う隆起線紋土器（3層）を最古と考え，本州へ伝播していくと考えるため，本州の隆起線紋土器は福井洞穴の隆起線紋土器に対して年代的傾斜をもって出現するという，伝播遷移系列を想定する形での隆起線紋土器最古説である。各地の隆起線紋土器自体の比較が第一義的になされるのではなく，細石器を伴うことが古さを証明するという考え方の方を出発にした点に特徴がある。福井洞穴出土の細石器を伴う隆起線紋土器（3層）を，細石器に注目して最古と見なし，本州への伝播を想定することから出発しながら〔芹沢1962b，小林1962〕，さらに主張を続ける過程で，この〈隆起線紋土器東漸論〉は隆起線紋土器（爪形紋土器も含め）を縄紋土器の範囲から除外する立場が出てくる点は留意しなければならない（註2）。

ちなみに，1970年代では泉福寺洞穴で豆粒紋土器が発見され，かつ豆粒紋土器の評価を巡って新形式か否かで議論が沸いていたことを付言しておく。その動向については小論〔大塚1989a〕を参照されたい。

次に，〈もう一つの隆起線紋土器最古説〉に移ろう。

〈もう一つの隆起線紋土器最古説〉では，細石器を伴う福井洞穴の隆起線紋土器（3層）を本州の隆起線紋土器に対し細石器を伴う故により古く見なすという立場には立たないかわりに，九州から本州各地の隆起線紋土器を皆同等に古く見なす点に特徴がある——「福井洞穴ではさらに下層から細隆線紋のある土器を出した。これは全く著明なことであって，これに類する土器は四国，信濃，新潟，また山形にも発見され，縄紋土器の最古のものと考えられてきた。」〔前掲〕。晩年の山内氏は「この結果を総合してみると隆起線紋土器が最も古く，次に爪形文が来ると思われる。隆起線紋土器は遠く信濃，山形でも既に発見されて居たが，その古さが漸く縄紋最古と定まったのである。」〔前掲〕，と述懐しており，最古である隆起線紋土器の段階が広く存在することに重点が置かれている

のである。

1960年代に於いては、佐藤達夫氏が具体的に草創期土器型式編年を論じた論文がないので、具体的立論は山内氏の側にあったと見なして差し支えあるまい。そこで、〈もう一つの隆起線紋土器最古説〉の内容を当時の山内氏の一連の文献からより詳しく探ると、終始一貫山内氏は隆起線紋土器自体については九州・四国・本州各地の土器を一括して扱っていたのが判明する。当時、伴う石器の違いとともに隆起線紋土器の隆線の差異が注目されていた〔例：小林1962〕のとはきわめて対照的である。以下、具体的に説明しよう。

九州・四国・本州の隆起線紋土器については、「細い隆線の紋様」〔山内1979(提出1961):61頁〕、「細隆線紋土器」〔山内・佐藤1962:21, 26頁〕、「細隆起線文土器」〔山内1963:5, 6頁〕に始まり、「隆線文土器」〔山内1969b:7頁〕と、言い回しに微妙な違いはあるが(註3)、明らかに隆起線紋土器を一つにくくっている。そして絶筆となった、『高島町史 別巻 考古資料編』の序文では、「土器の口頸部に細隆線数條その他を有するもの」〔山内1971〕とある。山内氏の一連の記述から、どの地域の隆起線紋土器が最古かは問わずに各地の隆起線紋土器に対し同一の命名を与えていることが判明する。厳密な分類・鑑定を信条とする氏にあって全国の隆起線紋土器に同一の命名を与えるということは、全国の隆起線紋土器を同質なものとして一つの段階と扱っていたことは間違いあるまい。氏は隆起線紋土器をそのように一括したところで、先に引用した文章から明らかなように、隆起線紋土器が広域分布の土器であることに注目するのである。

と同時に、爪形紋土器も類似したものが広域に分布していると氏は判断する。例えば、福井洞穴の爪形紋土器に言及して、「いわゆる爪形紋は、古く信濃諏訪湖曾根の湖底遺跡から、石鏃及び多数の石片とともに発見されたものと同等のものであり、近年最古のものと考えられていた新潟県小瀬ヶ沢、山形県日向洞窟などにも類似するものが見られていた。」〔山内・佐藤1962:24頁〕と述べていることから明らかなように、爪形紋土器についても同様なものが広域に分布すると見なしていたのである。山内氏は爪形紋土器をこのように広域に分布する土器とみなすことも終生変わっていない(また、曾根の爪形紋土器と同じ土器が福井洞穴で隆起線紋土器より上層から出土した爪形紋土器と同じと見なすことから、類似した爪形紋土器が広く分布するという認識は、当時多くの研究者の共通認識であって〔小林1962, 芹沢1962a, など〕、以後、爪形紋土器は広く類似すると受け取られ、現在に至るが如くである。このことは留意されねばならない。この認識については、それを是認する立場からの学史的回顧〔鈴木(保)1988, 白石1988〕が参考となる)。

つまり、山内氏は二種類の土器(隆起線紋土器, 爪形紋土器)それぞれが同質で広域分布を示すと見なすために、福井洞穴で、土器を包含しない層の上の層から隆起線紋土器が出土し、そしてより上層から爪形紋土器が出土したという一地方の一遺跡の層位的事実が、九州—本州規模の広域編年に援用できることになり、隆起線紋土器が最古という認識に到達しているのである。これが、〈隆起線紋土器東漸論〉とは別の〈もう一つの隆起線紋土器最古説〉である。隆起線紋土器を単一段階として扱い、と同時に爪形紋土器も単一に扱い、隆起線紋土器と爪形紋土器それぞれが広域な



分布をしめすことを重視するために、福井洞穴での層的事実が一気に全国編年の根拠に移行できると見なされたのである。山内氏の場合、そのような判断から、小瀬が沢洞穴の成果は最古式縄紋土器の追求から離れ、別の評価の対象に落ちついてしまうのである。また、福井洞穴の隆起線紋土器や爪形紋土器に伴う細石器は九州地方の縄紋式それ以前の伝統の残った在り方と見なすのである〔山内1969b：12頁〕。

図版1～4は1961年提出の学位請求論文（公刊1979年）に附属した図版から転載したもので、小瀬が沢洞穴の資料であるが、すぐ後（1962年）に草創期として区分し直した時期に相当させていた土器の一部である。小瀬が沢洞穴資料（図版1～4）を見ると、中村孝三郎氏が押点紋土器として提示し、1971年に佐藤達夫氏が窩紋土器として命名・区分した土器が網羅されていないことが分かる（図版3上段左から二番目が「押点文土器」として中村氏が提示する口縁部破片である）。また、佐藤氏が篋紋土器とした土器は分析の対象に上がっており（図版3参照）、縄の側面圧痕が注意されていて、当該遺跡の爪形紋土器も掲載され（図版1・2・3）、曾根の爪形紋土器に似ていることが解説されている〔山内1979：60-61頁〕。そして、草創期提唱の翌年の解説を参照すると、1960年に調査された室谷洞穴の成果を取り入れて爪形紋土器や隆起線紋土器を除いた小瀬が沢洞穴資料は爪形紋土器より新しく、縄の回転圧痕が盛行する室谷下層式の型式学的に遡った様相（「小瀬ヶ沢式」）と見なされ〔山内1963：5頁〕、晩年に展開された、室谷下層式以前の「始源縄紋の諸型式」〔山内1971〕の骨格も出来上がっていたことが分かる。

二つの隆起線紋土器最古説を概観した。付言すると、それは、アプローチを異にする二つの隆起線紋土器最古説が、それぞれの立場から福井洞穴の層的事実を重視して、隆起線紋土器に後続するのは全国的に爪形紋土器であるという変遷観を共有していた、ということである。

では、この二つの隆起線紋土器最古説は如何なる問題点を有していたのであるかを論じ、何故に筆者が佐藤達夫氏の問題提起にこだわるのかを、佐藤氏の論点が共有されなければならないと主張するのかを述べておきたい。このことは、遡源期を提唱することに関わるため、避けては通れないのである。

#### ハ. 二つの隆起線紋土器最古説が抱える問題点

〈隆起線紋土器東漸論〉の問題点は、先に引用した「問題は土器の編年の位置づけを石器に求めたことにあろう」という佐藤氏の指摘に尽きる。換言すれば、各地の隆起線紋土器の比較が充分に行われたか、疑わしいのである。佐藤氏がかかる批判を展開した時点では、福井洞穴に於いて、細石器（4層）→隆起線紋土器+細石器（3層）→爪形紋土器+細石器（2層）、が報告されていたこと〔鎌木・芹沢1967〕を確認しておこう。

現実には、佐藤氏の批判は受け入れられることなく、芹沢氏や小林氏に代表される〈隆起線紋土器東漸論〉が繰り広げられてくるが（註2）参照）、我々が気がつかなければならないことは、福井洞穴の隆起線紋土器が最古を起点とする〈隆起線紋土器東漸論〉は、この遺跡で、土器+細石器という伴出関係が、一回性ではなく複数の土器型式に及ぶという意味での継続性を示すことで、大き

く変貌を余儀なくされて来た考え方である、ということである〔大塚 1989 f : 11-27頁〕。この点が、佐藤氏の批判では十分検討されていなかったのである。また、〈隆起線紋土器東漸論〉に対する批判は佐藤氏以来培われてきているが〔例：土肥1982, 栗島1988 a〕, 細石器と土器の関係性に対する事実認識の転移を正しく見きわめていない点で有力な反論を形成し得ていない。

福井洞穴の土器+細石器に関する事実認識の転移について総括する（詳細は既述〔大塚1989 f〕の参照を願う）。

回顧するに、福井洞穴の隆起線紋土器が最古であると立論されたのは、調査者の一人である芹沢長介氏が、福井洞穴の層位的所見を、細石器だけの段階の後に細石器が隆起線紋土器に伴い次の爪形紋土器には伴わない、と判断したことに始まる〔芹沢1962 a〕。福井洞穴に於いて、隆起線紋土器+細石器という限定的な関係であること、すなわち次型式に及ばないという点で土器と細石器の伴出関係が一時的であることが、福井洞穴の隆起線紋土器が全国編年上最古と見なす根拠にされたのである。当時、小林達雄氏も隆起線紋土器+細石器という一回性が福井洞穴の隆起線紋土器が最古ということの根拠であることを追認・強調していることが〔小林1962〕, それを裏付けている。

両氏は、福井洞穴の3層出土の隆起線紋土器には細石器が伴うが、他の地域の隆起線紋土器には細石器が伴わず、しかも、この福井洞穴の上層の2層の爪形紋土器の層には細石器が伴わず、長脚鏃が伴うことを、福井洞穴出土の隆起線紋土器が最古ということの根拠にし、それに支えられて隆起線紋土器の東方への伝播〈隆起線紋土器東漸論〉を主張するのである〔芹沢1962 b : 34頁, 小林1962: 8頁〕。

だが、実際は、土器と細石器との伴出関係をめぐる福井洞穴第一次調査所見は、芹沢・小林両氏が主張するような、隆起線紋土器+細石器（3層）という一回性を支持するものではなかった。むしろ、当初から、隆起線紋土器と爪形紋土器とに亘って細石器が伴出すると報告されていたのである〔鎌木・芹沢1960, 1962〕。つまり、福井洞穴に於いては土器と細石器の伴出は、隆起線紋土器+細石器（3層）→爪形紋土器+細石器（2層）、という継続性を示していたのが本来である。

その事情は1963年の「長崎県福井洞穴の第2次調査略報」がよく伝えている——「ところが、第2次調査における詳細な観察の結果、鎌木の考えが正しく、爪形文土器と細石刃・細石核とは同じ時期の所産だということが明らかになった。九州北西部において土器発生以後に細石刃が使用されたのは、隆起線文土器の時期と爪形文土器の時期との2時期にまたがってであったとみとめざるをえないのである。そうすると、まだ本州では細石刃と土器との伴出はみとめられていないうえに、隆起線文土器には有舌尖頭器がともなうことがはっきりしている。このような問題を今後どう解釈していったらよいのか、非常に興味ふかいところであろう。……九州には細石刃がおそくまで残り、本州では有舌尖頭器がこれにかわったかもしれない。」〔鎌木・芹沢1963 : 2頁〕, と。

結局、福井洞穴の三次に及ぶ調査所見は、土器と細石器の伴出関係が、隆起線紋土器+細石器（3層）→爪形紋土器+細石器（2層）、となり、土器と細石器の伴出関係が継続的であることがはっきりと提出されたのである〔鎌木・芹沢1967〕。この所見を吟味するならば、細石器が複数型式

にわたって継続的に伴出することで、福井洞穴の隆起線紋土器が最古で東へ伝播するという主張の根拠になった、隆起線紋土器+細石器、という一回性が否定されたのである。ということは、福井洞穴の成果とは、調査者である鎌木・芹沢両氏に「九州には細石刃がおそくまで残り、本州では有舌尖頭器がこれにかわったかもしれない。」と判断させたように、皮肉なことに、隆起線紋土器に於ける広域編年上の最古の判定に、複数の土器型式と継続的な伴出関係を有する細石器を用いることは出来ないということに帰着し、同時に隆起線紋土器が東へ伝播していくという見方は疑わしいことに帰着するのである。

では、どうすべきか。これはきわめて単純であろう。佐藤氏が説くように、土器どうしを比較する、これに尽きる。

そもそも、最初の立案に於いて事実支持されていなかった〈隆起線紋土器東漸論〉は、隆起線紋土器の東への伝播という図式を再度提示しているにすぎないのであって〔大塚1989 f : 11-27頁〕、福井洞穴出土の隆起線紋土器が最古ということが、各地の隆起線紋土器の比較（地域編年を踏まえた上での広域対比）という本来必要であった考古学的手続きからは明快に証明されていなかったのである。特に、芹沢氏の唱えるように、隆起線紋土器や爪形紋土器を「過渡期」や「晩期旧石器時代」／「中石器時代」にあてる提唱は極めて問題が多いのである（註4）。

他方、〈もう一つの隆起線紋土器最古説〉も、各地の隆起線紋土器の比較が正しく行われたかどうかという意味ではよく分からない点があると言わざるを得ない。

山内氏の考え方は先にみたように同一隆起線紋土器広域分布論とでも呼ぶべきもので、福井洞穴の隆起線紋土器を他の隆起線紋土器より古いとは考えないのである。これは〈隆起線紋土器東漸論〉に対する反措定としての立場として重要であるが〔山内・佐藤1962 : 24頁〕、しかし、その認識がどう形成されたか調べていくと案外手がかりは少ないといわざるを得ない。どうも、縄紋文化起源論争は、神武天皇東征論と同趣の思考に対する再度の戦いと規定したことが、山内氏の思考を大きく方向付けているといわねばならないであろう〔山内1969 a (1966)〕。先験的な神話的パラダイムを排することは先史考古学の重要課題であるが——山内氏の縄紋土器型式編年研究の意義である〔大塚1989 f〕——、直接土器の分析をするには、また次元の違う手続きが必要な筈である。具体的に隆起線紋土器をどう分析したのか、どうしてもその点が判然としないのである。

1962年の時点では草創期を提唱しながら、「またこれら最古の早期縄紋式における土器そのものに、大陸から渡来の装飾紋様があるだろうか？／回転縄紋ははじめ狭く（小瀬ヶ沢式及び東釧路式）、後に広がって発達する傾向を示しているが、なわの側面を押したものはむしろこの時期に多く見られ、器面一面に何段かつつけられるものがある（本ノ木及び東釧路）。そしてより以前には縄紋は見られなくなるらしい（福井、曾根、下頃部等）。よって側面及び回転押圧痕は、ともに日本に渡来後発達したものかとも思えるのである。／この間大陸方面に特定な石器類を持ち、これらと類似する土器をも有するところがあれば、縄紋土器の原郷土は近いというべきであろう。しかし土器は地方的な変化を持ちやすく、石器ほど用途に則した形を保ちえない。土器では、同様なそ（遡）源

の可能性はあるいはないものかもしれない。」〔山内・佐藤 1962：26頁〕（註5），という判断から、「土器製作だけが伝来し，その後内地において形態・文様の細部が発達したと考えるに至った。渡来土器の見込みはなくなった。」〔山内1969b：16頁〕，という判断の変遷から根拠を探るしかないだろう。

推測するに，土器製作だけが伝来し，しかも地方的変化をもちやすい土器のことだから，各地の土器に変化があっても同じに見なすべき，ということなのであろう。先に紹介したように，山内氏が広域に分布する隆起線紋土器を同等に扱うのは，このような判断に由来するのであろうか。だが，そこから出てくるのは，土器は地方的変化を持ちやすいという認識から，土器による大陸との直接対比は出来ないが，土器製作だけが伝来したのであろうという推測が果たして合理的なのだろうか，という疑問である。

本来，山内氏は，「縄紋土器の由来を知るには，先づ最も古い縄紋土器を決定することが必要である。」〔山内1932b：86頁〕，という姿勢に立ち，具体的方針としては「仮に一地方で最古の式が発見されたとしても，それはその地方即ちその式の分布する範囲で通用するに過ぎない。各地方に於ける古式土器が検出され，そして充分比較されなければならない。そして遂に縄紋土器の系統をその上限まで遡り得るであろう。」〔山内1935：36頁〕，と，古式縄紋土器研究の方針を提示しながら，問題となる土器群について地方差年代差を吟味しながら「縄紋式の底」は未だ見えずという慎重な主張してきた立場であることから考えると，1960年代の氏の隆起線紋土器最古説に於いても各地の隆起線紋土器の比較が充分おこなわれたかという点では，残念ながら不明な点が多いといわざるを得ないのである。例えば，〈隆起線紋土器東漸論〉を別にすれば1962年に小林達雄氏が提示した古式縄紋土器型式編年（図2）に於いては，特徴を異にする各地の隆起線紋土器がきわめて簡潔的確に論述されており，しかも，その後隆起線紋土器の報告は『日本の洞穴遺跡』を代表に，1962年～1969年の間，隆起線紋土器の報告や論説が続いて刊行されており，種々の検討が可能であった筈なのである。現に，佐藤氏が提示した，隆起線紋土器最古説批判を基本に据えた新編年案とは，小林氏の編年を批判的に検討したのが基本にあり，しかもその際，1962年～1969年に刊行された報告書や論文が種々の判断に寄与していることは引用文献から容易に判断がつくだけに，山内氏の隆起線紋土器が最古という判断が，氏の信条とする編年研究の中での的確な手続きを踏まえたのかは問題であろう。1960年代，実質的な広域編年としては小林氏のそれが唯一であろう。

〈隆起線紋土器東漸論〉にしても〈もう一つの隆起線紋土器最古説〉にしても，「隆起線紋土器を最古として，縄紋式土器の起源問題は決着したとしばしば断定的にいわれている。しかしかりに隆起線紋土器が最古であったとしても，それを言葉の厳密な意味において最古と断定しうる根拠は一体どこにあるのだろうか。」〔前掲〕，という佐藤氏の疑問に対しては，それぞれの論説は根拠が明快とはいえないであろう。学統的立場を重んじる方々からは信じがたき事と大きく反発されるかもしれないが，1960年代の縄紋文化起源論を巡る論争の時代，古式縄紋土器の基本的基礎的な編年作業が決して充分におこなわれていなかったことを今率直に認めなければならないであろう。隆起

線紋土器が各種古式縄紋土器の中でも古相の重要な土器であることは、隆起線紋土器最古説によって認識されたが、隆起線紋土器の実態（地方差年代差）を明らかにするための編年的作業が必ずしも充分になされた上での隆起線紋土器最古説ではないのである。従って、佐藤達夫氏の疑問は極めて正当といわねばなるまい。隆起線紋土器最古説に収斂していくことは最古の縄紋土器を追求する方針に狂いが生じていたと反省しなければならないのである。

## 二. 佐藤達夫新編年案の意義

以上のようなまとめに対し、自説のためのご都合主義的扱いであると批判を受けるかもしれないが、決して極論ではないことを冷静に理解いただきたい。

佐藤案（図3）は、それまでの草創期編年研究に於いて最古式の追求の過程で時としておろそかになりかけていた土器自体の比較検討という手続きを各地の土器に適用しまとめたのであって、本来の意味での縄紋土器型式編年研究である。筆者が佐藤案にこだわり、長年この案の検証に時間を費やしてきた結果、批判すべき点など色々なことが見えてきたが、佐藤案の意義をこのように確信するに至った。各地の土器の吟味から縦横に連続性を辿り（この作業は1930年代に山内清男氏を中心とした縄紋土器型式編年研究が遂行した作業である）、その連続性の中に入らない土器を見いだし、隆起線紋土器最古説に拘泥せず、隆起線紋土器以前の縄紋式の存在（図3）を指示したのであるから、その姿勢は正しく尊重されねばならないのである（註6）。

佐藤案は提示以来種々の批判を受けている。例えば、篋紋土器、爪形紋土器の位置づけは前に引用した如く小林氏の批判の方に分があり、筆者も篋紋土器と爪形紋土器の位置づけに反対しているが（前篇参照）、「かりに隆起線紋土器が最古であったとしても、それを言葉の厳密な意味において最古と断定しうる根拠は一体どこにあるのだろうか。」という問いかけは上述の如く正当である。また、小林達雄氏から窩紋土器の窩紋は縄紋の仲間が施紋されているのだから、隆起線紋土器以後の多縄紋土器の古い部分に位置づけるべき旨が再三述べられ、そのために窩紋土器の位置づけに反対するが〔小林1978, 1987 a, など〕、隆起線紋土器でも少例であるが東日本を中心に各時期にあるようであるから、窩紋が縄による施紋であっても、反論にはならない（後述する）。また、南原式の隆起線上の刻紋・刺突紋が窩紋土器の窩紋に由来すると考えるから〔大塚1989 c, 1990 a〕、隆起線紋土器以前という提起は重要と考える。これは、小論でより具体的に述べることとなる。

ところで、最古式縄紋土器の問題とは少しニュアンスを異にするが、室谷洞穴での井草式の出土を契機に（本報告は1964年刊行〔中村・小片1964〕）、それより下層の多縄紋土器の評価について、東北編年に於ける関東燃糸紋土器型式・井草式以前存否問題が同時進行していたのであり、必ずしも井草式以前として賛意をえられない点については、1968年の小林達雄氏の室谷第一群土器（室谷下層式）の細別研究〔小林1968〕で、それが井草式以前であることの基本的整理が付けられ、氏による研究の意義は大きい（その間の事情・問題点は小林氏の研究論文の序文で要約されている）。佐藤氏が検討を加えている研究を見渡せば〔佐藤（達）1971 b : 122-123頁〕、佐藤編年は一方で小林氏に代表される隆起線紋土器編年についての再検討であり、他方で、小林氏の室谷第一群土器の細

大塚達朗

|                       |                  |  |                             |                               |                        |             |                         |         |
|-----------------------|------------------|--|-----------------------------|-------------------------------|------------------------|-------------|-------------------------|---------|
| 繩<br>文                | IV<br>期          | 回<br>轉<br>施<br>文                         | 貝殼沈線文<br>捺型文<br>無型文<br>(尖底) | 福井 I 上黒岩 4 層<br>上黒岩 6 層       | 卯ノ木<br>神宮寺, 大川<br>樋沢下層 | 橋立 III, 普門寺 | 田 戸下<br>三 戸板<br>平 花輪台 I | 尼子, 上原田 |
|                       |                  | 繩<br>文                                   | 繩<br>系<br>文<br>(尖底)         | 九合洞窟                          | 室谷 II 群 {              | 橋立 II {     | 稻荷台<br>夏 島<br>井草, 大丸    | 日向      |
|                       |                  | III<br>期                                 | 繩<br>文                      | 繩<br>羽<br>狀<br>繩<br>文<br>(平底) | 室谷 I 群 {               | 西・谷         | 神立沢 {<br>一の沢            |         |
|                       | 早<br>期           | II<br>期                                  | 押<br>壓<br>施<br>文            | 押壓繩文 (石槍)<br>(平底)             | 本の木                    | 西鹿田 II      |                         |         |
|                       |                  |  | 爪<br>形<br>文                 | 爪形文 (長脚鎌)                     | 福井 II                  | 枇ノ湖, 曾根     | 小瀬ヶ沢 II                 | 西鹿田 I   |
| I<br>期                | 隆<br>起<br>線<br>文 | 微<br>隆<br>起<br>線<br>文                    |                             |                               |                        |             | 日向, 一の沢                 |         |
|                       |                  | 細<br>隆<br>起<br>線<br>文<br>(有舌尖頭器)<br>(丸底) |                             |                               | 小瀬ヶ沢 I                 | 橋立 I        |                         |         |
|                       |                  | 上黒岩 7 層                                  | 柳又 B II                     |                               |                        |             |                         |         |
|                       |                  | 隆起線文 (細石刃)                               | 福井 III                      |                               |                        |             |                         |         |
| 無<br>土<br>器<br>時<br>代 |                  |  | 福井 IV                       | 柳又 A II<br>荒屋<br>矢出川          |                        |             |                         |         |

図 2 小林達雄氏による古式縄紋土器型式編年 (1962年)

|         | 九 州        | 四 国 | 岐 阜   | 長 野 | 関 東     | 新 潟      | 山 形 |
|---------|------------|-----|-------|-----|---------|----------|-----|
| 窩 紋     |            |     |       |     |         | 小瀬ヶ沢     |     |
| 篋 紋     | 中尾岳<br>(?) |     |       |     |         | 小瀬ヶ沢     |     |
|         |            |     |       |     |         | 小瀬ヶ沢     |     |
| 爪 形 紋   |            |     | 花ノ湖 I | 曾 根 | 西 鹿 田   | 小瀬ヶ沢 1・2 |     |
|         |            |     | 九 合   | 石小屋 | えんぎ山(?) | 〃 3      | 日 向 |
| 隆 起 線 紋 |            |     | 九 合   | 狐久保 |         | 田 沢      | 日 向 |
|         | 福 井        |     |       |     |         |          | 日 向 |
|         |            | 上黒岩 |       | 狐久保 |         |          |     |
|         |            |     | 酒 吞   | 石小屋 |         | 小瀬ヶ沢     | 日 向 |
|         |            |     | 荷 取   | 橋 立 | 小瀬ヶ沢    | 日向・一の沢   |     |
| 廻 転 繩 紋 |            |     |       |     |         | 小瀬ヶ沢     | 日 向 |
| 半 転 繩 紋 |            |     |       | 石小屋 |         | 小瀬ヶ沢     | 日 向 |
| 側 面 圧 痕 |            |     | 九 合   | 石小屋 | +       | 本ノ木      | 一ノ沢 |
|         |            |     |       |     |         |          | 一ノ沢 |
| 廻 転 繩 紋 |            |     |       |     |         | 室谷下層 1   | 一ノ沢 |
|         |            |     |       | 石小屋 | 西 谷     | 〃 2      | 一ノ沢 |
|         |            |     |       |     |         | 〃 3      |     |

図 3 佐藤達夫氏による古式縄紋土器型式編年 (1971年)

別研究を踏まえ、諸洞穴遺跡の調査成果に依拠し、その改訂を考えたものといえよう。従って、佐藤編年はそれ以前の編年研究と無関係に構想されたものでは決してない。それ以前の研究の批判であり、それを踏まえた自説の開陳である。

このように学史的総括をすることが妥当ならば、それを踏まえた今日的課題はどうまとめるべきであろうか。第一に隆起線紋土器の実態を把握することが問われよう。その場合、〈隆起線紋土器東漸論〉という形でまとめられているが、各地の隆起線紋土器の特徴を簡明的確に論述した実質的な編年作業の発端となる小林達雄氏の研究の再検討である。つまり福井洞穴の隆起線紋土器は指頭押圧痕をもつ横走隆線を有し、上黒岩岩陰の土器では波状の加飾をもつ隆線であることがまとめられたが〔小林1962：8頁〕、それが年代差とみるべきなのかどうかということである（図2）。佐藤案で逆にやや新しい位置に福井の指頭押圧が加わる隆線が置かれ、上黒岩の波状隆線紋の土器はより後出位置に置かれる（図3）。小林案と佐藤案の違いは最古の隆起線紋土器がどの地方にあるかの違いであるが、果たして列島のどこかに最古の隆起線紋土器は偏在するのであるか。各地の最古の隆起線紋土器は何か、九州の隆起線紋土器に並行する土器は本当に何か、それらの関係が正確に認識されねばならない。具体的には泉福寺洞穴の豆粒紋土器、隆起線紋土器を再検討することから始めることになる。さらに、課題として、山内清男氏による土器製作だけが伝来したという考え方に対する回答が必要であろう。隆起線紋土器を土器製作技術から見たときに、隆線に違いがあるだけで全く同一の技術的基盤によるのかどうかである。

これらを今日的課題と考えそれに対する回答を出してみると、隆起線紋土器以前の土器の实在を認定しなければならないのである。

#### 4. 窩紋土器再評価のための前提作業としての隆起線紋土器の分析

##### 1. 泉福寺下層式の意義

泉福寺洞穴の報告〔麻生ほか1985〕は事実の指摘とそれに基づく解説がきちんと対応しないところに問題があるが、丁寧に報告を検討して追証できるのは、隆起線紋土器より層位的に下層から豆粒紋土器がそれだけで出土するという意味での安定した層はない、である。つまり、豆粒紋土器単層はない、が最終的調査所見である〔麻生ほか1985、大塚1987a、1989a、岡本1988、など〕。今、現に麻生氏らは豆粒紋土器最古説に依拠してはいないのである〔麻生ほか1991、白石1990b〕。豆粒紋土器最古説はもはや提唱者側から否定されたことを確認しておく。

泉福寺洞穴の隆起線紋土器・豆粒紋土器包含層の内容は、福井洞穴3層と同じ内容と考えてよいであろう〔鎌木・芹沢1965、1967、芹沢1973、芹沢ほか1974、など〕。そこで、最終報告が出されている泉福寺洞穴を基準に九州の隆起線紋土器を議論すると、泉福寺下層式とでも呼ぶべき型式上の単位が見いだされてくるのである。

先ず、泉福寺洞穴が複数の洞穴で構成されることに注目して遺跡内分析にとりかかる。第2洞穴3・4・5トレンチ8層〈速報9層〉・10c層〈速報10層〉の土器をまとめて見ると、4トレンチ

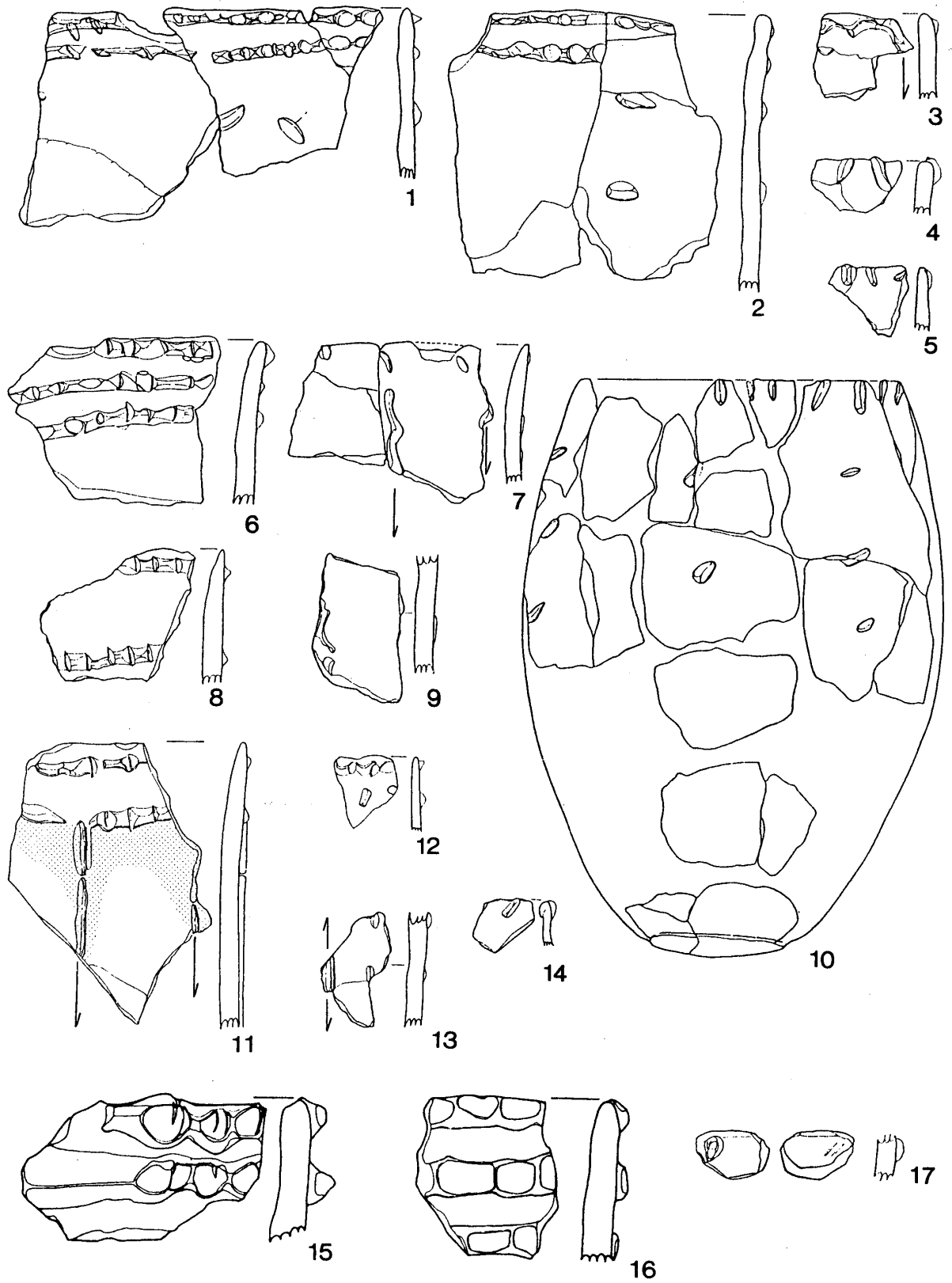


図4 長崎・泉福寺洞穴の泉福寺下層式の古い部分（1～10，縮尺11/20）と新しい部分（11～14，縮尺11/20）と当該式の南九州例（15・16鹿兒島・伊敷 17同・塚ノ越，縮尺1/2）



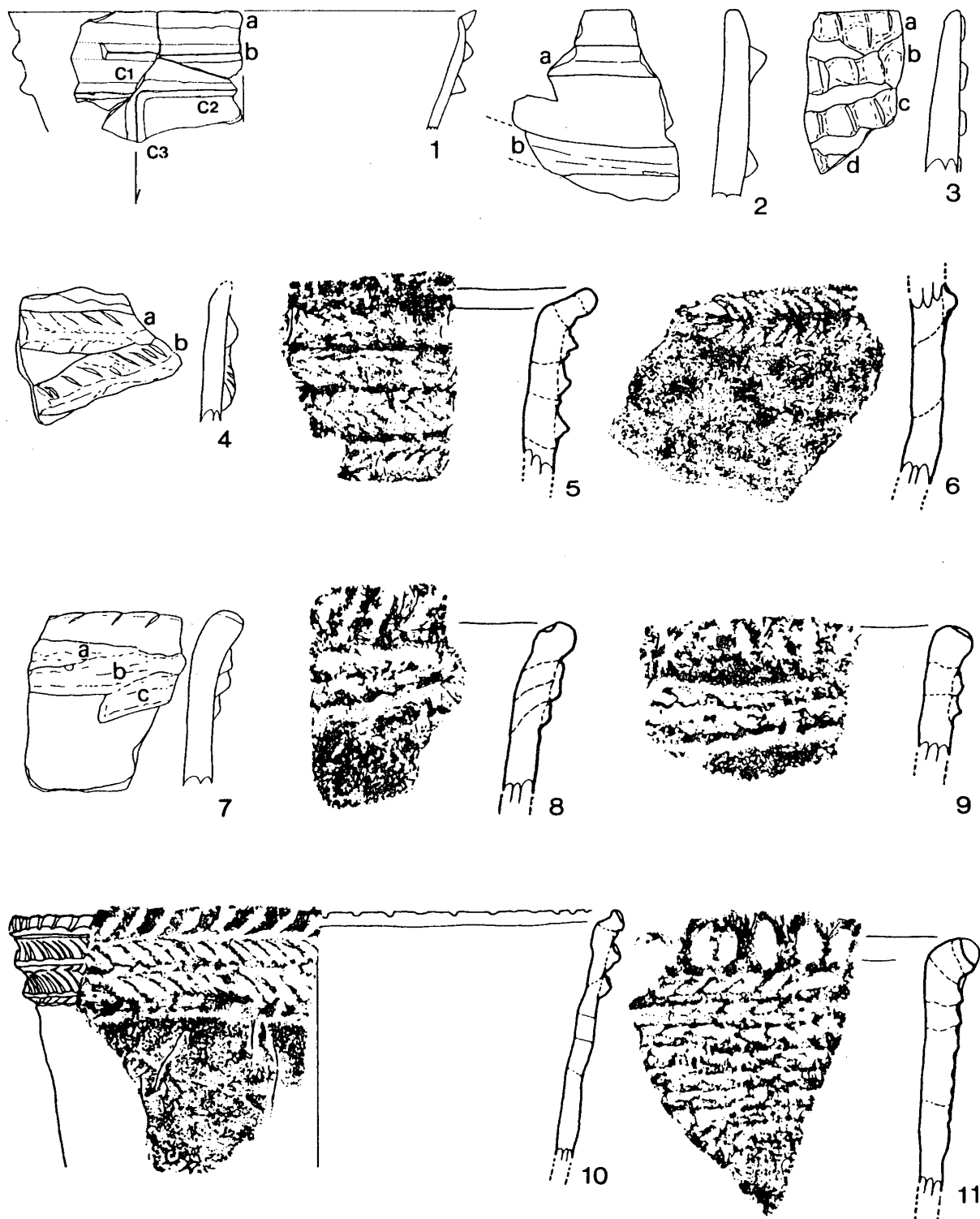


図5 泉福寺下層式に後続する九州地方の隆起線紋土器型式一西ノ園式（1～3：鹿児島・伊敷，縮尺1/4 2宮崎・大平 3同・西ノ園，縮尺1/2），大平式（4～6：宮崎・大平 5・6同・堂地西，縮尺1/2），堂地西式（7～11宮崎・堂地西，縮尺1/2：11は該式の指頭押圧による爪形紋土器で福井式の祖型）

を中心に遺物ブロックがあることが判明する。

土器の出土上の特徴を挙げよう。図4-1・2は、3トレンチと4トレンチ10c層出土の破片が接合している〔麻生・白石1978, 1979, 大塚1989a〕。同7はトレンチと層を越えての接合破片で(7の右側が、4トレンチ10c層出土口縁部破片で、その左側が5トレンチ8層出土の口縁部破片である)、同9は接合しないが7の土器と同一個体の破片である〔麻生ほか1985:24頁〕。4トレンチを中心に土器の接合関係が窺えることを指摘しておこう。しかも4トレンチ出土土器は個体数からも見ても多いようである。

次に、土器の特徴を見る。隆起線紋土器や豆粒紋土器のほかに、横走隆線紋と豆粒紋が併用される土器(図4-1・2)や豆粒紋と垂下隆線紋が併用される土器(図4-7<9は同一個体>),つまり二種類の隆線紋・豆粒紋併用土器がある。各個体の横走隆線紋は隆線上の加飾が指頭押圧によることではそれぞれに於いてよく似ているもの(連鎖状横走隆線紋)が多い上に、以前指摘したように〔大塚1989a〕,垂下隆線紋では蛇行垂下隆線紋として極めて斉一性が高い(例:図4-3・7・9)。この蛇行垂下隆線紋は隆起線紋土器(図4-3)に用いられる一方で、豆粒紋土器の胴部に併用されている(図4-7・9)ので、一見範疇の違う隆起線紋土器と豆粒紋土器の関係性のいわば橋渡しをしている。

これを総合すれば、第2洞穴3・4・5トレンチの類型的には四種類になる土器群は出土状況と型式学的特徴から極めて良好なまとまり〔隆起線紋土器—二種類の隆線紋・豆粒紋併用土器—豆粒紋土器〕と捉えるべきなのである。当然ながら、これを土器型式上の単位と考えねばならないことになる。詳しい議論は拙稿を参照していただきたい〔大塚1989a, 1990a〕。

しかも第3洞穴7・8トレンチの垂下隆線紋と比較すればその単一性が明確になる。つまり、7・8トレンチにも隆起線紋土器、二種類の隆線紋・豆粒紋併用土器、豆粒紋土器の四種類の土器があるが、蛇行垂下隆線紋はほとんど見られず、逆に3・4・5トレンチには見られない直線的垂下隆線紋(例:図4-11・13)が目立つのである——ただし、第3洞穴7・8トレンチに於いても、横走隆線上は指頭押圧で加飾される点では第2洞穴3・4・5トレンチの土器と共通している。

また、横走隆線紋は筆者のとなえる一帯型隆起線紋土器の紋様帯に配されているのであるが、そう見た場合、横走隆線紋と豆粒紋が併用される土器は一帯型隆起線紋土器の胴部に豆粒紋が併用されている訳で、それらを含めて横走隆線紋は一帯型隆起線紋の中でも全て上位紋様帯型に収束するのである。

さらに、織笠 昭氏の泉福寺洞穴の細石核の形態変遷の指摘が重要である。織笠氏によれば、第3洞穴の隆起線紋土器・豆粒紋土器包含層上層(8c層)にのみ顕著な細石核があるとのことであり〔織笠1991:83頁〕,蛇行垂下隆線紋が古い特徴で直線的垂線紋が新しい特徴であると考えらるべきであろうということの傍証になる。直線的垂下隆線紋を基準に、例えば、図4-11~14が第2洞穴3・4・5トレンチの四種類の土器にそれぞれ後続する確実な部分と考える(11:隆起線紋土器, 14:豆粒紋土器, 12:横走隆線紋・豆粒紋併用土器, 13:豆粒紋・垂下隆線紋併用土器<14:7ト

レンチ 8 c 層, 11・12: 8 トレンチ 8 c 層, 13: 同 9 層〉)。

第 2 洞穴 3・4・5 トレンチの土器 (図 4-1~10), これを泉福寺下層式の古い部分, 第 3 洞穴の直線的垂下隆線紋を指標にまとまる部分 (図 4-11~14) を泉福寺下層式の新しい部分と呼び分けるべきであろう。古式も新式も上位一帯型としては同じだが, 垂下隆線紋が単なる直線的隆線に代わるのが新しい。

この型式提唱は九州地方の遺跡を広く見てゆくことで確実なものになる。俯瞰すると, 土器に巻き付けて出来る横走隆線紋が太いことでは共通するが, 横走隆線紋に環状貼付と螺旋状貼付の別が遺跡に応じて在ることが分かる [大塚 1989 a・b, 1990 a]。なお, 環状貼付の横走隆線は加飾が指頭押圧でなされ連鎖状を呈することではほぼ共通する。泉福寺洞穴は環状貼付のみで構成され, 福井洞穴の資料も同様である (実見於東北大学)。さらに螺旋状貼付と直線的垂下隆線紋が一体となっている例 (図 5-1) がある。螺旋状貼付には間隔があくものと密なものがあり, 間隔があく例の中で隆線上の加飾が連続的指頭押圧 (図 5-3, 図版 5-1) と指のつまみ (図 5-4~6, 図版 5-3) の別があり, 密な螺旋状貼付の土器 (図 5-7~10) は隆線上加飾は指によるつまみでなされ, つまみ方が弱いものから強くつまむなどの変異がある。また, 密な螺旋状貼付例 (図 5-10) とよく似た口縁部形態・口唇端部刻紋をもち, 隆線紋を配せず直接器面に带状に指頭押圧を加え指頭圧痕紋 (爪形紋) をもつ土器 (同 11) があることも視野に入ってくる。これは, 密な螺旋状貼付隆起線紋土器と組成をなすと考えなければならない土器である。また, 隆起線紋土器と層位差をもつ福井 2 層・泉福寺洞穴 6 b 層の器面全面の指頭圧痕紋の爪形紋土器 (福井式) の祖型は密に螺旋状に隆線を貼付する段階に組成する带状の指頭圧痕紋土器としか考えられないのである。従って, 図 5-7~11 はいちばん新しい隆起線紋土器と考えて差し支えあるまい。そうすると, 九州に於ける遺跡〈内 (層位別・地点別) 一問一群〉比較から, 隆起線紋土器群に他と区別すべき同質なまとまりが複数見いだされて来ること, しかもそれらが一つながりの変遷過程にあること, そして, 福井 2 層・泉福寺 6 b 層の福井式への変遷などが整然と整理されるのである。つまり, 隆起線紋土器の変化は, 環状貼付横走隆線 (蛇行垂下隆線紋→直線的垂線紋) →螺旋状隆線 (垂線紋は螺旋状隆線と一体化), となる。その間, 隆線上の加飾は指頭押圧から指のつまみに変わると考えられる。勿論, 密な螺旋状貼付隆線上に指頭押圧が加わる例があることを付言しておこう (図版 5-4)。この場合も, 螺旋状隆線に指のつまみを加えていき, 最後に巻き付ける隆線上に指頭押圧が加えられる。

ここでは変遷の概略を述べるにとどめるが, 横走隆線紋については環状貼付→螺旋状貼付という大きな変化があり, 螺旋状貼付には間隔をあけるものから密なものへの変化があり, その間に垂下隆線紋は蛇行から直線, そして螺旋状隆線と一体化となってその後形骸化するという過程が確実に読み取れる。そこで, 環状貼付で形成される横走隆線紋の土器については泉福寺洞穴資料がその中での変遷を基本的に網羅していると考え, その標式としての意義に鑑み, 泉福寺下層式と呼ぶべきことが妥当であると考え (蛇行垂下隆線紋を指標に第 2 洞穴は泉福寺下層式の古い部分がまとまり, 直線的垂下隆線紋が新しい部分の指標である)。細別に対しての比定は少量・小片のためむず

かしいが、南九州でも泉福寺下層式に対比できる資料は近年確実に増加している（図4-15・16）。とくに図4-17は鹿児島・塚ノ越遺跡〔宮田ほか1990〕出土の豆粒紋を有する破片である。

螺旋状貼付による横走隆線紋をもつ土器群に対しては、遺跡間比較と型式学的判断から、図5-1～3を螺旋状貼付の初現的様相としてとりあえずひとまとまりと考えたい。鹿児島・伊敷遺跡〔長野ほか1983〕出土の1の土器は上二条の横走隆線は環状貼付かもしれないが、下段の横走隆線は螺旋状に巡り垂下して終端となる（c1→c2→c3：時計回り）。宮崎・大平遺跡〔河口1963〕出土の2の口縁部破片は最上段の横走隆線から螺旋状貼付が始まっている（a→b：逆時計回りとなる希少例で左利きによると考える）。その終端は1のようになると見ている。一見、二条の環状隆線を螺旋状貼付で表現し直したかのようである点に留意したい。宮崎・西ノ園遺跡〔面高1987〕採集の3（図版5-1上段右）の口縁部破片は螺旋状貼付と指頭押圧が連続して行われる例で、1・2に比して多条的である点が重要であろう（a→b→c→d：時計回り）。

西ノ園遺跡では類似した資料が安定して断面から抜き取られている（図版5-1）。指頭押圧が横走隆線上に連続する新潟・田沢遺跡〔芹沢ほか1968, 1974〕の隆起線紋土器（図版5-2）はこの土器との関係を考えねばならないであろう。田沢例が螺旋状貼付か否か判断は難しいが、極めて類似していることは否定できないと思われる。故に、佐藤氏が説くように九州の隆起線紋土器より古いという位置づけは再考を要する。田沢例は東西交流の一端を示す重要な資料と考えるべきであるというのが筆者の強調したいことである。本州に於ける多条型の起源に関与すると筆者は見なすが、ここではこれ以上触れない。

さて、螺旋状の巻き付けが多くなり一見多条化することを重視し、本州にも類似資料のあることなどを重視し、その意義を提起したく、まとまった資料が得られた遺跡〔面高1987〕にちなみ、これらを西ノ園式と呼び、諸氏の注意を喚起したい。宮崎・岩土原遺跡〔鈴木(重)1973〕で検出された隆起線紋土器も該式に相当する。

次は間隔はあく点では前段階と差がないがおしなべて多条化の傾向があり、隆線上の加飾が指のつまみが変わる一群の土器（図5-4～6）を、当該例が最初に検出された遺跡〔河口1963, 河口ほか1982〕の土器（図5-4=図版5-3, a→b：時計回り）にちなみ大平式と呼ぶことにしている。鹿児島・鎌石橋遺跡〔河口ほか1982〕や宮崎・堂地西遺跡〔永友・日高1985〕に好例がある。

さらにその後を、密な螺旋状貼付隆起線紋土器（図5-7～10〈7 a→b→c：時計回り〉）・指頭押圧紋（爪形紋）土器（同11）の良好な資料が検出された遺跡にちなみ〔永友・日高1985〕、堂地西式と筆者は呼ぶことにしている。関連資料は先に紹介した大平、鎌石橋の他に、鹿児島・東黒土田遺跡〔瀬戸口1981〕に好例がある。

もちろん、以上は大量の土器資料が得られない中での細々とした分類作業のため、より良好なまとまりが得られた時点で続き具合について検討しなければならないが、当面は以上の細別を提示しておく。関連した議論については、拙論〔大塚1989 a・b, 1990 a, など〕を参照していただきたい。さらに、爪形紋土器・福井式の祖型は九州の隆起線紋土器型式中にあることを確認したい。

さて、このような九州隆起線紋土器の編年的まとめを踏まえるならば、そこから帰納されることは、泉福寺洞穴の隆起線紋土器〈泉福寺下層式〉は九州最古の隆起線紋土器型式である、という点に尽きる。つまり、福井洞穴の調査を通して提起され、小林達雄氏が強調した、隆線上が指頭押圧による圧痕で連鎖状になる隆線紋をもつ隆起線紋土器（上位一帯型土器）は九州で最古の位置づけを与えなければならないのである。本節では、この点の追証を述べた。

#### ロ. 泉福寺下層式に並行する他地方の土器型式の確認

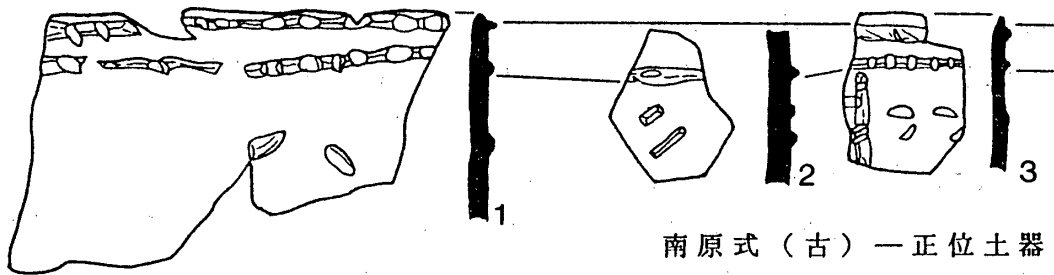
本節では、泉福寺下層式に並行するのは関東では南原式、そのホライズンにのるのが東北では日向Ⅰa式、四国では上黒岩Ⅰ式であることを再確認する。各地の最古型式が並行するという見解である。そして、横走隆線紋の加飾法の違いが、九州では指頭押圧で、四国以東はつまみ、刻み、刺突であるとまとめられることを述べる。

広域比較の論点は、何度も述べることになるが、鈴木保彦氏がいち早く指摘したように（鈴木（保）1982：45-50頁）、九州のみならず本州にも実際は分布する豆粒紋であり、他方、泉福寺下層式に通有な上位一帯型である。結論を述べるならば、それらを合せもつ、南原式が第一に比較すべき並行型式である（図8～10、図版6）（註7）。上位一帯型、横走隆線紋の条数の変異（1～3）、豆粒紋、蛇行垂下隆線紋等に於ける同質性は泉福寺下層式（古）と南原式（古）を編年学上並行と見なさなければならぬであろう（図6）、ということである。

他方、双方決定的に違うことがある。指頭押圧による連鎖状紋が横走隆線上を飾るのが泉福寺下層式で（連鎖状横走隆線紋）、横走隆線上に波状紋が安定し（波状横走隆線紋）、他に工具痕による刺突・刻紋がある横走隆線（装飾的横走隆線紋）を持つのが南原式（古）で、違いは顕著である（工具は硬質なものと軟質なもの例えば縄と考えているが〔原川・鈴木1981〕、それらの刺突紋・刻紋が窩紋に由来するのである：後述）。さらに土器扱いという新視点から細かく見ると、隆線紋様の違いのみならず、その作出を全うする動作上の流儀の違いが判明し〔大塚1990a〕、さらに熟考するならば、土器作り上の戦略が違うのである（別節で述べる）。それをまとめるならば、九州と関東の隆起線紋土器は別個の土器型式、である。豆粒紋の派生とも絡めるならば、別型式であることはより明瞭で、これも何回か強調しているように〔大塚1987a, 1989a, 1990a, など〕、豆粒紋は別型式間の交渉と編年関係を語るものとして評価すべきである。ここではこれを総括する。

南原式は関東第Ⅰ期の隆起線紋土器〔大塚1982〕を基準に、新資料の増加とこちらの研究の進展にともない、いくつか変更を加えて提唱している土器型式である。その一部が拙論に付した編年表に盛り込まれている〔大塚1989b：260頁〕が、スペースの関係で意を尽くしていない。その後、抄報で紹介した、口唇部が欠けているが口縁部付近の破片〔大塚・小川・田村1980：第2図-14, 4頁〕と豆粒紋を有するが上下関係が分からず困っていた破片（以前白石氏にも意見を求めた）が接合したため、関東第Ⅰ期の土器のに内容に触れることがあり〔大塚1990a〕、前篇でも言及したが、充分に変更点を述べていないので、先ずそれを説明しよう。ただし、改訂編年案の全体については紙数の関係もあるのでここでは触れない。

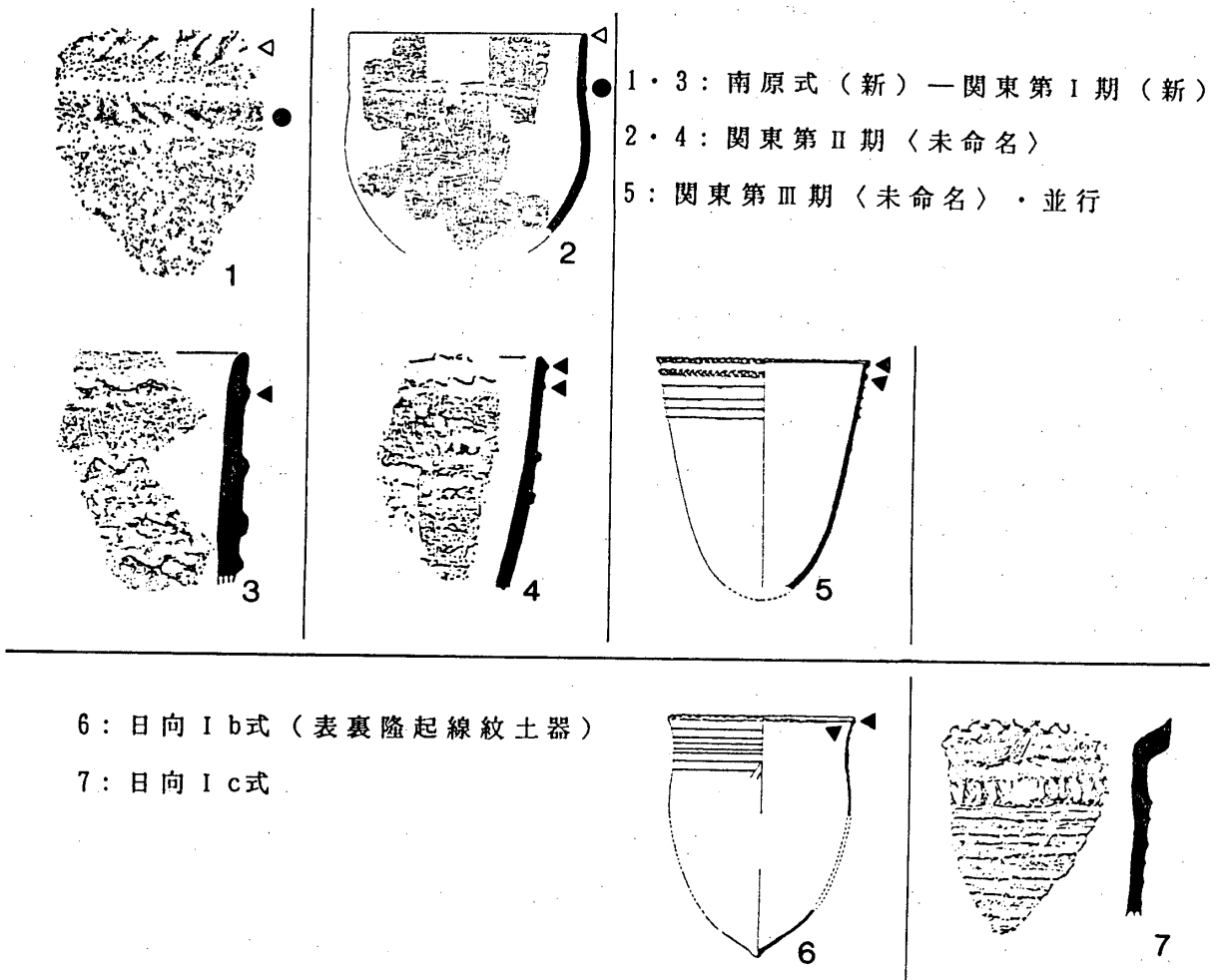
上位一帯型隆起線紋土器—紋様帯に関わる様々な属性の由来を探る



南原式（古）—正位土器扱い

泉福寺下層式（古）—逆位土器扱い

図6 隆起線紋土器より古い縄紋土器を探る方法（1長崎・泉福寺 2千葉・南原 3東京・多摩ニュータウン No.426, 縮尺1/3）



1・3：南原式（新）—関東第Ⅰ期（新）

2・4：関東第Ⅱ期（未命名）

5：関東第Ⅲ期（未命名）・並行

6：日向Ⅰb式（表裏隆起線紋土器）

7：日向Ⅰc式

図7 隆起線紋土器の縄紋式縦横連鎖構造・抄（1千葉・成井 2神奈川・上野第2 3千葉・新東京国際空港 No.12 4神奈川・広福寺境内 5長野・石小屋 6・7山形・日向, 縮尺不同）

南原式は古い部分と新しい部分に分けた。神奈川・黒川東〔村田ほか1979〕,同柏ヶ谷長ヲサ〔中村(喜)ほか1983〕,東京・多摩ニュータウン No.426〔原川・鈴木1981〕,千葉・南原〔大塚・小川・田村1979, 1980〕等の例を古い部分,新しい部分は千葉・成井遺跡〔篠原1981,大塚1982〕と同新東京国際空港 No.12 遺跡〔鈴木(道)1986〕例を当てる。前に,良好なまとまりと判断した,黒川東,多摩ニュータウン No.426,南原,成井資料に新たに例を加えて設定した(註8)。以前関東第Ⅰ期新の基準資料とした千葉・成井遺跡〔篠原1981,大塚1982〕とよく似た資料の同新東京国際空港 No.12 遺跡が報告されたことにより〔鈴木(道)1986〕,南原式の新しい部分がほぼ決まったことで古い部分も安定した次第である。成井と空港 No.12 両遺跡の資料は波状の隆線紋の特徴がそっくりで,しかも有舌尖頭器群の形態的特徴も極似していることが指摘されており〔鈴木(道)1986:12頁〕,この二遺跡を基準に新しい部分に充当した次第である。特筆すべきは,報文では別の解釈を示されたが,実見したところ,図10-11が胴部に縦長の豆粒紋を有することである。そのことから,採集資料としての不安は残るが,千葉・林跡遺跡〔田村ほか1982〕の一例(図10-14)を豆粒紋の破片と考えたのである〔大塚1989b:260頁〕。このことは,空港 No.12 例(図10-10)のような,飾りのない隆線が斜走する土器が共通することも関係している(図10-15)。この二遺跡の資料により南原式の新しい部分でも豆粒紋が組成すると判断した次第である。

前に関東の隆起線紋土器の変遷として,一帯三条型の中での紋様帯が下がる組列つまり上位紋様帯型から下位紋様帯型に移行する組列を想定したが——黒川東例(図8-3)→多摩ニュータウン No.426例→図7-4(紋様帯の隆線は二条しかないように図ではみえるが,一本剥落している)→同5〔大塚1982:108頁〕——,正にその良好な資料が空港 No.12 例(図10-8=図7-3)であり,改めて空港 No.12 例を充当し組列を確認できた〔大塚1988a〕(図7-3→同4→同5)。他方で,日向Ⅰb式に特徴的な土器である土器内面隆線貼付土器(筆者は表裏隆起線紋土器と命名)が持つ口縁部の一条の波状隆線と内面に一条の波状隆線が,関東第Ⅲ期並行の石小屋例の二条の波状装飾隆線と関係があり,その変形であることを論究し,他地域の編年に比して実は遺跡内での層位別の確認と遺跡間で異同の吟味から編年基盤が安定している東北編年——日向Ⅰa→日向Ⅰb→日向Ⅰc〔加藤(稔)1961,柏倉・加藤1967,加藤(稔)1967,佐々木1971,1973,1975〕——の中の日向Ⅰb式に関東第Ⅲ期並行の石小屋例(図7-5)を対比することで,中部・関東が東北編年に正確に対比でき,のみならず,各地域の型式変化の動向の一端を明らかにできた〔大塚1988a〕。また,前篇で改めて説明したように神奈川・上野遺跡第1・同2地点の個別別資料が関東第Ⅱ期(個別別資料B・C・F)と第Ⅲ期(個別別資料A・D,個体1)に分けられることから,個別別資料F(図7-2)は最初に関東第Ⅰ期新とおいた成井例(同1)からの変化,つまり一帯一条型に於ける下位紋様帯型の変化を見いだしたのである(個別別資料B・Cは上位一帯型である)。成井例と個別別資料Fは口唇端に刻紋をもち,隆線上の刻紋は左上がり右下がり,共通し,個別別資料Fが下位紋様帯型に変化したという違いがある。筆者の改訂編年案で図7-2・4はともに下位紋様帯型に於ける別の組列としてあげているのである。ちなみに,この口唇端の刻みは窩紋土器から由来するものである(図

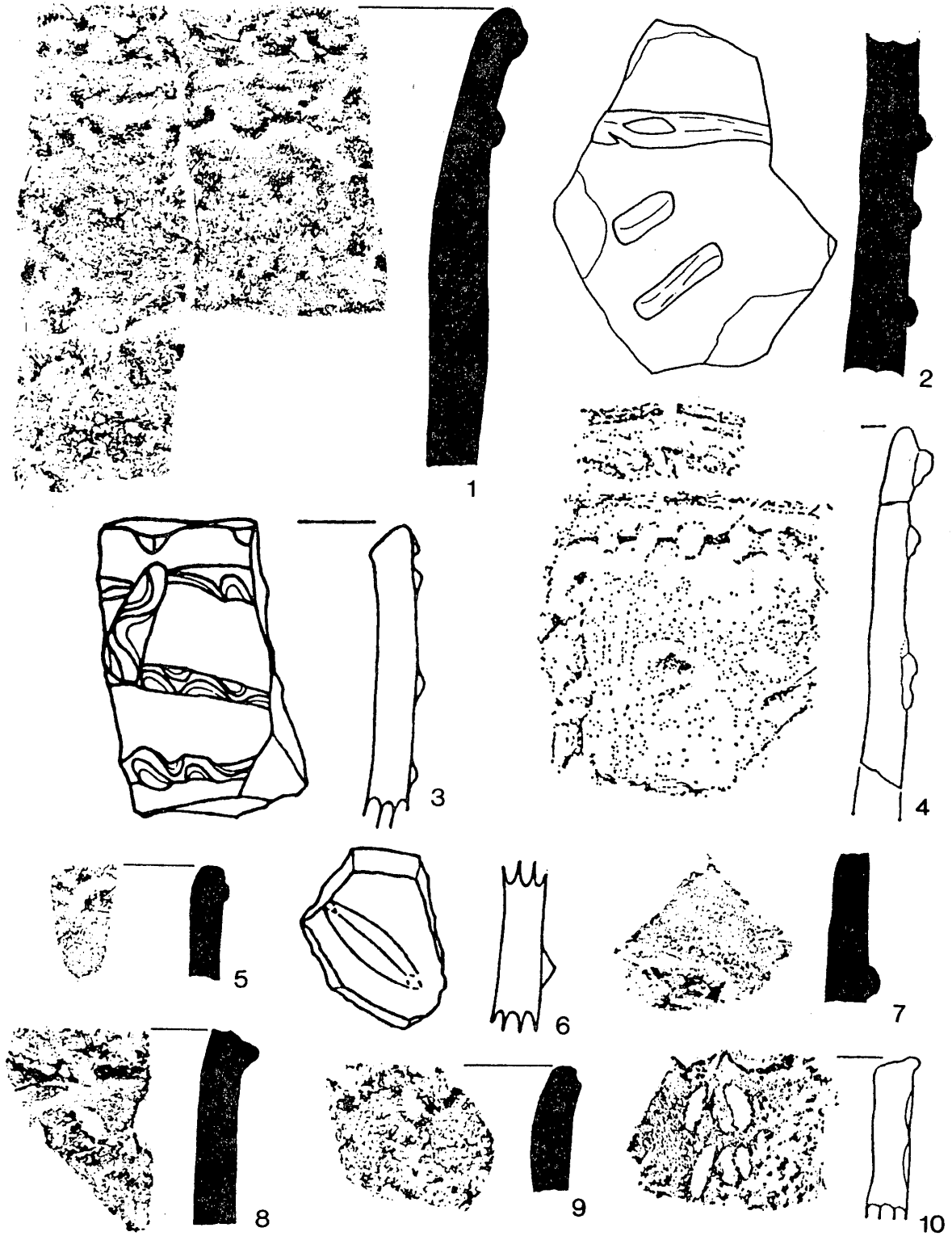


図8 関東・南原式の古い部分1 (1・2・5・7~9 千葉・南原 3・6神奈川・黒川東 4東京・多摩ニ  
ュータウン No.426 10神奈川・柏ヶ谷長ヲサ, 縮尺1/1)



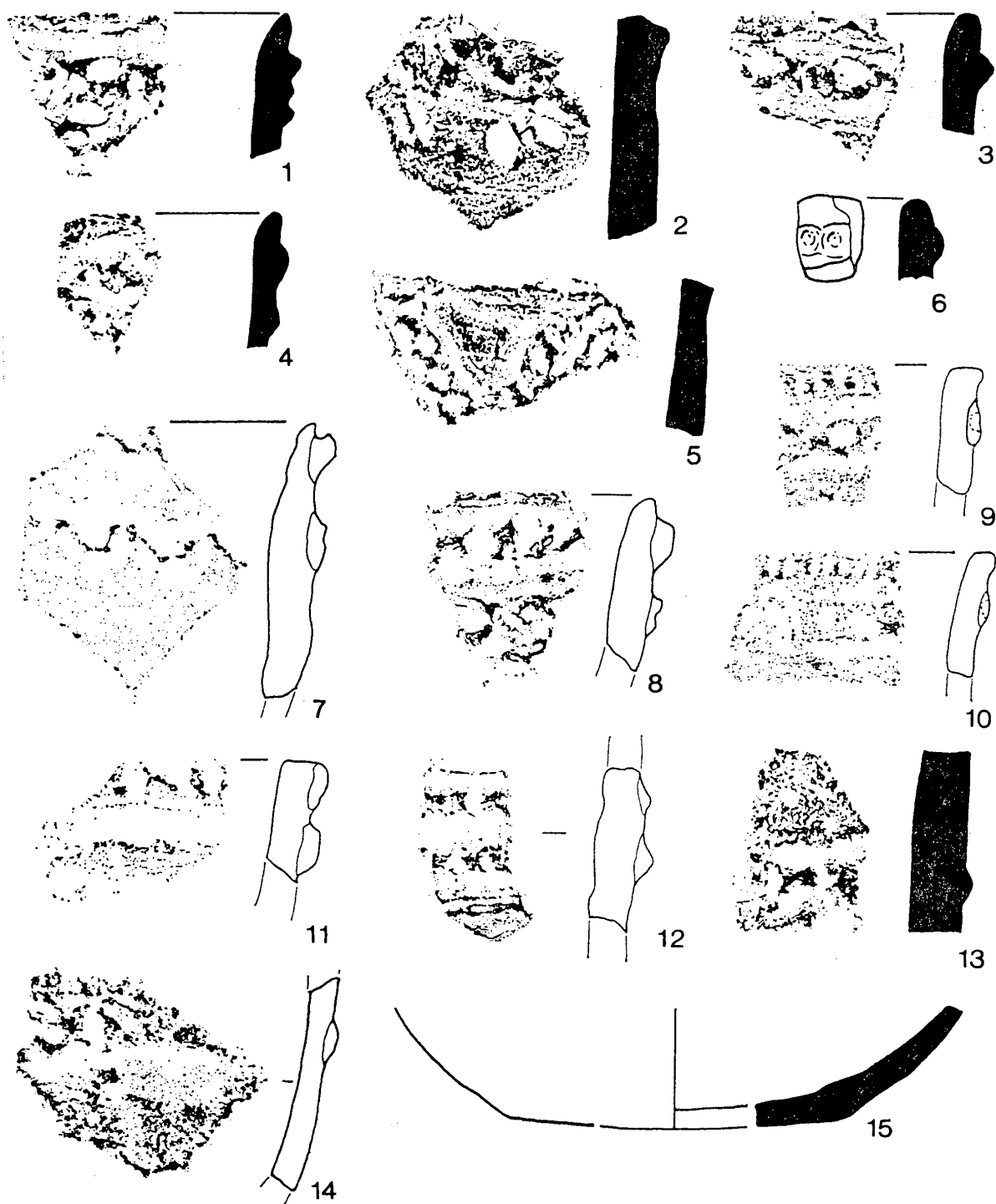


図9 関東・南原式の古い部分2（1～6・13・15千葉・南原 7～12・14多摩ニュータウンNo. 426, 縮尺1/1）——13は伴う泉福寺下層式系連鎖状横走隆線紋資料

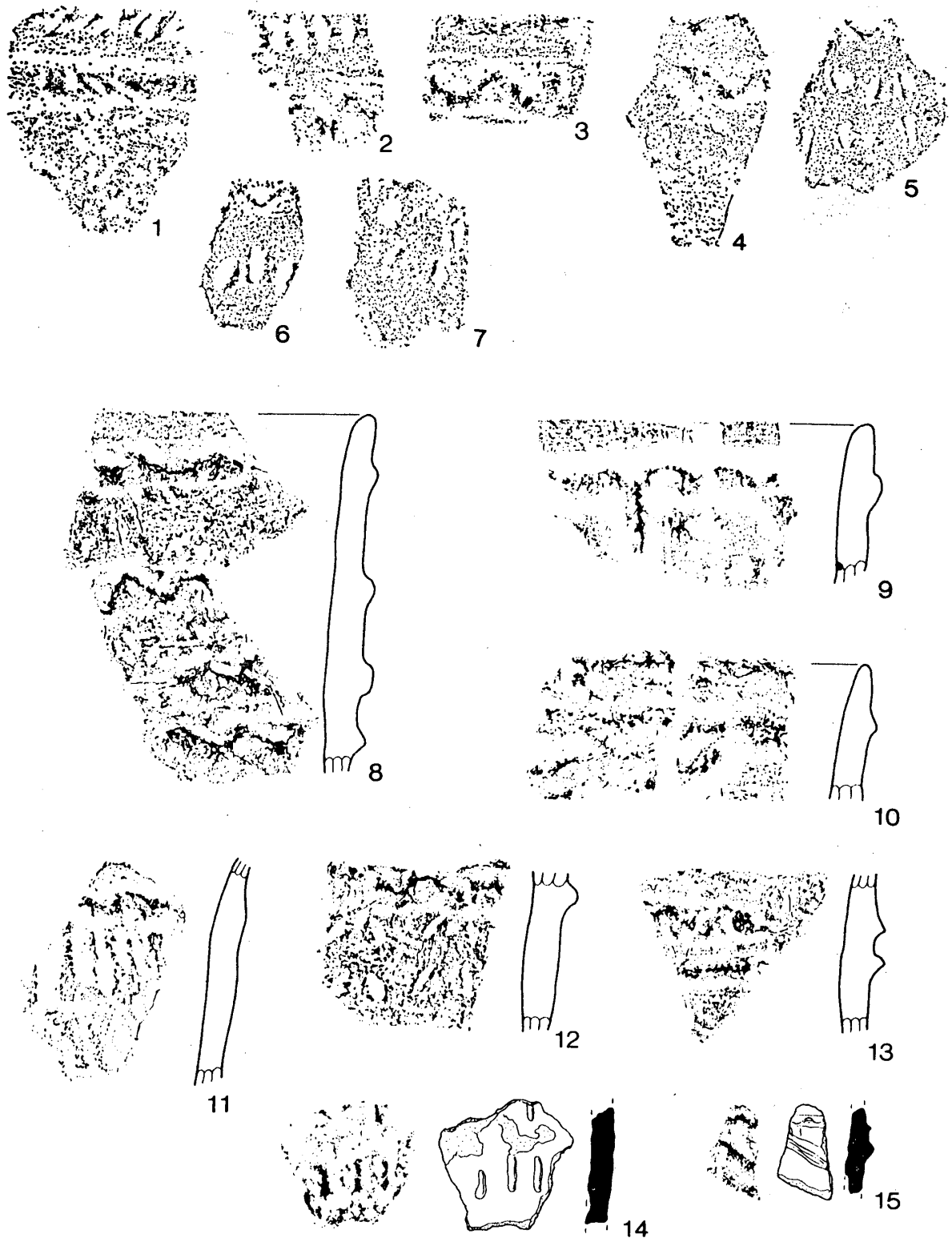


図10 関東・南原式の新しい部分（1～7千葉・成井，縮尺1/1 8～13同・新東京国際空港 No.12  
14・15同・林跡，縮尺1/2）——11は横走隆線紋と豆粒紋が併用される土器

14-8, 図9-9, 図16参照)。重要なので後述する。

さらに以上のような資料操作が関東編年での連続性の確認であり、南原式の古い部分と考える資料が正にこの連続性の中に入らず、それ故により古く措くとなめらかな変遷が込められることが再度確認出来たのである。弁別の基準を説明すると、上位一帯型に於ける垂下隆線紋の様相の違い、斜走隆線紋の様相の違い、異種横走隆線重畳での組合せの違いである。南原式の古い部分では、図8-1のように蛇行垂下隆線紋で、また、同4, 図版6-7のように刻みあるいは刺突による装飾的垂下隆線紋であるのに対し、南原式の新しい部分では、図10-9のように単なる直線的な垂下隆線紋である。また、関東や東北では横走隆線紋に直交する垂下隆線紋の他に、斜走する（幾何学的な構成になる）隆線紋が安定してあるが、古い部分の図8-3では波状の斜走隆線紋で、かつ、図9-1・4・5では刻みや刺突を伴う装飾的隆線紋であるのに対し、新しい部分の図10-10・15は加飾のない直線的隆線紋である。南原式の横走隆線紋では異種隆線重畳があり〔原川・鈴木1981, 大塚1982〕, 古い部分の図8-4は上が波状横走隆線紋で下が刻紋を持つ装飾的横走隆線紋, 図9-8はその逆である。それに対し新しい部分の図10-13は上が波状横走隆線紋で下が単なる直線的横走隆線紋である。このように基本的構成では共通しながら細部が違い、また遺跡単位で見た場合、それぞれが別に存在するのであるから、それぞれを時期差と考えなければならないのである。先に確認した連続性と合わせれば（図7）、図8・9, 図版6を古い部分と考えることになるのである。

そのように関東第Ⅰ期を改訂した南原式を見れば泉福寺下層式と並行関係で捉えなければならないことは明瞭であろう。そもそも、豆粒紋は両方にある——泉福寺下層式：図4-1・2・4・5・10・12~14・17/南原式：図8-2・3・5~7, 図10-11・14。しかも、それぞれの地域で古・新に分けた隆起線紋土器どうしが対応する。具体的には、それぞれが上位一帯型として共通し、新古の判別に有力な属性である垂下隆線紋に於いて、蛇行垂下隆線紋がそれぞれあり——泉福寺下層式古例：図4-3/南原式古例：図8-1——, 次に、飾りの無い直線的垂下隆線紋も両型式の新しい部分にあり——泉福寺下層式新例：図4-11/南原式新例：図10-9——, また、上位一帯型で胴部に豆粒紋を併用する土器があるのも共通するのであるから——泉福寺下層式古例：図4-1・2/南原式古例：図8-2, 泉福寺下層式新例：図4-12/南原式新例：図10-11——, あきらかに相同な部分で共通した変化を東西で具現していたと見なければなるまい。

どちらかが古くてどちらかが新しいという問題ではなく、同質な変化が東西で同時に見られるのである。このことは重大である。

この点を豆粒紋からさらに見てみよう。新たに接合することが分かった南原例（図8-2）が重要な位置を占めよう。この資料により以前からの論点である、指によるつまみの応用の一つである沈紋と互換的に浮紋が存在するという論点〔大塚1987a, 1989a〕が、より明確になったといえよう。図4-1と図8-2と図4を見れば、同じ部位に豆粒紋や「ハ」の字形爪形紋が施紋されていることが分かる（図6参照）。泉福寺洞穴の本報告では、図4-1について、豆粒紋で「ハ」の字形爪形紋を表現したことが示唆されており〔麻生ほか1985：23頁〕, 筆者の見方が有効であることを意味しよ

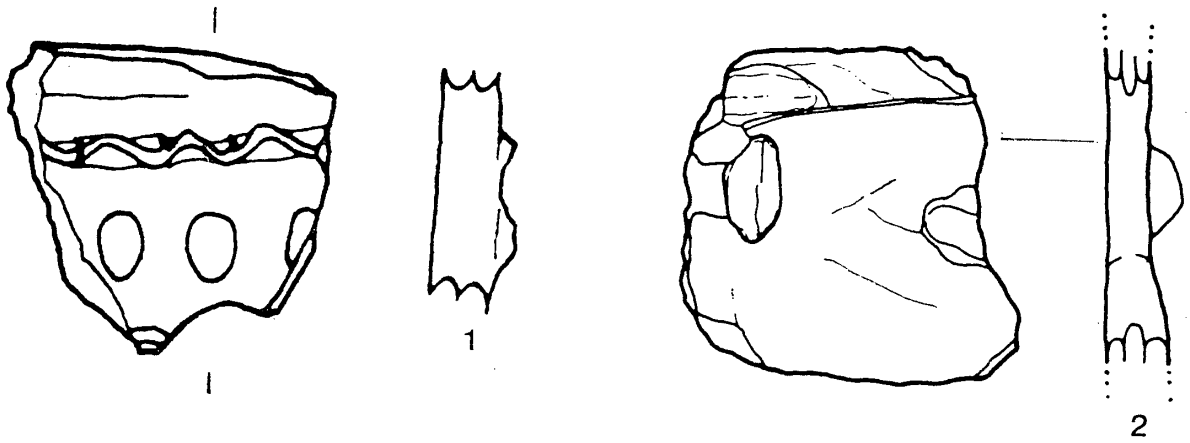


図11 四国・上黒岩Ⅰ式と豆粒紋（縮尺 1/1）

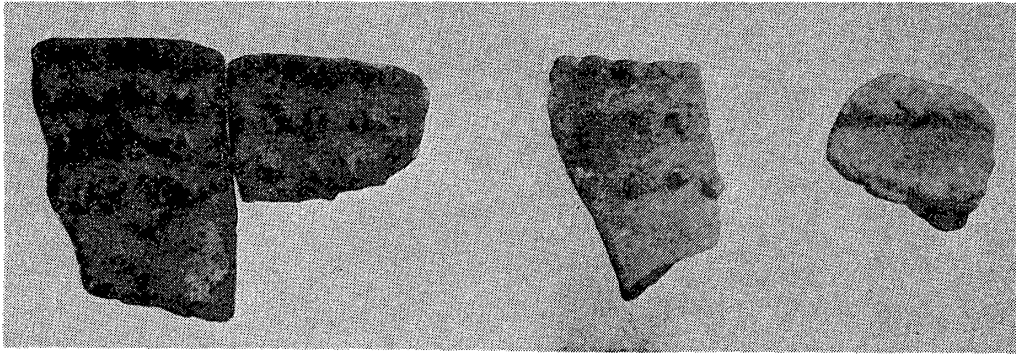


図12 東北・日向Ⅰa式



図13 新潟・壬遺跡出土の泉福寺下層式系連鎖状横走隆線紋資料（縮尺 1/1）

う。豆粒紋と「ハ」の字形爪形紋は近い関係にあることが導出されるのである。

例えば、指でつまむことが胴部に直接施されれば「ハ」の字形爪形紋であり（図8-4・8・10、図9-2）、同手法が口唇部にかけて施されると「ハ」の字形爪形紋を構成する爪形紋の一方が口唇にかかり、他方が器面にかかり、いわば波状装飾紋を形成するのである（図8-9・10）。一方、豆粒紋を見ると、南原例（図8-5）の豆粒紋は図8-9例の波状装飾紋と同じ位置に施紋されているのが分かる。さらに、同6・7例に見られる豆粒紋は「ハ」の字形爪形紋と同じく体部に施紋されている。そう考えてくると、「ハ」の字形爪形紋、あるいは波状装飾紋が施紋される部位と同じところに豆粒紋が付いていると見て取れる。例えば、黒川東の口縁部破片（図8-3）は口唇部付近に豆粒紋を持つ珍しい例であるが、豆粒紋が波状装飾紋と同じ位置に施紋されることがよく分かる。

これらが示すことは、「ハ」の字形爪形紋あるいは波状装飾紋と豆粒紋が互換性を持って並存しているということである。つまり、「ハ」の字形爪形紋あるいは波状装飾紋が沈紋で、豆粒紋が浮紋という紋様表出上の関係を持って互換的に存在していると思なせるのである。現に南原遺跡では沈紋である「ハ」の字形爪形紋あるいは波状装飾紋と、浮紋である豆粒紋が並存しているのだから、この見方は問題ないであろう。

再度強調するならば、横走隆線上波状紋、「ハ」の字形爪形紋、波状装飾紋が同一の手法で形成されて、隆線をつまむと波状紋、器面を直接つまむと「ハ」の字形爪形紋、口唇に指をかけてつまむと波状装飾紋、という関係になっている。さらに、そこに、豆粒紋が浮紋として、「ハ」の字形爪形紋、波状装飾紋の沈紋に互換性をもって並存しているのである。ということは、豆粒紋は、南原式古から展開する指先でのつまみという手法の紋様表出の際の形象上の変異と捉えるべきであろう。豆粒紋は起源的にはつまみ手法の沈紋から互換的に浮紋として形成されたと考えるべきであろう。その意味で、豆粒紋は南原式に包括されるもので、沈紋としての「ハ」の字形爪形紋・波状装飾紋と、浮紋として対になる紋様と捉えなければならないのである。

ところで、豆粒紋の類例は以前から四国・上黒岩岩陰遺跡から出土することが報じられてきたが〔江坂1974、芹沢ほか1974、など〕、図11-1は採集資料であるが豆粒紋をもつ土器として実測図が公表されている上黒岩例である〔十亀1985〕。指のつまみによる波状横走隆線紋と豆粒紋が併用されていると報告されている。さらに、報文では、下端に隆線があるとのことであり、筆者の分類では多帯型に該当するであろうと考えてきた〔大塚1987 a, 1989 a〕。他方、同2は痕跡的にしか横走隆線が残っていないので〔山本ほか1989〕、隆線上の加飾は判然としないが、一帯型隆起線紋土器が豆粒紋を併用する例である。四国・上黒岩Ⅰ式の隆起線紋土器の紋様帯の在り方とつまみ手法が安定していること〔大塚1982〕、そして、装飾的横走隆線紋もあるらしく〔鎌木・高橋1965、芹沢ほか1974〕、南原式と近いが、「ハ」の字形爪形紋の存否が判明しない。他方、以前に指摘したように〔大塚1982〕、つまみ手法による波状横走隆線紋や刻紋・刺突紋をもつ装飾的横走隆線紋をもつ上位一帯型を中心とした日向Ⅰa式〔加藤（稔）1961、柏倉・加藤1967、加藤（稔）1967、佐々木1971、1973、1975、など〕が紋様帯構成と紋様手法から南原式に並行と思ななければならないが、該

式では豆粒紋と「ハ」の字形爪形紋の存否が判然としない(図12)。佐々木洋治氏によれば、日向Ⅰb式には「ハ」の字形爪形紋があると説かれているが〔佐々木1975:30頁〕、それ以前については積極的に触れられていない。

決して多い資料ではないが、これらに基づき各地の最古相の隆起線紋土器の在り方を、九州<連鎖状横走隆線紋・豆粒紋>—四国<波状横走隆線紋・装飾的横走隆線紋・豆粒紋>—関東<波状横走隆線紋・装飾的横走隆線紋・豆粒紋・「ハ」の字形爪形紋>—東北<波状横走隆線紋・装飾的横走隆線紋>、と図式化することが許されるならば、関東方面から豆粒紋が発生し、西方へ波及していったことが明らかに窺えるのである。従って、豆粒紋は並行関係の論定に有効な指標であるとともに、東西交流の指標とみるべきと考える。

しかも、東西交流という問題は、泉福寺下層式側からも検証できる。図9-13は抄報では刻みと単純に記述してしまったが〔大塚・小川・田村1980〕、指頭押圧による連鎖状横走隆線紋と分類すべき横走隆線紋を有する。さらに、本州に於ける連鎖状横走隆線紋の類例は新潟県壬遺跡にある(図13)。壬では円い凹みに爪の圧痕が残る典型的な種類で、南原例は指先を立てて押圧するため刻紋風になる泉福寺下層式例(図4-8)に極似する。豆粒紋に比べ極めて例数が少ないが、連鎖状横走隆線紋は東西交流の九州側の指標として今後も注意しなければならないことをここで指摘しておこう。

先に田沢例(図版5-2)を後出する時期の九州との関係で系統的編年的理解をすべきといったのは、このように東西交流が当初から見られるからである。田沢例の出現はそのような東西交流の継続の中で理解すべきで、本州で最古の隆起線紋土器の典型に置いた佐藤案は違うと考える。

九州<連鎖状横走隆線紋・豆粒紋>—四国<波状横走隆線紋・装飾的横走隆線紋・豆粒紋>—関東<波状横走隆線紋・装飾的横走隆線紋・豆粒紋・「ハ」の字形爪形紋>—東北<波状横走隆線紋・装飾的横走隆線紋>との図式化を踏まえ、泉福寺下層式—上黒岩Ⅰ式—南原式—日向Ⅰa式という、並行型式群を設定すべきであろう。そして、こうまとめた際の装飾的横走隆線紋の施紋手法が窩紋土器の窩紋手法と同じであることと、その意義は次章で扱うとして、もう少し隆起線紋土器に潜む差異を総括しておく。

#### ハ. 土器扱いの違い——正位／逆位——から見た土器作りの伝統の違い

小節ではもう少し別の角度から隆起線紋土器初頭に於ける差異を考察する。そのため、一方で波状横走隆線紋に着目し、波状紋圏(上黒岩Ⅰ式—南原式—日向Ⅰa式)を設定し、他方、連鎖状横走隆線紋に着目し、連鎖状紋圏(泉福寺下層式)を設定する。この二つの圏間で大きな違いがあることを重複を恐れずに〔大塚1990a〕、以下述べることにする。

<波状紋圏(上黒岩Ⅰ式—南原式—日向Ⅰa式)の正位の土器扱い> 先ず、四国から本州東北までの隆線上加飾のできる波状紋は手先との関係から正位の土器扱いでなされることを述べる。土器扱いとは、土器作りの各工程で作り出した土器と作り手の位置関係を問題にした見方である〔大塚1990a〕。土器作りは学習・伝承されるものであるから、技術という次元からはそこには土器作りにもふさわしいいわば「型」としての固有の動作が含まれなければならない筈で、それを復元するこ

とで、縄紋土器のより実体的な社会的文化的理解をめざすことを指向して、勘案した次第である。筆者は、縄紋土器と対峙するとき、「土器は土器から」という原則に則り、文化的コンテクストに関わる系統性、連続性等を吟味する研究レベルから、そのような文化的コンテクストを支える、土器と作り手というより実体的な人間行動という社会コンテクストに関わって、集団や個人の弁別を追求する研究レベルまでを射程におくべきと考えている。基礎には先学の研究が勿論ある〔山内1958, 1979, 佐原1956, 1959, 1962, 小林1967, 1983, など〕。

波状紋には、指のつまみによる隆線上加飾で出来る波形に二種類ある。左側が高く右側が低いもの（例：図版7上段＝図8-2）、逆に右側が高く左側が低いもの（例：図版8＝図9-1）、である（註9）。左高右低の波を、「Rの波状紋」と呼び、右高左低の波を、「Lの波状紋」と呼ぶことにする〔大塚1990 a〕。

Rの波状紋例にしるLの波状紋例にしる、指先のつまみ・ひねりが加わった際の圧痕をさらに詳細に観察するならば、波状に突出するように見える部分は、凹部から考えると、隆線の下端からやや鋭くさしこむようなあるいは切り込むようないわば爪形紋風な凹部と、隆線の上端に残されるやや浅い凹部とによる、一对の凹みからなることが分かる。形状がやや異なるこの一对の凹部の組み合わせが指先のつまみ・ひねりに対応するのであり、それで一つの波状紋なのであるから、具体的にどの指かを問うならば、一对の凹部の内、隆線の下端にあるやや斜めに鋭くさしこむような、あるいは下端から隆線を切り込むような爪形紋的凹みは親指に対応し、上方にあるやや浅い凹部は他の指に対応すると考えるべきであろう（図版7上段・図版8参照）。

つまり、Rの波状紋には右手の指によるつまみ・ひねりが対応し、Lの波状紋は左手の指によるつまみ・ひねりが対応すると想定すべきと思うが、さらにこのことを別の角度から検証してみよう。筆者が注目するのは、Rの波状紋とLの波状紋とでは量的在り方に非常に片寄りがあることである。圧倒的に多いのはRの波状紋で、Lの波状紋は実見して確認した限りでは、南原例（図9-1）の一例だけである。Rの波状紋が圧倒的に多い。一方、波状紋は細かな手先の作業であるから利き手で施紋されるものであろう。また、右利き左利きは時代・民族を問わず右利きが多い〔前原1989〕。これらを考え合わせると、量的に圧倒的に多いRの波状紋が右手の指によるもので、量的にきわめて少ないLの波状紋は左手の指によると考えなければならない。

今、Rの波状紋は右手の指、Lの波状紋は左手の指によると考えたが、左手の指にしる右手の指にしる、どちらにしる隆線の下端に親指の先があたるといふ土器観察から、土器の口縁部を上底部を下にするいわば正位の位置が帰納される。佐原氏の勘案〔佐原1956〕に従いながら考えると、右利きを例にとるならば、土器の口縁部を上底部を下にする位置や、口縁部を向こう側に底部を手前に、あるいは、作り手から見て口縁部を右上方に底部を左下方に位置させるなどの土器扱いが導き出されるのである。これを、広い意味で正位の土器扱いと呼ぶことにしよう。正位の土器扱いでは土器の重心が低い位置で作業がなされるといえよう。

要するに、右利きを例にすると、上述した波状紋を粘土紐上につけていく時、正位を基本に土器

の口縁部が作り手から見て前方に傾くか、右側に傾くような位置に土器があって、貼付された横走隆線に波状装飾が付けられているのである（註10）。ただし刺突紋・刻紋などの場合どのような位置関係を維持して施紋されているかは厳密には分かりづらいが、刺突紋・刻紋と波状紋が重畳する例（図8-4、図9-8）があるから、正位の土器扱いで隆線上加飾がなされるのであろうと推測したい。また、隆線を刻む場合、縦刻か左上がり右下がりの刻みが多いので正位の土器扱いで隆線が刻まれるとみるべきであろう。

〈連鎖状紋圏（泉福寺下層式）の逆位の土器扱い〉 泉福寺下層式では指先のつまみ・ひねりではなく指頭押圧を隆線上に加えるので、圧痕の凹みが連続する紋様、連鎖状紋が形成される。そして、指先の当たり方の違いから結果的にいくつかの指頭圧痕紋の変異が現出している。これらは、円いあるいは少し横長の凹みが連続するもの、そのような凹みの中に爪の圧痕を伴うもの、それらよりも隆線に対して指先がたつような位置関係で隆線に押し付けることで幅の狭い縦長の圧痕が刻紋風に連続するもの等の別が見られる。そして、これらの圧痕は各々そのみで連鎖状紋を形成する場合や、一本の隆線上に混在する例がある。後者の方が多いようである。それらは、指頭押圧を加える回数つまり施紋の進行幅と土器自体を回転させることがからみ、変異が多々見られるのであろう。さらには、指先が隆線の端にきて波状風になる（図4-3）などの変異がある。なお、基本となる泉福寺洞穴全体の資料の横走隆線紋についてはすでに細かく記載してあるので〔大塚1989 a, 1990 a〕, そちらを参照して頂きたい。

次に圧痕の方向等を見よう。圧痕のあり方から判断して、横走隆線に対して、指頭押圧を加える場合、指と隆線の関係は指が隆線に並行になるようにして押圧がなされていることが観察される。圧痕から判断して、指の先が右方向を向いて出来ていると判断できる圧痕についてその方向を示すべく「D」と呼び、反対に、指の先が左方向を向いて出来ている圧痕についてはその方向を「C」と呼び、区別することにしていく〔大塚1990 a〕。例えば、図4-15のように、円い凹みの中に、爪形紋がある例でははっきりと指先が右方向を向いている、つまりDの連鎖状隆線紋になるのが分かる。また、圧痕が刻紋風になる連鎖状隆線紋例（図4-8）でも爪の圧痕が三日月状の圧痕になるから、その弧状の圧痕の向きから指先の方向が判断できる。従って、本例ではDである。問題はくっきりと爪の圧痕がつかない円いあるいは横長の凹みが連続するだけの場合である。この場合も、凹みの中に浅いが三日月状の凹みが見いだせる場合（図4-2）はそれから判断する。しかし、圧痕内のそのような三日月状の凹みも判然としない例（図4-16）では、凹みの中の左右を見て圧痕の深さの変化を窺った。しかし、これは便法に過ぎず、方向の判断の誤りはあるかもしれない。正確な圧痕の方向を判断できるのは爪の圧痕を伴う例や刻紋風な例であろう。量的には爪の圧痕を伴う例や刻紋風な例が多いのであるから、全体的な傾向を窺う上では支障はないと考える。

そのような手続きを通じての観察結果は（幾分誤差はあるかもしれないが）、九州の資料を実見したかぎりDの圧痕紋ばかりのようである。

Dの圧痕ばかりであることを利き手に対応させて考えた場合、右手の指の圧痕と見なすのが自然



であろう。そのように判断するまでは比較的容易なのであるが、作り手と横走隆線紋上の連鎖状紋作出時の土器の位置関係の特定、土器扱いの特定には些か困難な問題に直面することになる。

波状紋圏では施紋に用いる指が、とくに親指の位置が特定できるので、右利きを例にとれば、波状紋の作出の際、土器の口縁部を上底部を下に、あるいは、口縁部を向こう側に、底部を手前に、あるいは、口縁部を作り手から見て右上方に底部を左下方に位置させ、土器を時計回りに回していることなどが導き出されたのであるが、連鎖状紋圏では指頭圧痕は一つの指先の圧痕のため、Dの圧痕が右手によることまでは比較的容易に想い至るのであるが、どの指か特定するには困難な点がある。筆者は横走隆線と指が平行になりながら押圧が行われる点に着目したい（前に分析を試みたときには深く考えなかったが〔大塚1990a〕、指の特定にはこれを重視すべきであろう）。その場合、親指が最も具合がよいであろう（勿論、第2指・第3指等の可能性を否定することはできないが、親指以外の指を用いる施紋は案外圧痕を付けづらい）。

もし指頭押圧に用いる指が親指ならば、波状紋圏に見られるような土器と作り手との位置関係と同じではこのような方向を示す圧痕は付けにくいのである。要するに、波状紋圏のように正位を基本にしたものではないのである。

右利きを例に考えると、泉福寺下層式では、親指で指頭押圧を加えるならば、佐原氏が注意した「土器を横にして、口を左に、底部を右にする場合」〔佐原1956：附記1.1〕、29頁〕は十分現実的なものと考えなければならぬ。さらには、土器の底部を上、口縁部を下にする場合、あるいは、作り手からみて底部を上しながら向こう側に位置させ、口縁部を手前に置いているなどを考えなければならぬのである。親指が用いられるならば、土器が占め得る空間的位置の範囲が波状紋圏とは決定的に違うことになるのである。

いくつかの可能性の中で筆者は泉福寺下層式の横走隆線紋上への加飾を、親指により加えられるものと考え、しかも右利きを例にとると、その際の土器と紋様の作り手との位置関係は、土器の底部を上、口縁部を下にする場合、あるいは、底部を上しながらむこう側に口縁部を手前に置く場合、あるいは、土器を横にして、口縁部を左側に、底部を右側にする場合等、波状紋圏とは違う位置関係にあることを強調すべきであろう（註11）。これを広い意味で逆位の土器扱いと呼ぶことにしている〔大塚1990a〕。つまり、波状紋圏と連鎖状紋圏とでは、土器を製作していく過程で土器扱いが大きく違う作業が含まれていることを想定しなければならない。

そして、前に詳述したように〔大塚1990a〕、以後の変化の中で逆位の土器扱いは螺旋状貼付を発達させるのである。九州では後続する、西ノ園式（図5-1～3、図版5-1）→大平式（図5-4～6、図版5-3）→堂地西式（図5-7～11、図版5-4）、でも一貫して明確な逆位の土器扱いを呈し、螺旋状貼付が発達するのである（註12）。

四国以東とはかなり異なる、九州には九州の伝統的な土器扱いが当初から確固として在ったといわざるをえない。当然、土器製作上の伝統の違いを想定せざるをえない。

＜正位／逆位土器扱いから見た土器作りの違い＞ 周知のように、土器作りとは複合した技術の

体系であり、その体系に關与する土器扱いの対照的な違いの意味するところは重要である。本節で論じたのは施紋時の土器扱いの違いで、その際の姿勢・動作の流儀が、個人差があるにしろ、大きく違うのである。さらに施紋時の土器扱いの違いは土器の乾燥の度合いの違いと関連して考えなければならないであろう。例えば、縄紋土器研究で施紋時の器表の状態がすでに問題にのぼり〔山内1958：278頁〕、「文様施文のチャンス」を論じることの意義が型式の理解とともに唱えられている〔小林1983：9-10頁〕のを知ると、成形や調整が終わった施紋時の土器扱いの違いは、器表の乾燥度合い・「文様施文のチャンス」の違いに置き換えて考えなければならない。

逆位の土器扱いは、底部が作り手から見て上つまり宙にうくような位置にあることを想定せざるを得ず、そのことは成形、調整が終わり、施紋に移る前には乾燥がかなり進行していることを想定せざるを得ない。紋様施文を正位で行う場合は、土器の底が下側にある分重心が低く安定しているから、それに比して乾燥の度合いが進行していない状態で施紋される可能性は高いであろう。もちろん一律にそうであるとはいきれないが、逆位の土器扱いの場合は正位の土器扱いに比して、乾燥が進行した状態が選択されていると考えるべきであろう。正位の土器扱いの場合は、むしろ、施紋時の器面の乾燥状態は変異があろう。図式的に示せば、逆位土器扱いはすでに器面が乾燥した状態に「文様施文のチャンス」は収斂し、正位土器扱いでは土器が安定した位置にあると見るべきで、器面の乾燥状態はいくつか変異があり、「文様施文のチャンス」の選択幅は大きくそのどれかが選択できるのであろう。

一言でいえば、土器作りに於いて、九州とそれ以東では、隆起線紋土器初頭からすでに別の伝統が形成されていたのである。さらに、このことと、さきにまとめた隆起線紋土器初頭の地方型式の並存とを鑑みれば、大陸のどこからか土器作りが伝来し、隆起線紋土器が作られたと考えるのではなく、列島内でそれより古い時期から土器作りがあり、その中で隆起線紋土器製作に於ける工夫がそれぞれあったと見るべきである。従って、山内清男氏がこだわったような形での大陸からの土器製作伝播論は成立しないであろう。渡来→在地化が何度かあったという佐藤氏の論点〔佐藤（達）1971b, 1974a・b〕も成立しない。この点は次章の検討がより明らかにする。

## 5. 窩紋土器の認定と縄紋の起源をめぐる縄紋土器工芸史上の窩紋土器の意義

### イ. 隆起線紋土器以前としての窩紋土器

前章に於いて広域比較から、隆起線紋土器として最古の段階で既に別の型式と呼ぶにふさわしい異なる伝統・地方差を形成していること、かつ、別型式にふさわしい差異をはらみつつ上位一帯型として広く共通すること等が総括できたであろう（図6）。

これに着目するのが順序である。何回も強調するが、当然のことながら、各地に上位一帯型としてより古い遡源的土器が実在した、ということに帰結するのである。「土器は土器から」の検討で重要な点は、隆起線紋土器はかかる遡源的上位一帯型土器からの一層の変化から登場すると考えなければならない点であり、隆起線紋土器以前を広範に検討しなければならない必然性の基盤を与え

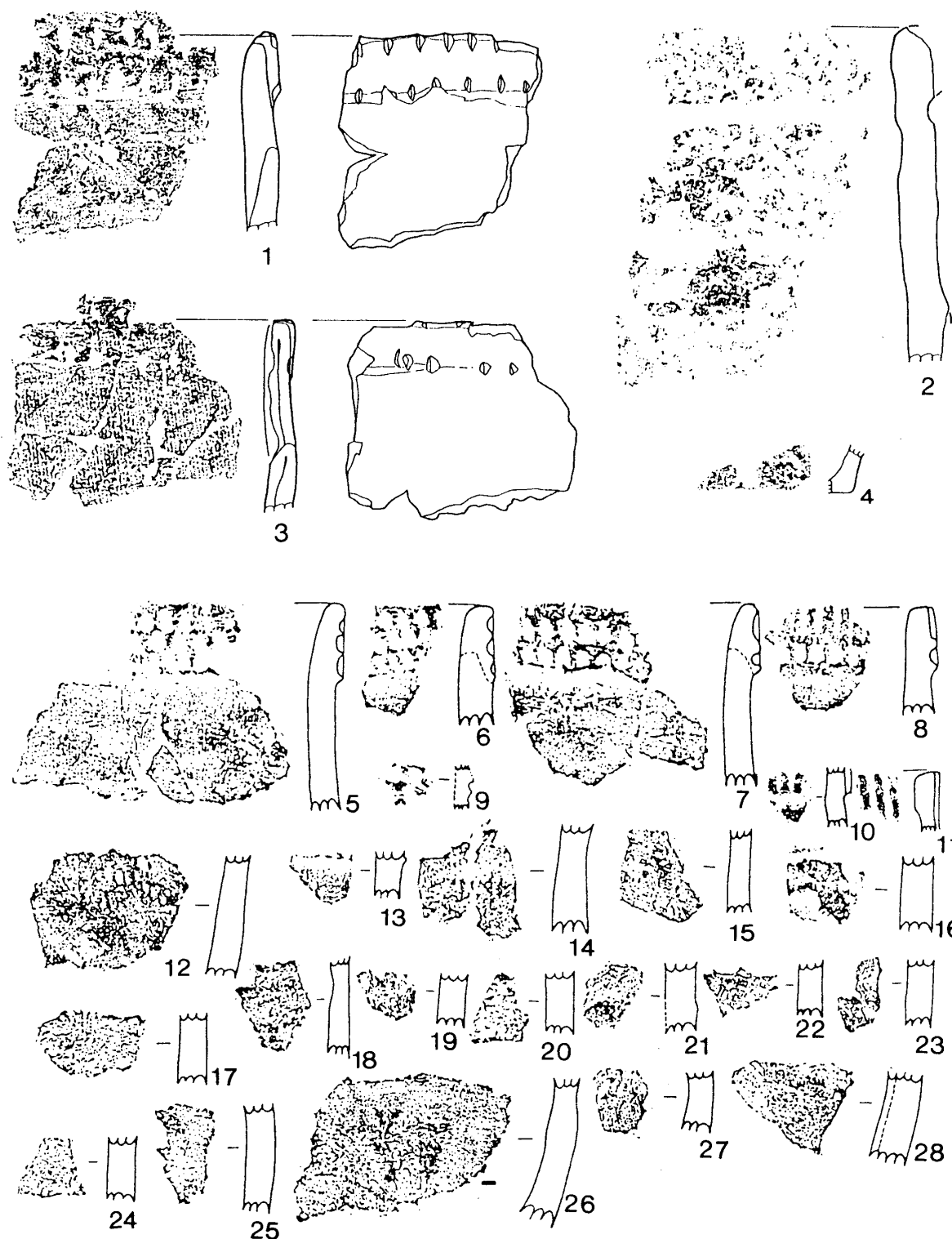


図14 肥厚系口縁部土器・窩紋土器1（1～4 神奈川・相模野第149 5～28神奈川・寺尾，縮尺1/2：  
但し，2は肥厚系口縁部土器であるが，紋様が判明しないので窩紋土器に含めていない）

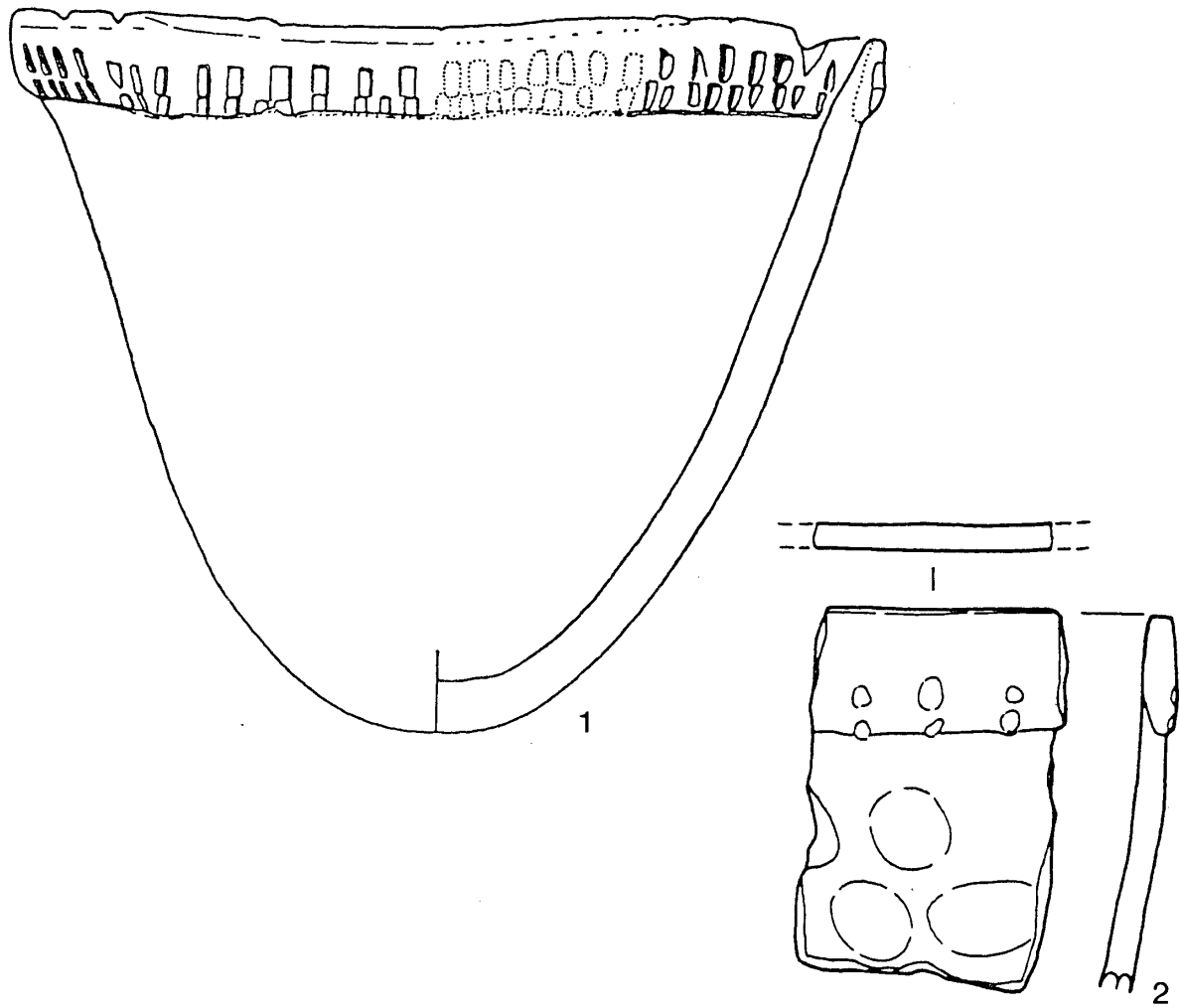


図15 肥厚系口縁部土器・窩紋土器2（1京都・武者ヶ谷 2富山・白岩尾掛, 1/1）

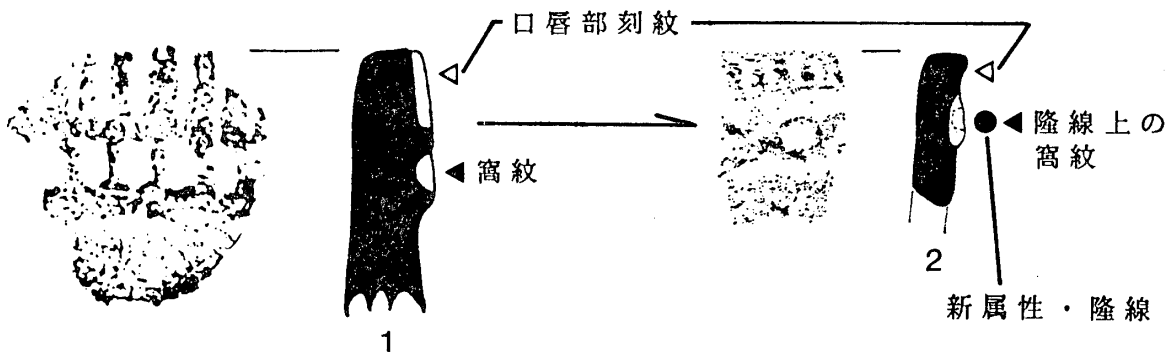


図16 肥厚系口縁部土器・窩紋土器(1寺尾)から隆起線紋土器へ(2多摩ニュータウンNo. 426<南原式古>)受け継がれる属性—窩紋(隆線上施紋に移行:隆線は新しく登場する属性)・口唇部刻紋

てくれるのである。そして、その実践から、前篇の冒頭で述べたように、斜格子目紋土器→窩紋土器→隆起線紋土器という組列が見えてくるのである。

窩紋土器としてくれるのは図14・15に上げたように、小瀬が沢以外に4遺跡と少ないが〔渡辺ほか1977, 白石1980, 古川1984, 鈴木(次)1989〕, これらが隆起線紋土器の直前に位置すると見る次第である〔大塚1989 a・b〕。理由は単純である。既存型式に対比出来ないからである。

寺尾遺跡〔白石1980〕や相模野第149遺跡〔鈴木(次)1989〕では他型式を交えず、しかもこれらの土器は隆起線紋土器以降の変化の連続性の中に入れることは出来ない上に、単純に出土し、小瀬が沢洞穴の下層でまとまるとの調査所見を得たことの分布論上の追証ができ、第2章で説明したように、小瀬が沢洞穴に於ける口縁部破片（図版3上段左から二番目〔中村(孝)1960：図版(20)-96〕）以外に口縁部破片が検出できたことから（図14・15）、紋様帯が口縁部上方にあることが判明したといえよう。この点の見方は栗島氏と決定的にことなる〔栗島1990〕。栗島氏は最初から窩紋土器は寺尾例や相模野第149遺跡例と関係ないという先入観をもっているから、窩紋土器を考慮すべき土器から外しているのである。その理由は前篇で指摘したように、まさに窩紋土器逆転編年案の基盤である、肥厚系口縁部即隆線紋という見方に立つからである。その上、隆起線紋土器以前に縄紋ありということを一度も深刻に考えたことがないからである。さらには、実物を見て反論しているのか疑わしいのである。

寺尾遺跡や相模野第149遺跡等を巡るこの間の白石氏や栗島氏や村沢氏らの議論〔白石1980, 1990 b, 栗島1988 b, 1990, 村沢1986, 1989〕が筆者にとって、どうしても賛成できないのは、筆者が説くような形での広域編年を構築しながら、型式の連続性を吟味しながら、縄紋土器として系統的に遡上する土器、遡源的土器の存在の可能性を探らないからであり、よりマイクロな分析として、南原式の古い部分の多摩ニュータウン No. 426 例や南原例に見られる、装飾的横走隆線紋、斜走／垂下隆線紋の加飾手法が例えば寺尾遺跡の窩紋手法に近いということを深く考えないからである。それらが欠落する彼らの研究に対する批判は前篇で充分であろう。

ここでは、こちらの研究実践から、窩紋土器の位置づけをしたことの手続きを、ここで順番に解説しておこう。資料が均一に存在するのではないから、かなり複雑な手続きを経ることになることは了承頂きたい。

窩紋土器資料の分布上の在り方を斟酌し、最古の隆起線紋土器型式の基準となる型式として、資料内容が比較的充実している南原式を用いる。そうして、1)広域編年構築による型式の連続性の吟味から、直接南原式と比較検討できる資料として、武者ヶ谷例・寺尾例・相模野第149例・白岩尾掛例を抽出できることを、学史的まとめも兼ね、述べる。2)南原式の古い部分に特徴的な装飾的横走／斜走隆線紋を形成する刻紋・刺突紋が武者ヶ谷例・寺尾例・白岩尾掛例に近いことの意味を考える。3)相模野第149例が何故古く位置づけなければならないか、肥厚系口縁部という形態上の特徴の変化から論じる——この時、その形態上の変化の中でかなり後出する部分に実は小瀬が沢例が来ることを論じる。以上の順で論証し、窩紋土器の範囲を明確にする次第である。

結論として、窩紋土器は実は肥厚系口縁部土器型式群の中の後出型式で、小瀬が沢洞穴例は口縁部形態が肥厚から退化して単純な口縁部形態になり、隆起線紋土器への過渡的な段階に位置することから判断が難しかった、ということをもとめる。

では、開始しよう。

〈広域編年構築による型式の連続性の吟味からみた窩紋土器〉 第一の論点である、広域編年を構築しながら型式の連続性の吟味、ではどうか。武者ヶ谷例（図15-1）が、小瀬が沢洞穴の調査成果が公刊された後、一番早く報告された土器で、この土器を巡って当時からすでに大きく見方・位置づけがわかれ、問題点はここに集約されているのに、最近の議論〔白石1980, 1990 b, 栗島1988 b, 1990, 村沢1986, 1989〕は、それをあまり省みないので、以下それをまとめる。

報告者である渡辺 誠氏が、見方の違いを論じている。①隆起線紋土器に含めない位置づけ、②隆起線紋土器に含める位置づけ、という違いである〔渡辺ほか1977：34-36頁〕。①の立場が渡辺氏であり、他方、②の立場は多いと述べる〔例：坪井1976, 小林1977, 1979, 鈴木(保)1977〕。

さらに、重要なのは渡辺氏による土器自体についての論点の整理である。「草創期の土器は、現在隆線文系→爪形文系→押圧縄文系と大別されている。武者ヶ谷式土器は、このいずれにも直接結びつかない。逆に消去法でみていくと、前二者である可能性は少ない。わずかに爪形とマッチの軸形との差異があるものの、連続刺突という点に共通点が見出されるにすぎない。一方押圧縄文系とは、施文具が一致しない。しかし絡条体圧痕文とは、爪形文との場合より、施文具効果にやや類似点が見出される。そして室谷下層の土器にみられるような口縁部の発達とも、全体の様相としては関連して考えてみたい気がする。新潟県小瀬が沢洞穴のいわゆる簾状文との関係も、気になることのひとつである。また佐々木洋治氏によれば、山形県一ノ沢岩蔭群T地点出土土器中に、類似例があるという。ここでも爪形文・絡条体圧痕文とともに出土している。／以上にみたように、わずかな類似例をたどっていくと、おおよそ押圧縄文系の段階にたどりつく。特徴の完全に一致する例を見出せない現時点では、一応この段階に相当する近畿北部の土器として位置せしめるしかないであろう。」〔渡辺1977：57頁〕、と問題点が整理されているのである。留意しなければならないのは既存型式に対比できないことが明言されていながら、「押圧縄文系の段階」に比定してしまうことである。その背景には、当時隆起線紋土器最古説の上に乗って泉福寺洞穴の豆粒紋土器が真に最古と喧伝されていた学界状況が関係していよう〔麻生1973, 麻生・白石1975, 1976〕。残念なのは、佐藤達夫氏によって窩紋土器が提唱されていたのに〔佐藤(達)1971 b, 1974 a・b〕、「新潟県小瀬が沢洞穴のいわゆる簾状文との関係も、気になることのひとつである。」と別の土器(佐藤氏の篋紋土器)に目を遣ってしまったことである。

また、武者ヶ谷例を隆起線紋土器の範疇で捉える立場でも、広域編年上の位置づけは未了であることを指摘しておかなければなるまい〔小林1977, 1979, 鈴木(保)1977, など〕。その理由も当時の隆起線紋土器最古説のためであり、とくに隆起線紋土器東漸論の推進者である小林氏や鈴木保彦氏は豆粒紋土器を最古の隆起線紋土器と見なすのであるから（麻生氏らは隆起線紋土器とは別の新

型式で隆起線紋土器より古いと考えていた）、武者ヶ谷例が既存の型式に類似していないのを認めても隆起線紋土器より古いとは考えられなかったのである。当然、隆起線紋土器以前を説く佐藤編年は受け入れがたいから〔小林1974, 鈴木(保)1977〕, 窩紋土器は思いもよらないのである。

だが、武者ヶ谷例を巡って、隆起線紋土器に含めない位置づけにしろ、隆起線紋土器に含める位置づけにしろ、両方の立場に共通するのは、既存型式に対比すべきものがないということである。他方、その位置づけについては隆起線紋土器最古説に規定されて、今紹介したような二様の位置づけに分かれていくのである。

1980年に報告された寺尾例（図14-5～28）は、隆起線紋土器最古説を前提にした豆粒紋土器最古説を提唱した一人である白石浩之氏によって報告された。白石氏の場合は、施紋具として縄の利用を提起しながら、当該例が有段口縁部を持つことは室谷下層式に近いが、当該例には回転縄紋が無いと判断し、室谷下層式より古いとみなし、かつ、「ハ」の字形爪形紋が欠落することから、佐藤達夫氏によって図示はされなかったがほぼ全体の内容が窺える様に紹介された、有段口縁がある「本ノ木式」よりは新しいと考え（「本ノ木～室谷下層以前」）〔白石1980：68-69頁〕, あわせて、一番近いのが相模野第149遺跡であるとし〔同：69頁〕, 渡辺氏が報告した武者ヶ谷例は関連するより西の土器という見方を提示した〔同：註(29), 72頁〕。他方、武者ヶ谷例を隆起線紋土器に含めて考えた小林氏は寺尾例や相模野第149例を隆起線紋土器に含めた問題提起をしている〔小林1987 a・b〕。明らかに、武者ヶ谷例をめぐる1970年代に生じた二様の解釈がそれぞれ新資料と共に増幅されているのである。富山・白岩尾掛例（図15-2）も、報告者が軽く有段になることを室谷下層式に対比する論点にしているのも〔古川1984：105頁〕, 渡辺氏や白石氏らの見方と同様である。

ここでは、争点の一方である、「押圧縄文系の段階」／「本ノ木～室谷下層以前」という位置づけに対する批判で締めくくる。

筆者がとやかくいう前に、近年の遺跡調査成果がこの位置づけを即座に否定している。「押圧縄文系の段階」／「本ノ木～室谷下層以前」という理解を支えている基本的な論点は今見た通り有段の口縁部であるが、例えば、武者ヶ谷遺跡に近い遺跡として福井・鳥浜貝塚を見れば〔森川・網谷・山田・西田1985, 鳥浜貝塚研究グループ1987〕, 隆起線紋土器以降の多層位遺跡であり、そこに検出されている、室谷下層式並行に至るまでの複数の時期に及ぶ多縄紋土器型式群は有段口縁部の伝統が希薄な様相を示し、かつ、回転／押圧各種縄紋は土器全面の施紋で、他方相模野第149遺跡を中心にした場合、より西方になる静岡・仲道A遺跡〔漆畑・渋谷1986〕と、より東になる、埼玉・西谷遺跡と近隣の水久保遺跡〔栗原・小林1961, 小林・安岡1979, 谷口1988〕や、同・宮林遺跡〔宮井ほか1985〕の多縄紋土器型式群を見渡せば、そこでも明らかに有段口縁部の伝統は強くない（図18参照）。しかも、これらの遺跡の多縄紋土器型式群も回転／押圧各種縄紋は全面施紋を基調としているのである。また、有段の伝統が強固な日向洞穴や小瀬が沢洞穴例（図19-4・5）も回転／押圧各種縄紋は全面施紋である。このような近隣遺跡の様相から、紋様が口縁部に集中する武者ヶ谷・寺尾・相模野第149例、そして、白岩尾掛例を、「押圧縄文系の段階」／「本ノ木～室谷下層以

前」という位置づけで考えるのには、型式の連続性という意味で、明らかに無理があるといわざるを得ない。と同時に隆起線紋土器の変遷の中にも組み込めないと考えるが、そういうだけでは生産的でないので、そう考えるより土器に即した論点を提示しよう。

〈窩紋土器に由来する南原式の古い部分の隆線の装飾手法〉次に、ミクロな分析として、南原式の古い部分の多摩ニュータウン No. 426 例や南原例に見られる、装飾的な横走隆線紋・斜走／垂下隆線紋の装飾手法が、例えば寺尾遺跡の窩紋手法に由来するということから窩紋土器の認定を考えている点〔大塚1989c, 1990a〕を、説明する。

具体的には南原遺跡の装飾的隆線紋の手法について、「刻紋・刺突紋については、矩形に近い圧痕を念頭に置き、それに比して丸みのある圧痕を刺突紋と呼んでいる（施紋動作をこのことで区別しているわけではない）。絶対的な区分という訳ではないが、そう見ることによって、窩紋土器と関東第Ⅰ期Ⅰ（古）〈南原式古—大塚註〉との連続性を吟味するのに有効である。筆者が窩紋土器の新と寺尾遺跡例を位置づけるのも（大塚1989c）、そのような刻紋・刺突紋の観察・区分と関係している。／南原資料の研究に着手して以来、他の遺跡の研究で指摘されているように（原川・鈴木1981）、刻紋・刺突紋の工具については軟質なものと硬質なものと等様な可能性を考えなければならないような気がしている。南原例には、軟質なものとして例えば縄の痕を想定しなければならないような例（写真1-3）〈図版8—大塚註〉があるが、あるいは自縄自巻きであろうか。〕〔大塚1990a：註(6), 22頁〕、ということから窩紋土器を認定するのである。

このような見方は、多摩ニュータウン No. 426 遺跡の研究で原川雄二氏が、隆線上の紋様の工具の分類・同定について、「指、棒状工具、篋状工具等による刻み、刺突、押圧、つまみ」〔原川・鈴木1981：215頁〕、とともに、縄という軟質の施紋具の存在（図9-14）を明らかにしたこと〔同：171・215頁〕が端緒になっている（具体的には絡条体・棒巻縄）。つくづく残念なのは、原川雄二氏の問題提起が深刻に受けとめられなかった点である。例えば、栗島氏の窩紋土器についての反論〔栗島1990〕を読むにつけ、「無文土器」の場合と同様に刺突紋・刻紋をいわば記号化し、原川雄二氏の問題提起を検証しないで、窩紋土器や南原式の刺突紋や刻紋を具体的に弁別鑑定しようとする姿勢にはきわめて疑問を感じるのである。また、「本ノ木式」が隆起線紋土器より古いと主張する天動説としかいいようのない白石氏の新編年〔白石1990b〕も、原川氏の問題提起を斟酌していないことが、縄を利用する土器型式の編年問題について逸脱した理解を露呈する大きな原因となっている。

要するに、隆起線紋土器の刺突・刻みは棒状工具・篋状工具等の硬質の施紋具と、縄という軟質の施紋具の追証が課題と考え、原川氏の問題提起を検討でき、硬質の施紋具と軟質の施紋具とに分けて考えるに至っている。今現在、図9-1の斜走隆線上の装飾として自縄自巻・巻紐で押圧が加えられていると考えている。理解の便を図るために、図版8に拡大写真を掲載してあるので参照願いたい（ちなみに、先に述べたように、当例の横走隆線紋は左利きによる指のつまみで波状となる）。波状横走隆線下に斜走隆線があり、そこに長円形とでもいうべき二つの刻みがあるが、その刻みの



中を覗くと長円形の刻みの長軸に直交するように細い溝が見え、繊維状の圧痕によるらしく、それを根拠に自縄自巻・巻紐という軟質施紋具による圧痕と判断した。以上は、肉眼と実体顕微鏡下の観察を下に推定し、拡大写真を提示した次第である。なお、破損を恐れ型どりはしていない。

窩紋土器の理解に関し最も議論が分かれてきたのは、さきに紹介した小林氏の見解〔小林1977, 1987 a, など〕のように窩紋の施紋具が縄であるから隆起線紋土器より古くなる筈がないという見方のためであろう。筆者自身、小瀬が沢洞穴の窩紋土器（図1上段左2片，図版3上段左から二番目）を実見する度に、硬質工具を想定するより、軟質工具すなわち縄を想定した方がよいと考える。施紋具の同定については縄の仲間が用いられていると見立てる小林氏に分があると筆者は考えている。第2章で説明したように、筆者が実見した限りでも、必ずしも棒状工具のような硬質工具の刺突痕とみる必要は無いが、しかし、縄にしても具体的にどのような原体になるかは、保留せざるをえない。圧痕を外からながめるだけでは確実さを欠くために、こまかな原体の復元のためには、ポジの型をとる必要があるが、それは土器資料の破壊につながる可能性が高いため、型どりすることは危険を伴うから、それはかなわぬこと故に、判断は保留せざるを得ない部分が多い。その点をご寛恕願いたい。だからこそ、草創期土器型式編年研究を志す者は、お互いがどの土器をどのように見ているのかが分かるために、それぞれが実見を基に発言しなければならないのである。

話を隆起線紋土器に戻そう。南原式に縄が施紋具として用いられているのであるから、縄紋は隆起線紋土器より新しいことの根拠とはならないであろう。さらに、原川氏も類例として上げている宮城・大原B遺跡〔山田ほか1981, 山田ほか1990〕の隆起線紋土器（図17-1）は、再度の実見の機会の判断から、後述するように南原式にあるのと同様な、極めて鋭利な工具による刻みを横走隆線上に有し、かつ、隆線下右端に装飾的垂下隆線紋の端と見られるものが残り、前には位置づけをやや曖昧にしたが〔大塚1982：116頁〕、日向Ⅰa式期の上位一帯型隆起線紋土器と見なければならぬ。これは口唇端に絡条体・棒巻縄の圧痕が配されている貴重な資料である。南原式や日向Ⅰa式等の隆起線紋土器にも縄の利用あり、である。

量的にはごく少量といわざるをえないが、南原式に於いて施紋具としての縄の使用は確実なものとするべきであろう。南原式の古い部分の刺突・刻みは、棒状工具・筥状の硬質工具と、縄という軟質工具が用いられているのである。しかも、これらの圧痕は深くしっかりした圧痕として共通し、硬質工具による圧痕は形状の変異も多く、その意味で新しい部分の圧痕が比較的単純なのとは趣が違っているのである。以下観察所見をもとにさらに特徴を述べよう。筆者のかつての観察所見〔大塚・小川・田村1979, 1980〕の訂正も兼ねている。

図9-4の下方の斜走隆線上には円い棒状の工具でしっかりした刺突がある。円い棒状の工具の刺突は、他に、図9-9・10（同一個体）や、同8の上方の横走隆線上にある。図版6-9は隆線上の摩擦のため判然としない点もあるが、同趣の工具痕を残すようである。図版6-7の垂下隆線上にはやや小振りな円形圧痕が残る。

図9-6（図版6-4）の横走隆線上の円い圧痕の中には小さくしっかりした圧痕が伴う。あたかも、

きれいに削った鉛筆の先のような状態の棒状工具での刺突である。全く同じ圧痕は図9-5の左側の斜走隆線上にある。理解の便を図るために、拡大写真を図版7下段に掲載しておいた。筆者がきれいに削った鉛筆の先のような状態の棒状工具での刺突といった理由を追体験して頂きたい。ところで、図9-5（図版7下段）の右側の斜走隆線上には矩形あるいは方形の先端の棒状工具の刺突・刻み痕がある。このような先端の形状の施紋具による圧痕と思われるのは、他に、例えば、図8-4の垂下隆線上に見られ、そして、図9-11の横走隆線上にある。

なお、図8-4や図9-5には先端の形状が違う圧痕が並存することになるが、これらは別々の工具ではなく、一つの工具の右端であり左端かもしれないことを指摘しておこう。刺突や刻みが該式で多様なのは、もともと多種類の工具があると同時に、工具の一端だけを用いるのではなく、両端を用いることに由来するかもしれない。

図9-12は原川氏が強調するように、極めて鋭利な先端をもつ筥状工具で付けられた刻みが横走隆線上にある。

図9-4（図版6-14）の横走隆線上にはいわば不整円形状（アメーバ状）の圧痕が見られる。図版6-13の横走隆線上にも同様な不整円形状の圧痕が残る。これらが、硬質工具によるのか、あるいは、縄によるのか肉眼ではなんともいえない不明な圧痕である。

このように、南原式の古い部分の刺突・刻みは、棒状工具・筥状の硬質工具と、縄という軟質工具によって、あるいは工具の使い方などで、多様なのである。

ここで重要なのが、既に論証した、隆起線紋土器はより遡源的上位一帯型土器からの一層の変化から登場すると考えなければならない点である。当然、南原式の古い部分の隆線を飾る刺突紋・刻紋には以前からの由来があると見なければならないのである。

例えば、南原式の古い部分に顕著な、矩形あるいは方形の刺突・刻み痕（図8-4、図9-5<図版7下段>・11）は武者ヶ谷例（図15-1）と極似している。寺尾例（図14-8）の口唇部刻紋下にある刺突・刻み痕とも近いとみるべきであろう。また、寺尾例（図14-10・11）に見られる鋭利な筥状工具は南原式古の例（図9-12）に通じるであろう。

さらに、別の寺尾例（図14-5～7・9）の紋様は、報告者である白石氏が縄（自縄自巻・巻紐）の刺突紋ではないかと問題提起した資料で〔白石1980：57，59頁〕、その後、小林氏から、「その刺突文は縄の先端のようにも見えたり、棒状工具などの先端がなまけたような棒で着突いたようにも見えます。」〔小林1987b：62頁〕、と慎重に取り扱うべき旨の注意をうけた経緯をもつ紋様であるが、それらは、南原式の古い部分の刺突紋（図9-4<図版6-14>、図版6-13）の様相と同趣であろう。白岩尾掛（図15-2）は円い刺突痕を持つが、それは南原式の古い部分でも通有の圧痕（図9-4、図9-8～10<9・10は同一個体>、図版6-9）である。さて、また別の寺尾例（図14-12）は胴部に縄の原体（自縄自巻・巻紐）の押捺痕をもつと報告されたが〔白石1980：59頁〕、最近、寺尾の土器を隆起線紋土器以前と位置づける別の研究者・谷口康浩氏から回転縄紋との別案〔谷口1991a：註(11)，48-49頁〕が出され、縄紋の認識が混沌としているが、縄の存在は確かである（註13）。

つまり、これらのことは、窩紋土器と南原式とで類似する刻紋・刺突紋が、施紋具次元でもその在り方が共通するということであり、南原式の古い部分に見られる棒状あるいは篋状の硬質施紋具や軟質施紋具である縄は、それ以前の窩紋土器の紋様手法から由来すると考えられるのである。

従って、窩紋土器が隆起線紋土器の直前に位置するとして、これで締めくくりたいところであるが、残念ながら、これで一件落着とはいかないところが、大変なところである。小瀬が沢洞穴資料の評価と相模野第149例の位置づけをどうするか、そのまとめが未了だからである。

〈窩紋土器の細別と隆起線紋土器との弁別〉ところで、相模野第149例（図14-1・3〈同一個体〉）に見られる窩紋は報告では篋状工具による刺突と説明されているが〔村澤1986：291頁，鈴木（次）1989：13頁〕，筆者の実見では、多截竹管状の工具による刺突痕で、刺痕の右側に多截竹管状の工具の外側がきている。この工具は他の窩紋土器には見られないし、南原式の古い部分にも見られない。しかも、この相模野例は窩紋が肥厚した口縁部の上下端に疎らに施紋されており、近い遺跡である寺尾例とは工具次元の違いと施紋上の違いが見られる（註14）。さらに、東に小瀬が沢例を見、西に武者ヶ谷例を見るとき、相模野第149例は、窩紋土器に編入すべきであるが、寺尾例よりは古く位置づけなければならないと考えた〔大塚1989b・c〕。

ここで、問題にしなければならないのは、前篇でまとめた筆者見解との相違が非常に大きい別見解——窩紋土器逆転編年案〔村澤1986，1989，栗島1988b，1990〕——である。詳細は前篇を参照して頂きたい。

筆者は、相模野第149例（図14-1・3）が古く寺尾例（図14-5～28）が新しいと考えるが、逆転案では、寺尾例（図14-5～28）が古く相模野第149例（図14-1・3）が新しいと考える訳である。相模野第149例を新しく考える理由は、当該例が有する貼付による肥厚する口縁部が隆起線紋土器の横走隆線紋の起源になると見なすからである〔村澤1986，1989，栗島1988b，1990〕。この説は、隆線の発生を単純明快に語る点で魅力的であるが、隆起線紋土器最古型式群である、泉福寺下層式—上黒岩Ⅰ式—南原式—日向Ⅰa式、での横走隆線紋が1～3条の変異をもつことを説明できないことが問題である。その上、寺尾例の窩紋の方が隆起線紋土器・南原式の刺突紋・刻紋に通じるのに、相模野第149例のそれは南原式の刺突紋・刻紋に似ていない、という問題が生じる。筆者の案では、棒状あるいは篋状の硬質施紋具や軟質施紋具である縄による南原式の刺突紋・刻紋の系譜が明快に説明が付く。さらに、特に隆起線紋土器の口唇端部にある刻紋の系譜も説明が付くのである。南原式や日向Ⅰa式では、口唇端部に刻紋を持ち（図9-9・10，図10-1・2，図12左端），以後も受け継がれるが、寺尾例（図14-8）の口唇端部刻紋がその祖型であると、うまく説明が付くという次第である。

筆者の考えの場合、隆線は新しく登場する属性と見なすことになる。その関係を概念的に示せば、図16-1→同2のようになる。

これだけでは、水掛け論となり平行線を辿ってしまうであろうから、もう少し客観的な議論を提示しよう。それが、前篇で紹介した、深澤芳樹氏の土器製作工程と施紋の関係についての概念化

〔深澤1989〕である。深澤氏は木葉紋の陰影表現の紋様について土器製作工程と施紋の機会の分析から、追加型施紋（器面調整がみな終了してから紋様を描く）／順番型施紋（ハケメ調整とミガキ調整の間に紋様を描く）、を抽出し、社会的脈絡に関わる極めて客観的かつ詳細な議論を展開した〔深澤1989〕。

この見方の根本は、要約すれば器面調整を基準にそれ以前になにがおこなわれるか、それ以後になにがおこなわれるかを区別するということであり、きわめて客観的議論となるのである。

そこで、器面調整を基準にすると、相模野第149例は、それ以前に口縁部に粘土紐が貼付され肥厚系口縁部が形成され、器面調整後に肥厚系口縁部に窩紋が施紋されるのである（追加型施紋）。そして、寺尾例は、貼付による肥厚系口縁部ではなく、口縁部を形成する積み上がった粘土帯が成形・調整を経て肥厚系口縁部になるが、肥厚の度合いは減じ、器面調整後、窩紋が施紋されるのである（追加型施紋）。他方、泉福寺下層式一上黒岩Ⅰ式一南原式一日向Ⅰa式、すべてが粘土が積み上がるだけで、肥厚して有段となるような口縁部は作られず、単純な口縁部が作られ、器面調整終了後、隆線が貼付され、その上に波状紋や刺突紋・刻紋が施紋されるのである（追加型施紋）。器面調整のそれ以前・以後という客観的基準から判断すると、粘土紐の貼付は器面調整以前で、横走隆線は器面調整以後という明確な違いが導出されるのである。しかも、貼付される粘土紐は一本であり、他方横走隆線は1～3条の変異があるのだから、それらは全く違う工程で付与される属性と見なければならぬことが証明されるのである。

器面調整以前に口縁部に貼付される粘土紐はいわば形態上の属性であり、器面調整後の貼付される隆線はいわば装飾上の属性となる。そこで、窩紋と隆線上の刺突紋・刻紋の類似度からの判断とあわせれば、粘土紐貼付の肥厚系口縁部土器から粘土紐の貼付が無くなりながら、口縁部を形成する積み上がった粘土帯が肥厚系口縁部になるが、肥厚の度合いは減じるころの肥厚系口縁部土器を経て、隆起線紋土器の単純な形態の口縁部に移行するという変遷が窺えよう。

このことが分かったことで、口縁部が肥厚しないと思われる小瀬が沢資料が位置づけられることになるのである。肥厚系口縁部に於ける貼付の有無、窩紋施紋上の疎・密を組み合わせれば、相模野第149例（図14-1・3）→武者ヶ谷例（図15-1）→寺尾例（図14-5～28）・白岩尾掛例（図15-2）→小瀬が沢例（図1上段左3片）という組列が描けよう。だが、密な施紋の窩紋が隆起線紋土器の刺突紋・刻紋に近いこと、相模野第149遺跡と寺尾遺跡の比較から、確実な細別は、古い部分として相模野第149例（図14-1・3）、新しい部分として武者ヶ谷例（図15-1）・寺尾例（図14-5～28）・白岩尾掛例（図15-2）・小瀬が沢例（図1上段左3片）であろう。

そして、佐藤氏が取り上げなかった別の小瀬が沢例（図版3上段左から二番目）は、密接施紋の窩紋とも違い、窩紋（実見する限り縄による施紋と思われ、小林氏の論点を追認するが、肉眼観察だけのため具体的な原体の復元は保留する）が横位に展開し（この点はそもそも中村孝三郎氏が注意していた〔中村(孝)1960b:18頁〕）、しかも明瞭な非肥厚系口縁部をもつことから判断して、確実に後出する土器と考えるべきであろう。ここに見られる窩紋の横位展開は横走隆線紋の直前段階

の紋様帯の構成を示し、非肥厚系口縁部から判断して、隆起線紋土器への過渡的変化を担う窩紋土器の姿を示す重要な例であろうと考えている。つまり、横走隆線はこのような窩紋の横位展開を隆線で表現し直して成立すると筆者は考えるのである。その隆線上に窩紋が移行して装飾的な隆線を形成し、上位一帯型の紋様帯として連続するのである。図16-1→同2に示した口唇部刻紋の連続性も、以上のつながりと新要素・隆線の登場を別方面から証明していよう。

窩紋土器の組列がこのように構築されるならば、全く別種紋様である斜格子目紋をもつ多摩ニュータウン No. 796 例〔石井・武笠1989：第1図，2頁〕は、多摩ニュータウン No. 796 例が形態上肥厚系口縁部（再度の実見により貼付によると考えているが、誤りがあれば筆者の責任である）をもつ故に、肥厚系口縁部（窩紋土器）→非肥厚系口縁部（隆起線紋土器）という形態上の変化過程の途中には入れられないことから、相模野第149例より古く位置づけなければなるまい。また、上位一帯型土器の祖型はここまでは確実に迎れることになる。斜格子目紋をもつ多摩ニュータウン No. 796 例が今のところ最古の縄紋土器となろう。前篇や別稿〔大塚1990b〕で説明したように、斜格子目紋土器→窩紋土器→隆起線紋土器、は確実であろう。隆起線紋土器以前に、口縁部の肥厚を特徴とすることでくれる、肥厚系口縁部土器型式群とも呼ぶべき一群の型式が存在すると筆者は考えるのである。

これを要するに、肥厚系口縁部土器型式群は、斜格子目紋土器（多摩ニュータウン No. 796例〔石井・武笠1989：第1図，2頁〕）→窩紋土器古（図14-1・3）→窩紋土器新（図14-5～28／図15-1・2／図1上段左3片）→窩紋土器新々（図版3〈版面左が天〉上段左から二番目），と編年的にまとめることが出来ると考える。

窩紋土器の範囲と隆起線紋土器の違いはほぼ明らかにし得たであろう。ただし、ここで注意しなければならないのは、ここで問題にした窩紋土器は東日本の南原式や日向Ⅰa式にとってはいわば直接の祖型であるが、隆線上に指の押圧痕を続ける泉福寺下層式にとっては直接の祖型ではないという可能性が高いということである。換言すれば、隆起線紋直前にも地方差のある型式が予想されるということである。そこに見られかつ予想されるのは地方差と連続性の遡上ということであろう。その意味で縄紋式の底は見えないのである。他方、隆起線紋土器以前に渡来と在地化の繰り返しを想定し、窩紋土器を渡来土器の一つとした佐藤氏の見方には無理があらうと思われる。

#### ロ. 縄紋土器工芸史上の窩紋土器の意義——縄紋の起源

ここでは縄紋土器起源論の中で論点の一つになってきた縄紋の登場過程について見通しを述べて、窩紋土器の意義を総括しよう。

縄紋土器を最も長く広く飾った縄紋について、東北中心の多縄紋土器が縄紋使用の最古といわれてきたが——「始源縄紋の諸型式」〔山内1971〕——、これまで述べたように隆起線紋土器より古い窩紋土器にすでに縄紋があり、かつ、隆起線紋土器にあるから、その変化から縄紋がもっぱら用いられる多縄紋土器型式群の登場を考える必要がある。

さきに紹介したほかに、東日本を中心として隆線紋・縄紋併用例がある。

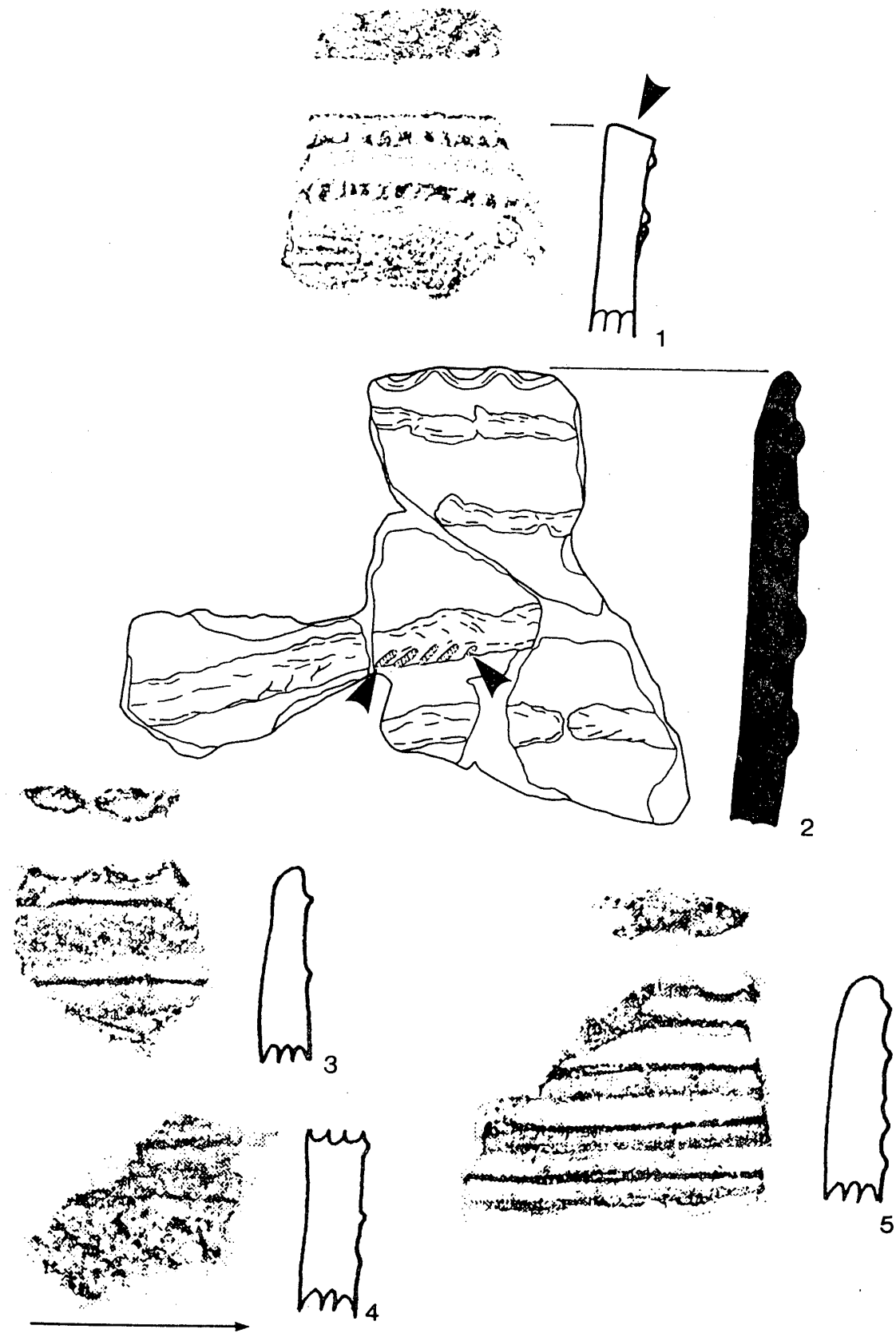


図17 縄紋を有する隆起線紋土器 (1宮城・大原B 2長野・仲町 3~5宮城・下窪, 縮尺 1/1)

図17-2は長野・野尻湖の近くの陸上発掘で調査された仲町遺跡出土の隆起線紋土器である。この土器に見られる4条の横走隆線の内、下から二番目の隆線の下縁に沿って1段の縄Lが短い幅であるが、回転施紋されているようである。報文では「縄目」と明記されている〔小野ほか1987:26頁〕。南原式例（図9-1・14）、日向I a式例（図17-1）より後出であると思われるが、あるいは、関東第Ⅱ期並行かと考えているが（註15）、そのような隆起線紋土器にも縄紋が見られる。

図17-3～5は宮城・下窪遺跡のいわゆる微隆起線紋土器である。後藤勝彦氏によって再報告された資料である〔後藤1990〕。報告によると、上位一帯型と多条型が検出されている。3が上位一帯型で、5が多条型である。後藤氏のご厚意で、再三の観察の機会が与えられ、実見の結果、微隆起線紋はすべて篋状工具を横方向に引きずって、工具の間から粘土がはみでてできる直線状の紋様が形成されるので、佐々木洋治氏の定義〔佐々木1973:58-61頁〕にかなう真性の微隆起線紋であることが確認できた。

従って、本資料は太平洋側での日向I c式の良好な土器として重要であることは論をまたないが、その上に、4は微隆起線紋帯の下胴部に1段の縄Rがしっかりと横位回転施紋（逆時計回り）されているのである。このことから、隆起線紋土器の終末である日向I c式に縄紋が併用されていることが判明し、と同時に縄紋土器に通有な横位回転施紋も確立していたことが窺われるのである。窩紋土器から隆起線紋土器にかけて、決して類例が多いとはいえないが、縄を施紋具として用いることが継承されていたと見なければなるまい。

そうすると、佐藤達夫氏が提起した隆起線紋土器直後に多縄紋土器型式が連絡するという変遷観〔佐藤（達）1971b〕がより例証を得たということになる。佐藤氏は隆起線紋土器から多縄紋土器型式がすぐに連絡するという根拠に、日向洞穴から小瀬が沢洞穴にかけての資料を上げ、「ハ」の字形爪形紋の共通性と口縁部変化の連続性を説いた。それを受けて筆者は、新たな日向洞穴の資料を提示しながら多縄紋土器型式の口縁部形態の祖型は既に隆起線紋土器の終末・日向I c式期に形成され、それが受け継がれることを説き〔大塚1987b・c, 1988b・c・d, 1989b, など〕、佐藤案を尊重し東北地方では隆起線紋土器→多縄紋土器という関係になると考えた。概略は図19に示す通り、外反する口縁部端に粘土紐が貼付され肥厚する口縁部形態と、有段になる口縁部形態がそれぞれ受け継がれる（図19-1→同4/同2→同5）という見方である。日向I c期の下窪例（図17-4）の存在は、さらに縄紋が隆起線紋土器から多縄紋土器に受け継がれることを示すのであり、東北地方での隆起線紋土器→多縄紋土器という変遷は確定したであろう。

他方、爪形紋土器は隆起線紋土器に後続する、また別個の型式である。爪形紋土器を隆起線紋土器に後続する型式とするのは、その意味では正しいであろう。だが、九州の型式・福井式、と本州の型式・曾根式とに分けて考えるべきなのである（図18）。何回か説明してきたが、福井2層・泉福寺6b層には福井式と曾根式の仲間が共存するが〔大塚1988b・c・d, 1989b, など〕、その関係は小瀬が沢洞穴でも追認できることを指摘しておこう。例えば、佐藤氏が爪形紋土器として一括した土器（図1下段右2片）のうち、右端は福井式の仲間（天地逆）、その左側は曾根式で、その

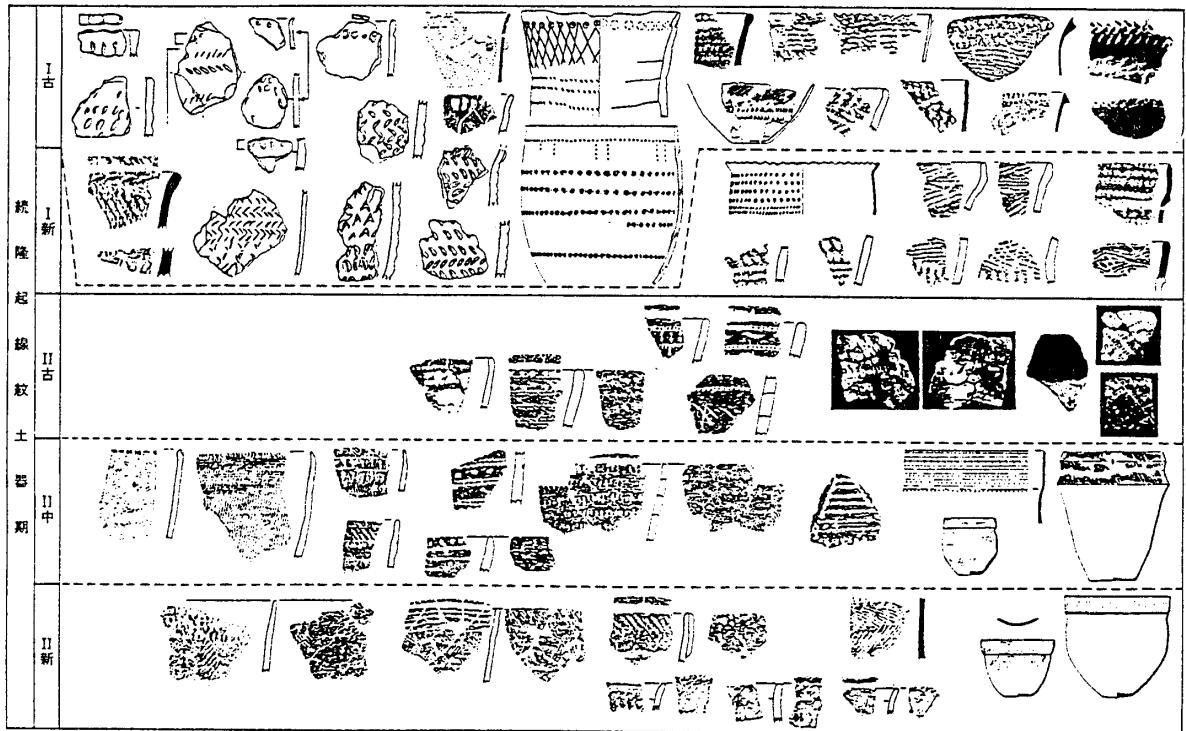


図18 隆起線紋土器以後・井草式以前の縄紋式縦横連鎖構造

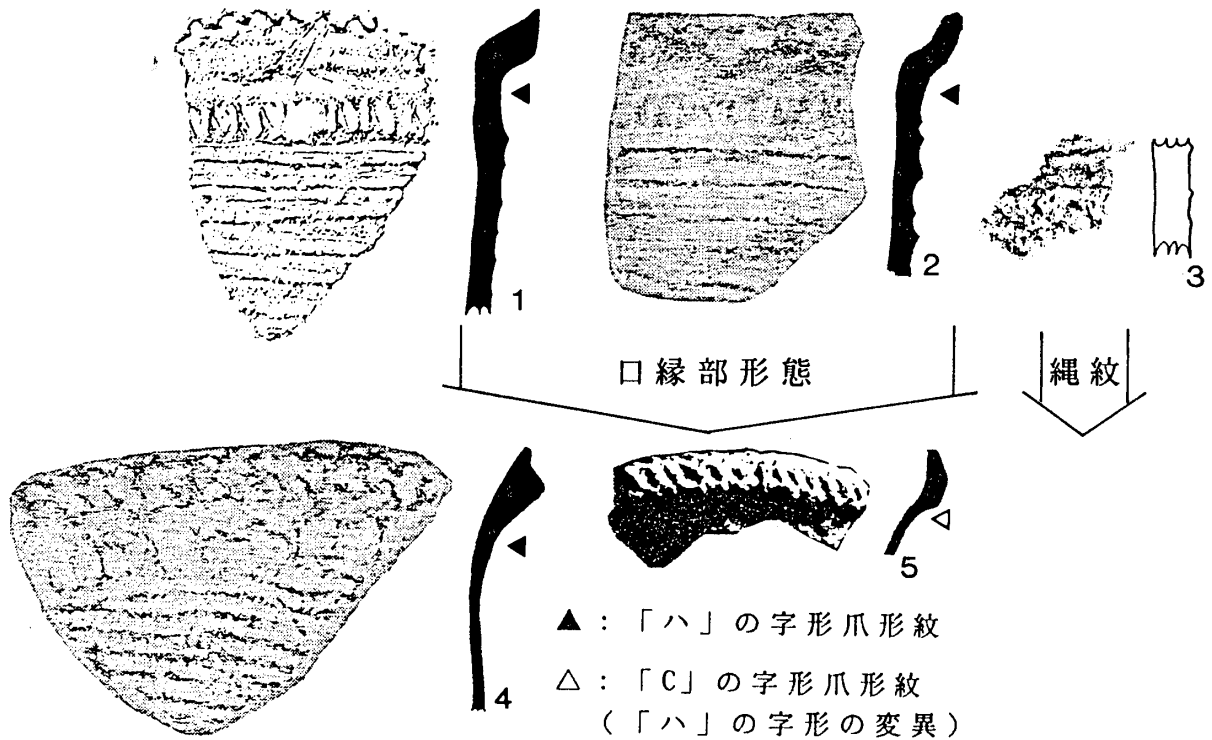


図19 隆起線紋土器から多縄紋土器へ受け継がれる属性—口縁部形態・「ハ」の字形爪形紋・縄紋



上端に「ハ」の字形爪形紋が残っている。右端例と同一個体が図版1上段左から3番目の口縁部破片で、この土器の紋様構成（同方向多段の爪形紋上に大きく傾いた爪形紋列が二条ある）は口唇の刻みも含め、福井2層の福井式の典型例——『日本の洞穴遺跡』の写真図版91上段左端・同下段右端——と同じであるから、小瀬が沢洞穴の爪形紋土器は曾根式と福井式の仲間があると、筆者は強調したいのである（このことは意外と見のがされている）。隆起線紋土器の場合と同様に、東西交流の観点から爪形紋土器の弁別とその分布上の評価を下すべきであろう。

故に、東西の爪形紋を隆起線紋土器以前と以後に分離した佐藤氏の爪形紋土器の位置づけ〔佐藤1971b〕は誤りである。また、山内清男氏の同一爪形紋土器広域分布論も成立しない。爪形紋土器の特徴の差異に関する基本的認識は小林達雄氏に従うべきであろう〔小林1977, 1987a, など〕。ただし、それを爪形紋土器として同一にくくるのには従えない。福井式は堂地西式に由来すると考えるし、また、曾根式は鳥浜貝塚下層式の変化を追うことでその祖型を見いだせるのではないかと予想している。筆者のこのような見方は小林氏によって紹介されている〔小林1987a: 11頁〕。爪形紋土器についてはいずれ別稿を用意しなければなるまい。

縄を押しついたり（自縄自巻・巻紐もある）、縄を回転施紋したり、あるいは絡条体・棒巻縄を押しつける例など、多縄紋土器に見られる各種縄紋がすでに窩紋土器（図1上段左3片、図14-12、図版3上段左から二番目）や隆起線紋土器（図9-1<図版8>, 同14, 図17-1・2・4, など）にあるので、これらの型式群が縄紋施紋の下地を築いたのであろう、と筆者は指摘したい。

どうも、東日本では窩紋土器以来、縄紋を併用する隆起線紋土器を通じて、軟質の施紋具である縄があるらしく、特に東北地方に特徴的な微隆起線紋の下に回転縄紋がある宮城・下窪例（図17-4）によって、微隆起線紋と、縄紋土器に最も通有な横位回転施紋の縄紋がすでに並存することが分かった。この例を観察すると、微隆起線紋と回転縄紋施紋の施紋方向が、左→右（逆時計回り）になされていることが分かり、施紋時に正位の土器扱いでなされたことが分かり、土器の表面がさほど乾燥しない段階で施紋がおこなわれたことも窺える。

ところで、この地方では土器の底が下側にあって安定した状態で施紋する正位の土器扱いの中で隆起線紋土器の製作が始められたと先に説明したが、佐々木氏の東北地方の隆起線紋土器諸型式の施紋方向の研究〔佐々木1973: 60頁〕を参考にすると、左→右（逆時計回り）で一貫しているとのことであり、それは施紋時の正位の土器扱いが一貫していることに連なるのである。正位土器扱いでは土器の重心が低く安定した位置にあると見るべきで、下窪例のようにともに横位施紋である微隆起線紋と回転縄紋が並存していることは、正位の土器扱いの伝統故に、「文様施文のチャンス」が、施紋時に逆位の土器扱いになるために乾燥が進行した状態に収斂する九州とは対局的になり、器面の乾燥が進行しない段階での施紋が確立したことの所産と考えるべきである（註16）。この時代、以西の地域では縄の使用が判然としないことはこれまでに判明していることであるが、それは逆位の土器扱い圏であることが関係していると筆者は考える。下窪例の表面観察から、正位の土器扱いと、土器の表面がさほど乾燥しない段階で施紋がおこなわれたことが看取されたことは、単な

る偶然ではなく東北地方の土器製作上の伝統に由来すると考えるのである。

かなり推測的であるが、器面の乾燥が進行しない段階での施紋が確立したことから、軟質な施紋具としての縄の多用が可能となり、故に東北を中心に回転／押圧縄紋で飾る多縄紋土器型式群が成立するのであろう。その中で、日向Ⅰc式は土器製作上の変革の画期を担った土器型式という評価を与えねばなるまい。

窩紋土器→隆起線紋土器→多縄紋土器と推移するうちに、施紋具の一つにすぎなかった縄は、正位土器扱いの伝統の中で乾燥が進行しない段階での施紋が東北を中心に確立し、縄が多用できる条件が備わり、土器装飾手法の中心となったといえよう。窩紋土器の中でも小瀬が沢洞穴例が装飾手法としての縄の使用頻度が高いように思われるのは示唆的であろう。隆起線紋土器でも今現在の例から判断するならば、縄の利用は東北に多いかもしれないと思われるのは意味があろう（註17）。そして、日向Ⅰc式の隆起線紋土器中に、縄紋土器に広く長く通有な横位方向の回転縄紋がすでに登場しているのが分かったのは意義深い。繰り返すが、日向Ⅰc式は正位土器扱いの中で土器作り上の変革を担ったのである。

「縄文の発生は、当然、最古の縄文の、綿密な観察に基づいてのみ論じられるべきである。」〔佐原1956：註（5），32頁〕、という要件をどのくらい満たしているか定かでないが、さらに推測を交えるのを恐れないならば、窩紋土器→隆起線紋土器→多縄紋土器と変化しながら、東北を中心に軟質施紋具としての縄が多様されるのだから、縄紋は発生的には装飾としての意味あいを担っていたということ、そして、縄の利用は東北を中心とした一大伝統の可能性が高い。

以上を踏まえるならば、窩紋土器は、縄紋土器工芸史上、装飾としての縄紋を施した「始源縄紋」土器という評価を与えるべきであろうと思われてならない。ただし、それより古い縄紋施紋土器が発見され、それをあらたに、「始源縄紋」土器と呼ぶべき間までのことかもしれないが……。

## 6. 結語——遡源期の提唱

これまでの議論を要約し、若干の提言を加えて結語としたい。

広域比較と土器扱いの検討から、隆起線紋土器として最古の段階で既に別の型式と呼ぶにふさわしい異なる伝統・地方差を形成していること、かつ、別型式にふさわしい差異をはらみつつ上位一帯型として広く共通すること等から、各地に上位一帯型としてより古い遡源的土器が実在した、ということに筆者は思い至った。隆起線紋土器は、かかる遡源的上位一帯型土器からの一層の変化から登場すると考えなければならず、隆起線紋土器以前を広範に検討しなければならないという課題が与えられたのである。学史的まとめを述べるならば、隆起線紋土器は決して最古の土器ではなく、また、どこかに最古の隆起線紋土器が偏在するのでもないし、大陸から渡来したのでもない。より古い共通の祖型に由来し、しかも、相当に変化している土器型式群が隆起線紋土器である。

当然、実際の課題は共通の祖型から相当に変化してきたその筋道を遡上することになる。隆起線紋土器の初頭に広く共通する紋様帯が口縁部に集中する土器・上位一帯型土器のその紋様帯の元を

探ると、窩紋土器には隆起線紋土器の紋様帯の祖型があり、さらにその祖型を斜格子目紋土器が持つことが判明した。斜格子目紋土器→窩紋土器→隆起線紋土器という組列を見いだした次第である。そして、系統的に遡上できたという意味で、東京・多摩ニュータウン No. 796 遺跡の斜格子目紋土器、これが今のところ最古の縄紋土器というべきであろう。

要するに、縄紋土器としての系統的連続性の遡上部分・隆起線紋土器以前を繋ぐ故に窩紋土器は重要である、と筆者は強調したい。その意味で、佐藤達夫氏の主張とはいささか異なる。見いだされた、斜格子目紋土器→窩紋土器→隆起線紋土器、は日本列島内での地方的変遷であり、隆起線紋土器の在り方から判断して、直前にも地方差のある型式が予想されるのである。見いだされるのは、地方差をはらみながらの連続性の遡上ということであろう。その意味で縄紋式の底は見えないが、見いだした部分は縄紋式である。

残念ながら、起源論とは直接は結びつかないが、隆起線紋土器以前のこれら土器群は、これまで述べたように〔大塚1990 b・c〕、形態上肥厚する口縁部という特徴でまとめられ、いわば、肥厚系口縁部土器型式群というべき別の一群を形成し——斜格子目紋土器（多摩ニュータウン No. 796 例〔石井・武笠1989：第1図，2頁〕）→窩紋土器古（図14-1・3）→窩紋土器新（図14-5～28／図15-1・2／図1上段左3片）→窩紋土器新々（図版3上段左から二番目）——、より細かく見れば窩紋土器は、非肥厚系口縁部土器である隆起線紋土器への過渡的段階を占め、その間に様々な次元の属性（形態・装飾・紋様帯）の連続的展開と、新要素・隆線の登場が窺える（図16-1→同2）、と解する。小瀬が沢洞穴資料は、肥厚系口縁部土器型式群の後半から終末の段階であり、そのため、理解に困難を極めたのである。また、最近、細部では違いがあるが、谷口康浩氏も隆起線紋土器以前の土器の特徴として肥厚する口縁部を上げており〔谷口1991 a：註(11)，48-49頁〕、隆起線紋土器以前の古式縄紋土器について、何に着目するかは一定の方向性が得られたであろう。なお、氏によって、筆者のこの見方が紹介されている〔谷口1991 b：201頁〕。

また、縄紋土器起源論の具体的課題の一つである、縄紋の発生についても、筆者なりの考えを述べた。通説では、縄紋土器を最も長く広く飾った縄紋について、東北中心の多縄紋土器型式群が縄紋施紋の最古といわれてきたが、隆起線紋土器より古い窩紋土器から東日本を中心とした隆起線紋土器中に縄紋施紋例が見つかり、縄をおしついたり、あるいは自縄自巻・巻紐を押しついたり、縄を回転施紋したり、絡条体・棒巻縄を押しつける例など、多縄紋土器に見られる各種縄紋がすでに窩紋土器から隆起線紋土器にあるので、これらの型式群が縄紋使用の下地を築いたといえよう（図20）。特に東北地方に特徴的な微隆起線紋の下に横位方向の回転縄紋がある宮城・下窪例（日向I c式）によって、土器の表面がさほど乾燥しない段階で施紋がおこなわれたこと、そして、縄紋土器に通有な横位方向の回転縄紋がすでにあることが分かった。この地方では土器の底が下側にあって安定した状態で施紋する伝統・正位の土器扱いで一貫していることが関係し、器面の乾燥が進行しない段階での施紋が確立した、その証拠が宮城・下窪例である。乾燥が進行しない段階での施紋が確立したことで、それまでは施紋具の一つにすぎなかった縄が、施紋具として多用が可能となり、

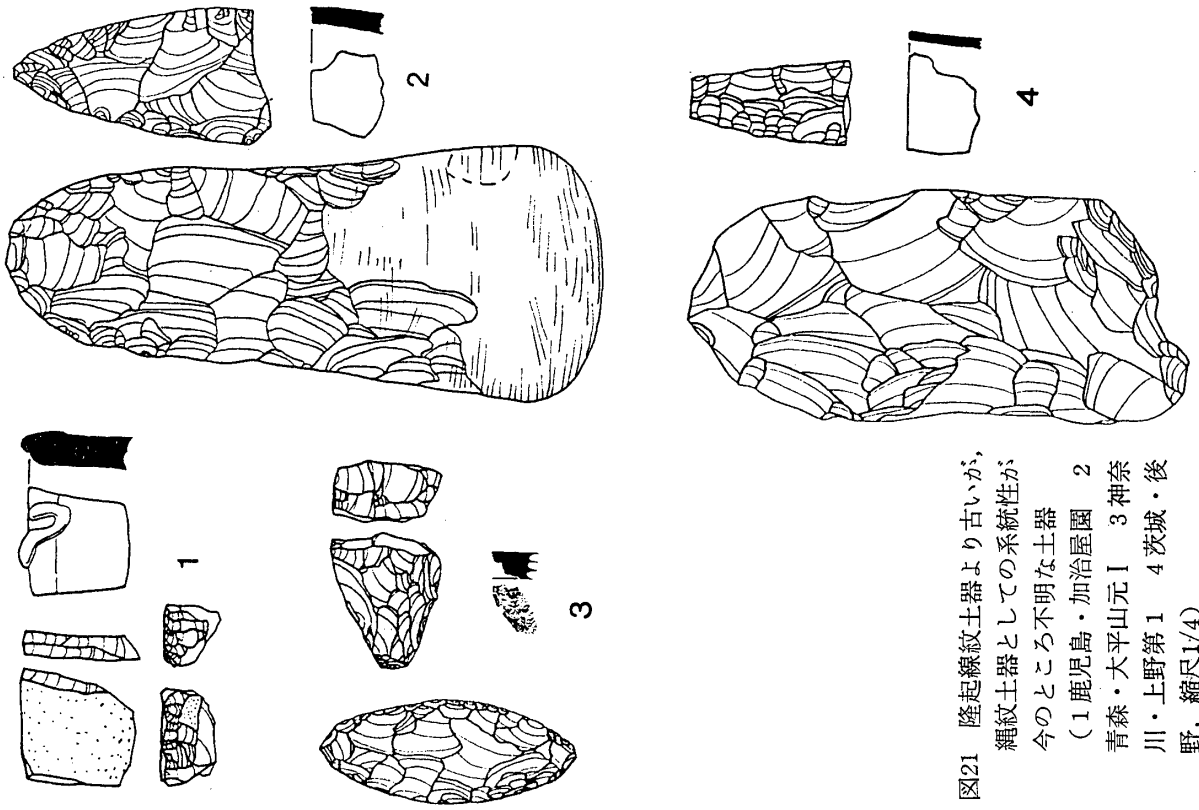


図21 隆起線紋土器より古いが、  
縄紋土器としての系統性が  
今のところ不明な土器  
(1) 鹿兒島・加治屋園 2  
青森・大平山元 I 3 神奈  
川・上野第 1 4 茨城・後  
野, 縮尺1/4)

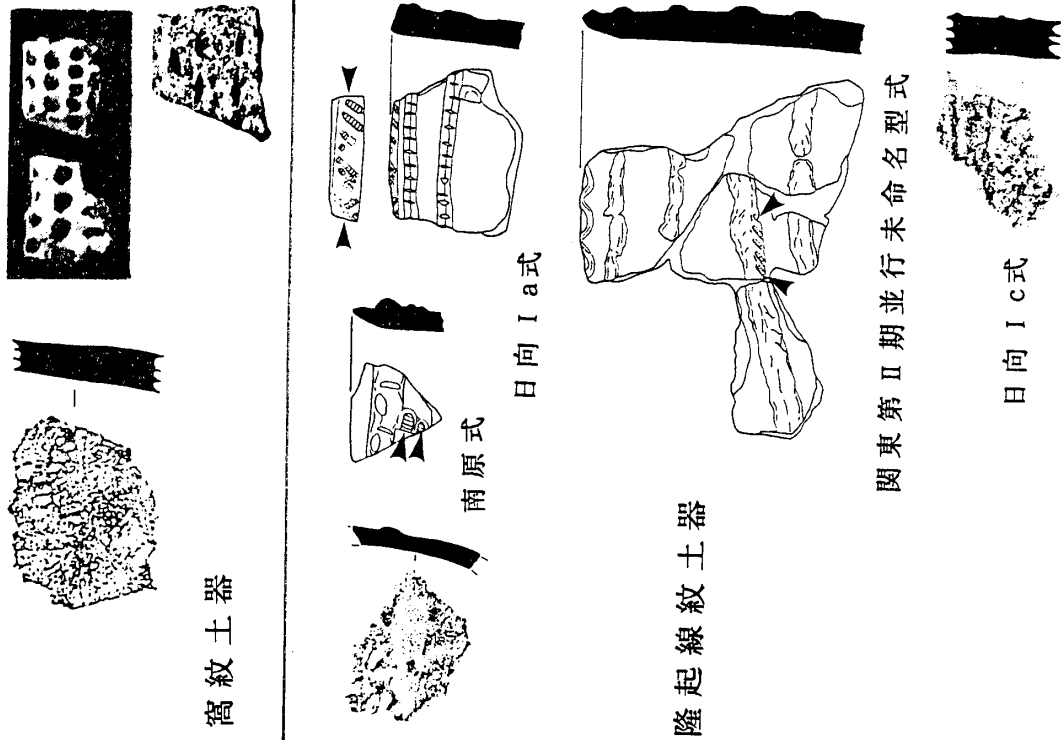


図20 多縄紋土器以前に縄紋裝飾を担う土器  
型式群一高紋土器・隆起線紋土器 (縮尺1/2)

東北を中心に縄紋で飾る多縄紋土器型式群が成立するという結論に至った。

そこで、もう一つ主張したのは、窩紋土器は、縄紋土器工芸史上、装飾としての縄紋を施した「始源縄紋」土器という評価を与えるべきであろうということである。小瀬が沢洞穴例全点のチェックではないが、窩紋が縄による例であることを鑑みると、宮城方面で、一連の遺跡踏査・調査から、古式縄紋土器に於ける縄紋施紋の問題が提起されているのには〔山田ほか1990：37-46頁〕、重大な関心を払うべきであろう。

かえすがえすも残念なのは、事実には支えられていなかった“隆起線紋土器が最古”によって小瀬が沢洞穴の調査成果が忘失されたことである。体制的認識に惑わされることなく窩紋土器の編年の位置に思い至ったのは佐藤達夫氏であり、それに批判的な立場でありながら、しかし、窩紋土器の装飾の実態を見抜いたのは小林達雄氏である。筆者の窩紋土器研究は正に両氏に負っている。両氏の主張のそれぞれの中に妥当性があるのを認め、宮城・大原B遺跡の成果、多摩ニュータウン No. 426 遺跡調査からの原川雄二氏の問題提起を深刻に受けとめ、千葉・南原遺跡資料に呻吟しながら、その後長野・仲町遺跡例を知り、後藤勝彦氏の積年の熟慮による、回転縄紋を併用した微隆起線紋土器資料の再報告から学び、それらを編年的に位置づけ、土器扱いという視点から技術上の論点を見いだしたことで、窩紋土器、隆起線紋土器、多縄紋土器を縄紋土器工芸史からも位置づけられたといえよう。

繰り返すが、縄紋土器の起源が見えたのではない。そもそも縄紋土器は、大陸との関係が稀なあるいは不明な一方で、日本列島内で見れば、年代的にも地方的にもおびただしい変化があり、年代的・地方的なまとまり（型式）が多数見られるが、隣地域どうしでは相互に交渉があってよく似た変化を示すことで縄紋土器としての連続性・系統性が連綿と担われてきたのであって、そのようにして日本列島内で独特な発達を遂げた土器群が縄紋土器である〔山内1939〕。隆起線紋土器や窩紋土器や斜格子目紋土器はそのような時代的に連続し同時代的に連鎖する縄紋土器の連続性の遡上部分に位置するといえよう。さらに、縄紋装飾の遡上も分かった。従って、隆起線紋土器を縄紋土器の範囲から除外し「晩期旧石器時代」／「中石器時代」に編入したり〔芹沢1975〕、「原土器時代の土器」とことさら特殊視する〔杉原1967〕、などの必要はないと考える。また、縄紋土器の誕生を多縄紋土器からと見るべきではないか、という見解〔鎌木1965, 1966〕についても、筆者が見いだした縄紋式縦横連鎖構造から異論をはさむ。

むしろ、佐藤達夫氏の研究〔佐藤1971b〕にあるように、草創期に於ける細別型式数の増加に対し大別をどう設定するか、という問題に目を遣るべきであろう。佐藤氏は「草創期前半」という大別を試みたが、編年案についてはやや問題があったといえよう。また、「草創期前半」という大別は意味あいをやや異にしながらも使用され〔谷口1991a〕、そこでは隆起線紋土器以前として、長野開田高原、中部地方南部、関東地方南部の最新の資料・情報をもとに多数の遺跡例が編年表に提示され興味深い。隆起線紋土器以前の資料の増加と問題の所在が奈辺にあるか、最新状況を提示していよう。ただし、その場合の縄紋土器としての系統的議論がどう展開されているのかについては、

編年の提示以外に細かい説明がないので、やや分かりにくい。例えば、本来問われて来たのは、縄紋土器の最古の姿は何かであり、その基準には系統的議論が欠かせないのではなかろうか。その点の議論が知りたいところである。ともあれ、佐藤氏や谷口氏の議論を慎重に検討すれば、大別の設定は必然的であろう。

そう考え、系統的議論にこだわりながら、筆者は、隆起線紋土器が縄紋土器起源論に関わる土器ではないこと、泉福寺下層式—上黒岩Ⅰ式—南原式—日向Ⅰa式というホライズンを確認できたこと、それ以前に縄紋土器の系統を遡る土器として、肥厚系口縁部土器型式群があること、すなわち、“隆起線紋土器が最古”ではないことを徹底するために、かつ、大別の本来の主旨に鑑み〔山内1939：補註19, 43頁〕、隆起線紋土器以前すなわち草創期以前として遡源期を設定して（7大別の提唱：遡源期・草創期・早期・前期・中期・後期・晩期）、斜格子目紋土器、窩紋土器を遡源期に位置づけ、縄紋土器の系統的遡上を確認するべきであると考え（註18）。

隆起線紋土器はかつて最古の縄紋土器と見なされ、縄紋土器の起源がここにあると説かれ、大陸からの伝播が想定されたが、既に説明したように、こまかい地方差が当初からありながら交流も顕著で、例えば豆粒紋はそのよい指標であり、土器製作上の流儀の違い（九州は逆位の土器扱いで一貫し、東日本は正位の土器扱いが伝統で、中間の西日本は正位から逆位の土器扱いに変化する）も大きいことから、より古い縄紋土器の存在と、それからの変化を考えなければならず、日本列島内により古い縄紋土器を探ることが第一であると強調した。現に、肥厚系口縁部土器型式群の存在を明示したし、縄紋装飾は隆起線紋土器以前から連続と東日本・東北を中心に担われてきたことが窺われるのである。しかも、近年の調査からは、縄紋土器としての系統性が不明な謎の、隆起線紋土器以前の土器が全国的にかなりあることを認めなければならぬ。本報告が完了している例を上げるだけでも、南九州の独特な細石器を伴う鹿児島・加治屋園遺跡〔長野ほか1981〕の小波状浮紋土器（と仮称する：図21-1）は南九州の古式土器としてあらためて注目されているが〔岡村1990, 雨宮1991, など〕、泉福寺下層式以降の変遷には組み込めないと思われる故に、九州全域に於いて最古の土器と考えるべきであり、また、本州では、神子柴・長者久保文化と呼ばれる独特な局部磨製石斧や石槍が指標の石器群に伴う「無文土器」（青森・大平山元Ⅰ〔三宅ほか1979〕、茨城・後野〔川崎ほか1976〕：図21-2・4）、特異な細石器や石槍を伴う神奈川・上野第1地点下層〔相田・小池1986〕の「無文土器」（ただし、無紋と断定できないように思われる：図21-3）など、隆起線紋土器以前と考えるべき土器群がある。だが、縄紋土器として系統的に遡上する肥厚系口縁部土器型式群を設定してくると、これとどのような関係にあるか、今のところ判然としない。そこで、岡本東三氏が「第三の土器」として注意を喚起した点を尊重したい〔岡本1986b〕。以前の発言の一部〔大塚1989b：258頁〕に「第三の土器」の問題を深く考えないと岡本氏から注意を受けたが、確かに隆起線紋土器以前の土器群の系統的理解をこのようにまとめるならば、縄紋土器として系統性が今のところ分からない土器が複数あるといわざるを得ない。

そのように一見錯綜した資料的状况下で（図21）、列島内を時期的に遡上するという課題に携わ

るとき、後氷期以降の環境変化の評価、環境適応の問題もからむので、縄紋土器・文化の起源が、単一の文化として古く遡るのか、あるいは複数の文化の関係したものとして探れるのか、さらには大陸からの影響はどうか、それらの問いかけが必然となろう。今日的資料状況からは、「そ（遡）源の可能性はあるいはないものかもしれない。」（前掲）、と断定するのではなく、だからこそ、それらの問題を、遡源期の設定と内容の吟味とから究明しなければならないと考える。土器製作技術の伝播と渡来石器を想定した草創期〔山内1969b〕は、日本列島内での隆起線紋土器以前の問題が現実となった今、縄紋土器・文化起源論に対しては必ずしも有効な枠組とはなり得ないであろう。他方、遡源期の吟味を的確になすには、研究者側の思考のパラダイムの転換がいかになされるべきかの省察も欠かせないことは多言を要しない〔加藤(晋)1980, 今村1982, 稲田1986, 小杉1988, 大貫1989, 中村(五)1990, 鈴木(忠)1990, 安斎1991, 泉1991, 佐藤(宏)1991, など〕。

以上、前篇での様々な研究状況に対しての異議申立てにあわせて、学史の総括とともに、隆起線紋土器以前をどう見ていくか、ミクロ的な土器分析から筆者の論点の提示に努め、責任の所在を明らかにした。縄の問題や、土器扱いの問題に端的に現れているように、もはや土器の表面的特徴を撫で廻すだけの土器分析では何等解決を得られないであろう。そのためには多くの図版を必要とする内容であるが、十分な図・写真図版の提示を果たせなかったのは残念である。その上に、考古学にとって第一義的な遺跡と土器との対話から何を筆者は見いだしたかといえ、むしろ筆者の思慮の及んでいない問題が山積しているのを痛感した方が大きい、それでも汲んで頂けるものがあれば幸甚である。なお、新資料中には論ずべきものがあるが、それは別途論じることでご寛恕頂きたい。今後も諸賢の助力を乞う次第である。  
(1991年10月30日稿了)

**謝辞** 本稿を草する際に、藤本 強、河口貞徳、後藤勝彦、中村五郎、林 謙作、小林達雄、石井則孝、小田静夫、安斎正人、今村啓爾、鷹野光行、大貫静夫、岡本東三、面高哲郎、篠原 正、坂本 彰、笹森健一、駒形敏朗、原川雄二、深澤芳樹、織笠 昭、芳賀英一、高橋龍三郎、中村由克、佐藤宏之、山田晃弘、西田泰民、谷口康浩、武笠多恵子、小熊博史の各氏から筆に尽くせぬ様々なご教示とご配慮を頂戴した。ここに記して謝意とします。

また、河口貞徳氏からは宮崎・大平遺跡資料について、面高哲郎氏からは宮崎・西ノ園遺跡資料について、資料発表を委ねられたことに、あわせて、感謝いたします。

最後に、白石・鈴木・栗島三氏にもお礼を申し上げたい。三氏の論考がなければ土器研究はいかにあるべきか、土器との対話以外にないということを確認できなかったであろう。窩紋土器について成案にはほど遠く、あれこれと判断に躊躇することが多々あり続けるが、自己の確信する事実<sup>1</sup>に依拠するしかあるまいし、縄紋土器の問題は、正に縄紋土器の観察を体制的認識にとらわれることなく先鋭な問題意識のもとで行わなければならないであろう、と、少なくともそのことが再確認出来たのだから、三氏には、心からお礼を申し上げる。とともに、若干申し添えて、締めくくりたい。相互に批判は自由に、言いたいことは皆言うべきであろう。だが、手抜かりがあるのにいまだにそ

れを直さず悪し様に文句を言うのは感心しない。我に帰ったら自問して頂きたい。何故に、小瀬が沢の窩紋土器の窩紋が縄紋であるという小林氏の問題提起や、原川氏による隆起線紋土器での縄紋問題などを議論の正面に据えないのか、を。さもないと、土器に基づかない土器研究と言われても仕方無いであろう。

註

1) 逆に年代を遡ると、1960年に小瀬が沢洞穴の本報告が刊行された直後1961年、小瀬が沢洞穴調査成果が提示した問題と、福井洞穴調査成果が提起した問題が対立状態にあったのである。福井洞穴の調査者の一人である芹沢長介氏が、「小瀬ガ沢洞窟における土器型式の序列とくらべてみると、やや異なった状態だといわなくてはならない。少くとも九州（福井洞穴一大塚註）では、捺型文←刺突文・大形爪形文←爪形文←隆起文という変遷が誤りのないところである。」〔芹沢1961b：9頁〕と述べていることを再度引用しておこう。つまり、層的事実に基づき井草式を最古とする捺糸紋土器諸型式の編年上の整備及び押型紋土器の編年的位置の改訂〔岡本（勇）・芹沢1953〕以降、調査遺跡の増加・新資料の増加の中で、1960年代初頭に於いては厳密にはどのような土器を最古とみなすかは未決着の状態であったのである（今も未決である）。別の論評も往時の状況を知るときに参考となる〔山内1960, 芹沢1961a〕。江坂輝彌氏の小瀬が沢洞穴の調査成果に対するコメントも重要である〔江坂1961〕。

2) それぞれの立場を明快に語っている芹沢長介氏と小林達雄氏の文章を引用しておく（佐藤氏の問題提起の後であることに注意）。

\* 隆起線紋土器を縄紋土器から外す立場：「いまから約一万二千年前（<sup>14</sup>C年代による一大塚註）、まだ細石刃文化の伝統をのこしている九州で土器製作が開始され、その後四国・中国・中部の諸地方をおおっている有舌尖頭器文化のなかへ土器製作技術が伝播していったのではあるまいか。しかも、最古の隆起線文土器は東北地方の一部に達しはしたが、それより北へ伝えられることはなかったのであろう。ほぼ福井洞穴第三層の細石刃文化から有舌尖頭器文化の終焉まで、隆起線文土器が九州から東北地方の一部まで伝播してゆく過程を私は晩期旧石器時代、もしくは中石器時代として、縄文時代早期の直前においている。したがって、隆起線文土器は「縄文土器」のなかにふくめることができず、縄文時代以前の土器ということになる。なお、福井洞穴第二層からは細石刃とともに人間の爪を押しつけて文様とした爪形文土器が出土したが、これも「縄文土器」以前のものである。」〔芹沢1975：98-99頁〕

\* 隆起線紋土器を縄紋土器から除外しない立場：「1960年、長崎県福井洞窟の発掘は、旧石器文化の終末からわが縄文文化のはじまりの事情について重要な事実を明らかにした。すなわち、旧石器時代の最終段階（第Ⅲ期）を特徴づける細石刃を主体とした石器群が、土器を伴って発見されたのである。第Ⅱ層の細石刃には爪形文の土器、その下の第Ⅲ層の細石刃には隆起線文の土器があり、第Ⅳ層は土器をもたない小石刃の石器群であった。その後、同県泉福寺洞窟で福井Ⅲ層の隆起線文土器の仲間のさらに下層から豆粒文と名づけられたより古い土器群が発見された。一方、土器をもたない細石刃文化としては長崎県百花台、鹿児島県加栗山遺跡などがあり、九州の旧石器人が旧石器文化以来の石器を継承しながら土器製作に手を染めたことがわかる。九州に出現した隆起線文系土器様式は、たちまち東西南部にまで波及するが、その地ではすでに細石刃は姿を消し、木葉形石槍や有舌尖頭器、大形片刃石斧など旧石器時代第Ⅲ期とはがらりと面目一新した石器群を伴っている。この石器群の本拠地は北と考えられ、列島を南下する勢を示したが、土器は九州方面から北上しながら、東北部、北海道への到達が大幅に遅れ、ながく無土器縄文時代が続いたと考えられる。」〔小林1977：155頁〕

3) その間、「細隆起線」〔山内ほか1964：157頁〕、「隆起線文土器」〔山内1966：11頁〕とくり、1967年に『日本の洞穴遺跡』（平凡社）が刊行され全国の隆起線紋土器が一望のもとに見ることができて、「細隆起線文ある新型式」〔山内1967：374頁〕／「細隆起線文」〔同：375頁〕、「細隆起線文」〔山内1968a：76頁〕／「細隆起線文土器」〔同：78頁〕、「細隆起線紋土器」〔山内1968b：1,4頁〕／「細隆起線文」〔同：3頁〕、と



ほぼ同じ命名を与えている。

4) 芹沢氏は、福井洞穴第2次調査成果をすぐ受入れた結果、福井洞穴3層の隆起線紋土器と2層の爪形紋土器を「無土器文化から縄文文化への過渡期」と規定し、さらに九州から本州にかけて過渡期を設定する〔芹沢1963〕。1965年には、「過渡期」を「中石器時代」に変更し〔芹沢1965：25頁〕、縄紋時代からの分離が明確化する。だが、この「過渡期」／「中石器時代」は、土器＋細石器の一回性に立脚した隆起線紋土器の東への伝播という図式の根拠があやしくなったことによる臨時的判断である。当然ながら、この時点で芹沢氏は先に示した伝播論的図式を一端停止する。<sup>14</sup>C年代の比較に福井2・3層の位置付けの方策を見だし、1967年には、伝播論的図式を復活させることになる。先ず、福井洞穴の2・3次調査報告〔鎌木・芹沢1967〕で、1970年代以降に流布するところとなる、細石器（4層）→隆起線紋土器＋細石器（3層）→爪形紋土器＋細石器（2層）、を提示し、そして全国的に先土器時代から縄紋時代にかけての層位的出土例とその年代を検討し、また、「過渡期」・「中石器時代」と呼んだ階梯の年代的位置づけの補強を世界的視野の中で試みる〔芹沢1967 a・b・c〕。注意しなければならないのは、九州と四国・本州の隆起線紋土器についてその先後関係を見るのに以前のように伴出石器の違いで議論するのではなく（福井洞穴に於いて土器と細石器の伴出関係が継続的であることがそうさせないのであるが）、といて、土器自体の比較でもなく、先後関係が<sup>14</sup>C年代によって決定されていることである。そうして、「中石器時代」の中で、あらためて福井洞穴3層の細石器を伴う隆起線紋土器が古いことを結論付け、細石器伴出の特殊性を強調し、隆起線紋土器が東へ伝播するという図式によって再度解釈を試みる。以後この態度のもとで進み〔芹沢1969, 1972〕、註2)で紹介した発言の如く、「過渡期」という判断は、「中石器時代」や「晩期旧石器時代」に変貌し、該期の土器は土器自体の検討のないままに縄紋土器から外されてしまうのである。

5) この時点では山内氏は東釧路式や下頃部式を草創期に含めたが、後に撤回する。なお、筆者が遼源期という大別を提唱する際の“遼源”とは、ここで引用した文章の中の「そ（遼）源」から取ってきた。

6) 何故に佐藤氏の指摘が受け入れられなかったのであろうか。最大の理由は佐藤氏が福井洞穴に於ける土器と細石器の伴出を否定し、それを混在と見なしたことにあろう。後に、佐藤編年が非科学的であると断定されてしまうのも、佐藤氏が主張する福井洞穴での土器と細石器混在説故なのである〔例：鈴木（保）1982〕。また、原則的立場を佐藤氏と同じとする岡本東三氏も、佐藤氏の新編年案を紹介することはあっても〔岡本（東）1982, 1986 a〕、それに必ずしも肯定的ではない〔岡本（東）1979, 1986 b〕のは、土器と細石器混在説には従えないからである〔岡本（東）1979：註20, 28頁〕。筆者もこの判断が誤解であることは前篇に述べた通りである。勿論、筆者は佐藤案にそのまま従うのではない。篋紋土器や爪形紋土器の位置づけには賛成していない。その理由は前篇で述べた。だが、土器自体の比較という手続きから考えるならば、隆起線紋土器最古説の方に片手落ちがあったといわざるを得ない。

7) 紋様の分類について述べておく。

南原式の古い部分 波状横走隆線紋：図8-1・2・3・8, 図9-1～3・7, 図版6-7 刻みや刺突による装飾的横走隆線紋：図9-4・6・9～12, 図版6-9 波状横走隆線紋＋刻みや刺突による装飾的横走隆線紋（異種重畳）：図8-4, 図9-8 縄を施紋具にした波状あるいは装飾的横走隆線紋：図9-14 蛇行垂下隆線紋：図8-1 刻みや刺突による装飾的垂下隆線紋：図8-4, 図版6-7 波状斜走隆線紋：図8-3 刻みや刺突による装飾的斜走隆線紋：図9-4・5, 図版6-7 縄を施紋具にした装飾的斜走隆線紋：図9-1 「ハ」の字形爪形紋：図8-4・8・10, 図9-2 口唇部波状装飾紋：図8-9・10 口唇部刻紋：図9-9・10 豆粒紋：図8-2・3・5～7

南原式の新しい部分 波状横走隆線紋：図10-2～4, 8～12・15 刻みや刺突による装飾的横走隆線紋：図10-1 波状横走隆線紋＋加飾の無い直線的横走隆線紋（異種重畳）：図10-13 加飾の無い直線的垂下隆線紋：図10-9 加飾の無い直線的斜走隆線紋：図10-10・15 「ハ」の字形爪形紋：図10-5～7・12 波状装飾紋：図10-4・5 口唇部刻紋：図10-1・2 豆粒紋：図10-11・14

8) 隆起線紋土器に関する前稿〔大塚1982〕で関東第Ⅰ期に上げた遺跡資料——神奈川・花見山、東京・なすな原、千葉・瀬戸遠蓮、同・地国穴台——は、南原式に含めるべきと考えるが、細別の提唱に際しては基準に含めていない。この点をご寛恕願いたい。その理由は、第一に本文で示したような広域編年上の基準も兼ね

た基準でこれらの遺跡資料を見ると、肝心な部分の特徴が分からないからであり、また、本文で述べるような多摩ニュータウン No. 426 例や南原例のような深いしっかりした刺突や刻みが判然としないし、単純性の問題も前稿で触れたように判然としない等の理由からである。なお、花見山遺跡については、坂本 彰氏らによって独自の細別研究が進められているようであるが〔横浜市埋蔵文化財センター1990：170-173頁〕、大量の土器資料があるため、本報告の成果に期待したい。さらに前稿に言及するならば、大振りな「ハ」の字形爪形紋と小振りな「ハ」の字形爪形紋を時期差としてあげたが〔大塚1982：92-108頁〕、広く資料に接するにつれ、主観的であったので撤回した。南原の小振りな「ハ」の字形爪形紋も南原式古に組成すると見なしている。その好例として、神奈川・柏ヶ谷長ヲサ例を上げた次第である。

9) 土器を観察する時色々な角度から眺めるが、横走隆線紋の性状についての分類・記述に際しては約束ごとがある。それは、観察者と土器の位置関係を固定した状態で横走隆線紋を分類し記述するのである。分かりやすく言えば、口縁部を上、底部を下にして、すなわち、隆起線紋土器を正位の状態で見た時に見える紋様の様相・性状を区別・分類し書き記すのである。これまでの記載はすべて正位の状態でなされている。

10) 波状紋の施紋と粘土紐の貼付と工程的に同時であるのか、波状紋は粘土紐上を時計回りに付けられているのかその逆か等の問題については、一個一個の波状紋が独立していること（独立しているとは、紋様どうしが重複せず、単位性が明確なこと）から判断する。もし粘土紐の貼付をしながら波状紋になるよう粘土紐をつまみ・ひねるのでは、細かなつまみ・ひねりを連続することが要求されるので、このような単位の明確な施紋とはならないであろう。実際、そのような凹みどうしの間隔が狭くて切り合い関係を有するものは見いだせないものであるから、粘土紐の貼付と粘土紐をつまみ・ひねることとは同時である可能性は低いではなからうか。施紋の進行が時計回りか・逆時計回りかも気になる点である。もし粘土紐の貼付と粘土紐をつまみ・ひねることとが同時であるならば、当然、利き手と貼付と施紋の関係から、及び凹みが重複しないことから、Rの波状紋即ち右利きの場合ならば施紋の進行は逆時計回りに展開していくと考えるのが合理的であろう。ところが、粘土紐の貼付と粘土紐への加飾が同時でないとして筆者は考えている。その場合も、単位性が獲得されるような施紋に着目したい。例えば、Rの波状紋即ち右利きの場合をあげるならば、逆時計回りに施紋していく方が、つまみ・ひねりを加えてできた波状紋が手に隠れず、次に施紋すべき指先の位置が確認できるので、独立した波状紋が設定しやすいのではなからうかと考えるのである（勿論、左利きの場合は施紋の進行は時計回りである）。当然、この場合、土器自体は時計回りに回されることになる。なお、筆者は隆線貼付自体の進行方向は弁別していない。他方、佐々木氏は日向Ⅰa式の隆線貼付が、左→右、つまり逆時計回りでなされることを指摘している〔佐々木1973〕。

11) 粘土紐の貼付と指頭押圧の行程上の関係を検討すると、次の指頭圧痕がその前に加えられた指頭圧痕と重複していない、換言すれば切り合い関係を有していないことから、粘土紐の貼付が完了した後に指頭押圧が加わると考える。その点、伊敷例（図4-15）は示唆的である。単位性が明確だから、紋様の進行方向を考える時もこのことを念頭に置く。観点としては、先に付けた圧痕を確認しながら次の施紋位置を決定していく結果の筈で、前に付けられた圧痕が手に隠れるような方向には進まないと思われ、施紋の進行は、先に付けた圧痕を確認しながら次の施紋位置を決定し、前に付けられた圧痕が手に隠れるような方向には進まないであろうことを念頭におき、右利きを例に記述した場合、関東例とは反対になり時計回りになる。

12) 図5-3・4・7の土器で、重要なことは、3例では指頭押圧が、4・7例では指先のつまみが粘土紐上へ加えられている（4はつまみが浅く、指先の腹の部分が作った凹みである）が、そのような加飾が加わる粘土紐が互いに重なること、圧痕の在り方や粘土紐の巻き付け方から判断して、粘土紐の貼付と粘土紐上への加飾が一緒に進行していることが観察でき、複雑な作業だから、利き手による作業とみなければならないこと等である。3例では、圧痕に着目するならば、Dの圧痕が重複しながら付けられている。筆者が実見した限りでは、他に同種の破片の別個体がありみなDの圧痕を有している（図版5-1）。この例も粘土紐の貼付と指頭押圧と一緒になされるのであるから、指先の作業を鑑みたならば、右手の親指で圧痕を付けたと考えるのが合理的であろう。4例（図版5-3）と7例は粘土紐上への加飾手法は指先のつまみで、「ハ」の字形の上が右を向き、裾広がりの方が左を向いている、いわば右横向きの「ハ」の字形爪形紋風圧痕を残す。興味深いことに、図にあげ

## 窩紋土器研究序説（後篇）

た他例(図5-8~10) やそれ以外の資料を検討しても、残された横「ハ」の字形爪形紋風圧痕は、右横向きの「ハ」の字形爪形紋風圧痕ばかりであった。当然これらも右利きによる施紋作業と考えるのが合理的である。かかる観察結果から動作を復元しようとする、逆位の土器扱いが導出されるのである。

13) 筆者は寺尾の胴部破片の縄紋(図14-12)は本来的なものではなく偶然の所産と考える。本来口縁部に紋様をつけるために縄があったと考えるべきであろう。だが、筆者の肉眼観察では図14-5~7・9の窩紋を縄紋とは断定できない。これらが縄紋ならば、正に小瀬ガ沢の窩紋土器の紋様と同じである。ところで、寺尾例を縄紋施紋と判定した白石氏は何故小瀬ガ沢の窩紋土器との対比を考えなかったのであろうか、前から疑問に思っている。小瀬ガ沢の窩紋土器が縄紋施紋であるという小林氏の指摘は看過すべき内容ではない筈である。

14) 別の相模野第149例(図14-2)は沈線紋土器として別範疇をもうける意見〔例：白石1990b〕もあるが、口縁部に貼付した粘土紐の下端を棒状工具でなぞったときに出来た凹線であって、大事なのは本来貼付されて形成された肥厚系口縁部にどんな紋様があったかで、肥厚系口縁部の下端のなぞりのための沈線を特殊視するのは、筆者には賛成できない。従って、この土器は窩紋土器の問題からは外さざるを得ない。

15) 何故そう考えるか説明しておこう。仲町例(図17-2)は隆線上に指頭押圧がないが、田沢例(図版5-2)に近いと考える。ひょっとすると、螺旋状貼付かもしれないのだが、これ以上は判別が難しい。しかし、そのようなことから、西ノ園式に近いと考える。西ノ園式には鳥浜貝塚下層式——該式は鳥浜貝塚〔森川・網谷・山田・西田1985, 鳥浜貝塚研究グループ1987, など〕の土器資料観察を基本に、横走隆線は環状貼付で指のつまみで加飾されるが、つまみ痕が横向きの「ハ」の字形爪形紋風に残るが(右横向きの場合が多い)、これを西日本(九州南東部~本州北陸の一部)の型式と筆者は定義する——が伴う(図版5-1上段左端)。また、宮崎・瀬戸口遺跡〔日高1986〕では、大平式に鳥浜貝塚下層式の多条化した隆起線紋土器が伴い、鳥浜貝塚下層式が二分できそうである。他方、前稿〔大塚1982〕で、関東第Ⅲ期の栃木・大谷寺例と並行関係となることを説いた、愛知・酒呑ジュリナ例が実は鳥浜貝塚下層式に含めるべき土器で、この酒呑ジュリナ例が瀬戸口遺跡出土の鳥浜貝塚下層式の新しい部分に対比できるのである。従って、大平式—鳥浜貝塚下層式—関東第Ⅲ期—日向Ⅰb式、が導き出される。他方、泉福寺下層式—南原式(関東第Ⅰ期)であるから、西ノ園式は関東第Ⅱ期に並行すると考えなければならないのである。そういう判断から、仲町例を関東第Ⅱ期に位置づけられるであろう、という次第である。改訂編年案〔大塚1989b〕の編年骨子も理解頂けたであろう。

16) 泉福寺下層式—上黒岩Ⅰ式—南原式—日向Ⅰa式というホライズンの後を見渡すと、泉福寺下層式と南原式・日向Ⅰa式の間地域である西日本では、環状横走隆線紋とつまみによる隆線上加飾では非九州的であるが、土器扱いが九州的に逆位になる土器・鳥浜貝塚下層式が出現する。註14)で説明したように、西ノ園式と大平式に伴うことから新古の別が認められ、隆線をまたぐようにつまむためつまみ痕が右横向きの「ハ」の字形爪形紋風に残る。それが量的に多いことを右利きの所産と考え、その施紋時の土器扱いを復元するならば、中間地域は正位から逆位の土器扱いに変化することが分かる。当然、逆位が伝統的な九州方面からの大きな影響を考えない訳にはいかない。土器扱いの変容で登場する鳥浜貝塚下層式は、九州地方に及びつまみの技法を九州に伝え、受容され、大平式の隆線上加飾がつまみ技法となる。鳥浜貝塚下層式の弁別によって、施紋時の土器扱いは、九州が逆位で一貫し、中間の西日本は正位から逆位に変化してしまう、と概観している。

17) 佐藤氏は縄紋が併用される隆起線紋土器として小瀬ガ沢の一例に注目しているが、当該土器、報告土器番号84例からは縄紋を確認することはできなかった。むしろ、当例はつまみによる加飾があり、大平式との関係を考えるべき重要資料であろう。

18) 草創期の下限の問題は、例えば、山田昌久氏が述べたように、「山内フラット=撚糸文系土器群草創期説」を尊重すべきであろう〔山田1988:141-142頁〕。現在、草創期という大別が内包する問題については、山田氏の所説に言い尽くされていると筆者は考える。

## 引用・参考文献

相田 薫・小池 聡 1986 「第Ⅱ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』:90-178頁, 大和市教育委員

大塚達朗

会

- 麻生 優 1973 「泉福寺洞穴の第四次調査」『考古学ジャーナル』No. 88 : 11-14頁
- 麻生 優・白石浩之 1975 「泉福寺洞穴の第六次調査」『考古学ジャーナル』No. 116 : 5-11頁
- 麻生 優・白石浩之 1976 「泉福寺洞穴の第七次調査」『考古学ジャーナル』No. 130 : 13-20頁
- 麻生 優・白石浩之 1978 「泉福寺洞穴の第八次調査」『考古学ジャーナル』No. 145 : 5-13頁
- 麻生 優・白石浩之 1979 「泉福寺洞穴の第九次調査」『考古学ジャーナル』No. 158 : 5-13頁
- 麻生 優・白石浩之 1980 「泉福寺洞穴の第十次調査」『考古学ジャーナル』No. 172 : 8-16頁
- 麻生 優ほか 1985 『泉福寺洞穴の発掘記録』, 築地書館
- 麻生 優ほか 1991 『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』, 千葉大学文学部考古学研究室
- 兩宮瑞生 1991 「南九州の縄文草創期土器」『縄文通信』No. 4 : 21-32頁
- 安斎正人 1991 「日本旧石器時代構造変動試論」『早坂平遺跡——原石産地遺跡の研究——』 : 99-120頁, 岩手県山形村教育委員会
- 石井則孝・武笠多恵子 1989 「多摩ニュータウン No. 796 遺跡」『東京都遺跡調査・研究発表会14 発表要旨』 : 1-2頁
- 泉 拓良 1979 「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集1 日本原始』 : 142-172頁, 小学館
- 泉 拓良 1991 「縄文文化」『考古学 その見方と解釈 上』 : 75-114頁, 筑摩書房
- 稲田孝司 1986 「縄文文化の形成」『日本考古学6 変化と画期』 : 65-117頁, 岩波書店
- 今村啓爾 1982 「書評 『先刈貝塚』」『考古学雑誌』第67巻第3号 : 119-124頁
- 漆畑 稔・渋谷昌彦 1986 『仲道A遺跡』, 大仁町教育委員会
- 江坂輝彌 1961 「日本考古学上の問題点(三) 縄文文化(一)」『日本歴史』第153号 : 77-86頁
- 江坂輝彌 1974 「1973年の考古学界の動向 縄文時代(東日本)」『考古学ジャーナル』No. 94 : 12-15頁
- 江坂輝彌 1985 「縄文土器文化の起源を探る」『日本史の黎明』 : 9-28頁, 六興出版
- 江坂輝彌ほか 1967 「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』 : 224-236頁, 平凡社
- 江坂輝彌ほか 1969 「愛媛県上黒岩岩蔭遺跡第四次調査速報」『考古学ジャーナル』No. 37 : 17-19頁
- 大塚達朗 1982 「隆起線土器瞥見——関東地方出土当該土器群の型式学的位置——」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第1号 : 85-122頁
- 大塚達朗 1985 『「縄文草創期研究の回顧と展望」参考資料集』, 土曜考古学研究会
- 大塚達朗 1987 a 「泉福寺洞穴出土隆起線紋土器群理解の視座——「豆粒紋土器」の編年的位置を問う——」『日本考古学協会第53回(昭和62年度)総会研究発表要旨』 : 20-23頁
- 大塚達朗 1987 b 「西北九州に於ける縄紋草創期爪形紋土器の再検討——泉福寺洞穴6層土器群の評価について——」『昭和62年度九州史学会大会公開講演・研究発表要旨』 : 35頁
- 大塚達朗 1987 c 「西北九州に於ける縄紋草創期爪形紋土器の再検討——泉福寺洞穴6層土器群の評価について——」『1987年度九州史学会考古部会発表資料集』 : 1-5頁
- 大塚達朗 1988 a 「東北地方に於ける隆起線紋土器の一樣相に就いて——白河市高山遺跡出土隆起線紋土器の再考——」『福島考古』第29号 : 1-12頁
- 大塚達朗 1988 b 「討論 縄文草創期 爪形文土器と多縄文土器をめぐる諸問題:コメント」『埼玉考古』第24号 : 49-66, 102-103頁
- 大塚達朗 1988 c 「縄紋草創期土器群研究の回顧と展望」『埼玉考古』第24号 : 119-124頁
- 大塚達朗 1988 d 「縄紋草創期爪形紋土器研究提要」『埼玉考古』第24号 : 168-171頁
- 大塚達朗 1989 a 「豆粒紋土器研究序説」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第7号 : 1-59頁
- 大塚達朗 1989 b 「草創期の土器」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』 : 34-39, 256-261頁, 小学館
- 大塚達朗 1989 c 「窩紋土器の意義」『利根川』10 : 1-6頁
- 大塚達朗 1989 d 「九州地方の隆起線紋土器の変遷と他地方へ与えた影響について」『平成元年度九州史学

窩紋土器研究序説（後篇）

- 会大会公開講演・研究発表要旨』：34頁
- 大塚達朗 1989 e 「九州地方の隆起線紋土器の変遷と他地方へ与えた影響について」『1989年度九州史学会考古部会発表資料集』：1-2頁
- 大塚達朗 1989 f 「“縄紋土器の起源”研究に関する原則」『考古学と民族誌』：5-36頁，六興出版
- 大塚達朗 1990 a 「隆起線紋の比較から見た九州と本州一序章」『縄文時代』第1号：1-25頁
- 大塚達朗 1990 b 「肥厚系口縁部の変化から見た窩紋土器——古式縄紋土器研究の一視点——」『彌生』No. 20：9-18頁，東京大学文学部考古学研究室談話会
- 大塚達朗 1990 c 「窩紋土器研究序説（前篇）——肥厚系口縁部土器群とその変化——」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第9号：75-120頁
- 大塚達朗 1991 「九州地方の縄紋草創期編年と泉福寺洞穴」『縄文時代』第2号：143-154頁
- 大塚達朗・小川静夫・田村 隆 1979 「市原市南原遺跡第1次調査抄報」『伊知波良』1：1-7頁
- 大塚達朗・小川静夫・田村 隆 1980 「市原市南原遺跡第2次調査抄報」『伊知波良』4：1-19頁
- 大貫静夫 1989 「東北アジアの中の中国東北地区の原始文化」『慶祝蘇秉琦考古学五十五年論文集』：38-64頁，文物出版社，北京
- 岡村道雄 1990 『日本旧石器時代史』，雄山閣
- 岡本 勇 1982 「縄文土器の生成から発展へ」『縄文土器大成1 早・前期』：114-124頁，講談社
- 岡本 勇 1989 「縄文文化の起源と貝塚」『縄文人と貝塚』：57-86頁，六興出版
- 岡本 勇・芹沢長介 1953 「南関東に於ける撚糸土器群の編年について」『日本考古学協会第11回総会研究発表会要旨』：6-8頁
- 岡本東三 1979 「神子柴・長者久保文化について」『研究論集V』：1-57頁，奈良国立文化財研究所
- 岡本東三 1982 『縄文時代Ⅰ（早期・前期）』，至文堂
- 岡本東三 1985 『動向 縄紋土器の起源』（配布資料集），日本考古学会
- 岡本東三 1986 a 「縄紋土器の起源」『考古学雑誌』第71巻第3号：94-95頁
- 岡本東三 1986 b 「先土器時代から縄紋時代へ」『考古学研究』第33巻第1号：82-89頁
- 岡本東三 1988 「シンポジウム雑感」『埼玉考古』第24号：143-145頁
- 小野 昭ほか 1987 「第2回～第4回野尻湖陸上発掘の考古学的成果」『野尻湖遺跡群の旧石器文化Ⅰ』：21-28頁，野尻湖人類考古グループ
- 面高哲郎 1987 「西ノ園遺跡」『火山灰と考古学をめぐる諸問題 第Ⅲ分冊』：103-104頁，埋蔵文化財研究会鹿児島集実行委員会
- 織笠 昭 1991 「西海技法の研究」『東海大学紀要文学部』第54輯（抜刷）：63-96頁
- 柏倉亮吉・加藤 稔 1967 「山形県下の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』：51-65頁，平凡社
- 加藤晋平 1980 「北東アジアの単条有溝砥石について」『日本民族文化とその周辺 考古篇』：839-854頁，新日本教育図書
- 加藤 稔 1961 「東北裏日本における早期縄文土器の編年」『山形史学研究』第3号：1-24，61頁
- 加藤 稔 1967 「山形県日向洞穴における縄文時代初頭の文化」『山形史学研究』第5号：27-47頁
- 加藤 稔 1976 『古代東北文化の源流』，新人物往来社
- 加藤 稔・佐々木洋治 1962 「山形県一ノ沢岩陰遺跡」『上代文化』第31・32輯：33-47頁
- 鎌木義昌 1965 「縄文文化の概観」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』：1-28頁，河出書房
- 鎌木義昌 1966 「縄文式土器・縄文文化の起源について」『岡山理科大学研究紀要』第2号：87-97頁
- 鎌木義昌・芹沢長介 1960 「長崎県福井岩蔭遺跡」『日本考古学協会第26回総会研究発表要旨』：5頁
- 鎌木義昌・芹沢長介 1962 「長崎県福井遺跡調査の問題点」『日本考古学協会第28回総会研究発表要旨』：5頁
- 鎌木義昌・芹沢長介 1963 「長崎県福井洞穴の第2次調査略報」『洞穴遺跡調査会会報』第6号：1-3頁
- 鎌木義昌・芹沢長介 1964 「福井洞穴第三次調査について」『洞穴遺跡調査会会報』第12号：1頁

大塚達朗

- 鎌木義昌・芹沢長介 1965 「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』第3巻第1号：1-14頁
- 鎌木義昌・芹沢長介 1967 「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』：256-265頁，平凡社
- 鎌木義昌・高橋護 1965 「縄文文化の発展と地域性 瀬戸内」『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』：230-249頁，河出書房
- 河口貞徳 1963 「宮崎県串間市大平遺跡」『日本考古学年報10』：92-93頁，誠文堂新光社
- 河口貞徳ほか 1982 「鎌石橋遺跡」『鹿児島考古』第16号：1-79頁
- 川崎純徳ほか 1976 『後野遺跡』，勝田市教育委員会
- 栗島義明 1988 a 「縄文土器北上説に対する覚書」『埼玉考古』第24号：160-164頁
- 栗島義明 1988 b 「隆起線土器以前——神子柴文化と隆起線土器文化の間——」『考古学研究』第35巻第3号：69-79頁
- 栗島義明 1990 「刺突土器に就いて——「窩紋土器」への疑問——」『利根川』11：1-11頁
- 栗原文蔵・小林達雄 1961 「埼玉県西谷遺跡出土の土器群とその編年的位置」『考古学雑誌』第47巻第2号：38-46頁
- 小池聡 1986 「第Ⅰ文化層」『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』：65-89頁，大和市教育委員会
- 小杉康 1988 「縄文時代の時期区分と縄文文化のダイナミクス」『駿台史学』第73号：99-124頁
- 後藤勝彦 1990 「宮城県柴田郡川崎町下窪遺跡出土の隆起線土器について」『宮城史学』13号（別刷）：11-18頁
- 小林達雄 1962 「無土器文化から縄文文化の確立まで」『創立80周年記念若木祭展示目録』：6-12頁
- 小林達雄 1963 「長野県荷取洞窟出土の微隆起線土器」『石器時代』第6号：47-53頁
- 小林達雄 1967 「縄文早期前半に関する問題」『多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ』：14-70，79-82頁，多摩ニュータウン遺跡調査会
- 小林達雄 1968 「室谷第一群土器に関する覚書」『歴史教育』第16巻第4号：33-43頁
- 小林達雄 1974 「縄文土器の起源」『考古学ジャーナル』No. 100：26-30頁
- 小林達雄 1977 「縄文土器の世界」『日本原始美術大系1 縄文土器』：153-181頁，講談社
- 小林達雄 1978 『縄文土器』，至文堂
- 小林達雄 1979 『日本の原始美術1 縄文土器Ⅰ』，講談社
- 小林達雄 1982 「総論」『縄文文化の研究第3巻 縄文土器Ⅰ』：3-15頁，雄山閣
- 小林達雄 1983 「総論——縄文土器の生態——」『縄文文化の研究第5巻 縄文土器Ⅲ』：3-17頁，雄山閣
- 小林達雄 1985 「新潟県 室谷洞窟 <縄文「草創期」から早期への土器の変遷>」『探訪縄文の遺跡 東日本編』：468-474頁，有斐閣
- 小林達雄 1987 a 「日本列島における土器の登場——はじめにイメージありき——」『國學院大学考古学資料館紀要』第3輯：3-23頁
- 小林達雄 1987 b 「縄文時代草創期について」『大和のあけぼの—2万年の文化を発掘する—』：45-69頁，大和市教育委員会
- 小林達雄 1988 a 「縄文土器の文様」『縄文土器大観2 中期Ⅰ』：300-307頁，小学館
- 小林達雄 1988 b 「縄文土器の器形と用途」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』：264-270頁，小学館
- 小林達雄 1989 「縄文土器の編年」『縄文土器大観1 草創期 早期 前期』：248-255頁，小学館
- 小林達雄ほか 1980 「〔座談会〕縄文土器の起源」『國學院雑誌』第81巻第1号：19-63頁
- 小林達雄ほか 1982 『壬遺跡 1982』，國學院大学文学部考古学研究室
- 小林達雄ほか 1988 「〔座談会〕岩宿遺跡発見前後と旧石器文化研究の展望」『國學院雑誌』第89巻第1号：16-43頁
- 小林達雄・安岡路洋 1979 「縄文時代草創期における回転施文縄文への一様相——埼玉県大里郡岡部町水久保遺跡——」『埼玉県史研究』第4号：1-20頁
- 佐々木洋治 1971 『高島町史 別巻 考古資料篇』，高島町

窩紋土器研究序説（後篇）

- 佐々木洋治 1973 「山形県における縄文草創期文化の研究Ⅰ」『山形県立博物館研究報告』第1号：47-64頁
- 佐々木洋治 1975 「山形県における縄文草創期文化の研究Ⅱ」『山形県立博物館研究報告』第3号：25-43頁
- 佐藤達夫 1969 「考古学・25年の歩み 旧石器時代 無（先）土器時代 縄文時代」『日本考古展目録』：7-10頁，東京国立博物館
- 佐藤達夫 1971 a 「無土器文化の石器」『日本歴史』第276号：111-123頁
- 佐藤達夫 1971 b 「縄紋式土器研究の課題——特に草創期前半の編年について——」『日本歴史』第277号：107-123頁
- 佐藤達夫 1974 a 「黎明期の日本」『図説日本の歴史第1巻 日本のあけぼの』：69-84頁，集英社
- 佐藤達夫 1974 b 「縄紋式土器 1 縄紋草創期前半の編年について」『日本考古学の現状と課題』：60-80頁，吉川弘文館
- 佐藤宏之 1991 「「尖頭器文化」概念の操作的有効性に関する問題点」『シンポジウム記録集 中部高地の尖頭器文化』：124-134頁，長野県考古学会
- 佐原 眞 1956 「土器面における横位文様の施文方向」『石器時代』第3号：25-36頁
- 佐原 眞 1959 「彌生式土器製作技術に関する二三の考察」『私たちの考古学』第5巻第4号：2-11頁
- 佐原 眞 1962 「縄文式土器」『河内船橋遺跡出土遺物の研究（2）』：69-70頁，大阪府教育委員会
- 佐原 眞 1979 「土器製作法」『世界考古学事典 上』：781-782頁，平凡社
- 佐原 眞 1981 「縄文施文法入門」『縄文土器大成3 後期』：162-167頁，講談社
- 佐原 眞ほか 1991 「スミソニアン共同研究・土器研究会」『文化庁・スミソニアン研究機構研究交流備忘録平成2年度』：11-43頁，東京国立文化財研究所
- 篠原 正 1981 「成井遺跡出土の隆起線紋土器」『舌状台地』創刊号：1頁
- 白石浩之 1980 「第Ⅰ文化層」『寺尾遺跡』：10-86頁，神奈川県教育委員会
- 白石浩之 1984 「縄文時代草創期の爪形文土器の研究とその課題」『大和市史研究』第10号：1-23頁
- 白石浩之 1986 「縄文文化の起源をめぐる問題——長崎県泉福寺洞穴の成果とその周辺——」『歴史手帳』第14巻4号：29-36頁
- 白石浩之 1988 「シンポジウム補遺」『埼玉考古』第24号：115-118頁
- 白石浩之 1990 a 「縄文時代草創期研究における問題点—大塚達朗氏の研究を中心として—」『縄文時代』第1号：133-139頁
- 白石浩之 1990 b 「本ノ木遺跡の意味するもの—縄文時代草創期研究の視点—」『神奈川考古』第26号：1-26頁
- 杉原荘介 1967 「日本先土器時代の新編年に関する試案」『信濃』第19巻第4号：1-4頁
- 鈴木重治 1973 「宮崎県岩土原遺跡の調査——土器伴出細石器文化の一例——」『石器時代』第10号：91-98頁
- 鈴木次郎 1989 『相模野第149遺跡—相模考古学研究会による発掘調査の記録—』，大和市教育委員会
- 鈴木忠司 1990 「先土器・旧石器そして岩宿時代」『古代学研究所研究紀要』第1輯：1-17頁
- 鈴木道之助 1986 「新東京国際空港 No. 12 遺跡の有舌尖頭器をめぐる」『千葉県文化財センター研究紀要』第10号：1-19頁
- 鈴木保彦 1969 「縄文草創期の土器群とその編年」『史叢』第12・13号：41-53頁
- 鈴木保彦 1977 「縄文土器出現の様相」『どるめん』No. 15：81-104頁
- 鈴木保彦 1982 「草創期の土器型式」『縄文文化の研究第3巻 縄文土器Ⅰ』：44-65頁，雄山閣
- 鈴木保彦 1988 「爪形文土器と押圧縄文土器」『埼玉考古』第24号：125-128頁
- 瀬戸口 望 1981 「東黒土田遺跡発掘調査報告」『鹿児島考古』第15号：22-54頁
- 芹沢長介 1954 「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」『駿河史学』第4号：65-106頁
- 芹沢長介 1956 「縄文文化」『日本考古学講座 第3巻 縄文文化』：44-77頁，河出書房

大塚達朗

- 芹沢長介 1958 「縄文土器」『世界陶磁全集第1巻 日本古代篇』：159-176頁，河出書房
- 芹沢長介 1959 「日本最古の文化と縄文土器の起源」『科学』第29巻第8号：404-408頁
- 芹沢長介 1961 a 「日本最古？の土器を発見した中村孝三郎」『日本』3月号：208-209頁
- 芹沢長介 1961 b 「1960年の歴史学界一回顧と展望」『史学雑誌』第70編第5号：8-13頁
- 芹沢長介 1962 a 「旧石器時代の諸問題」『日本歴史 原始および古代1』：77-107頁，岩波書店
- 芹沢長介 1962 b 「縄文土器の起源」『自然』第17巻第11号：28-35頁
- 芹沢長介 1963 「火山灰中の人類遺物」『第四紀研究』第3巻第1・2号：67-71頁
- 芹沢長介 1965 「無土器文化の編年について」『考古学研究』第11巻第3号：16-28頁
- 芹沢長介 1966 「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大学日本文化研究所研究報告』第2集：1-67頁
- 芹沢長介 1967 a 「日本における旧石器の層位的出土例と<sup>14</sup>C年代」『東北大学日本文化研究所研究報告』第3集：59-109頁
- 芹沢長介 1967 b 「旧石器時代の終末と土器の発生」『信濃』第19巻第4号：5-12頁
- 芹沢長介 1967 c 「日本の旧石器(7)」『考古学ジャーナル』No. 11：10-11頁
- 芹沢長介 1969 「東アジアにおける土器の起源」『歴史教育』第17巻第8号：1-9頁
- 芹沢長介 1972 「縄文土器の起源」『サイエンス』第2巻第5号：18-35頁
- 芹沢長介 1973 「「泉福寺洞穴調査速報」に対するコメント」『考古学ジャーナル』No. 89：5頁
- 芹沢長介 1975 『陶磁大系第1巻 縄文』，平凡社
- 芹沢長介 1979 「日本旧石器時代の編年について」『考古学ジャーナル』No. 167：2-6頁
- 芹沢長介 1982 「縄文土器の起源」『縄文土器大成1 早・前期』：146-151頁，講談社
- 芹沢長介 1984 「土器製作のはじまり」『考古学ジャーナル』No. 239：2-6頁
- 芹沢長介ほか 1967 「埼玉県橋立岩陰遺跡」『石器時代』第8号：1-28頁
- 芹沢長介ほか 1968 「新潟県田沢遺跡の発掘調査予報」『考古学ジャーナル』No. 27：6-8，14頁
- 芹沢長介ほか 1974 『古代史発掘1 最古の狩人たち』，講談社
- 芹沢長介ほか 1982 『シンポジウム C-14年代の信頼性』，文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班十亀幸雄 1985 「上黒岩岩陰遺跡採集の遺物」『遺跡』第28号：73-91頁
- 谷口康浩 1988 「円孔文系土器群とその編年的位置をめぐる問題」『大和のあけぼのⅡ』：69-91頁，大和市教育委員会
- 谷口康浩 1991 a 「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』第92巻第2号：21-51頁
- 谷口康浩 1991 b 「土器型式編年論 草創期」『縄文時代』第2号：201-203頁
- 田村 隆ほか 1982 「鎌ヶ谷市林跡遺跡採集の隆起線土器」『奈和』第20号：1-11頁
- 坪井清足 1976 「作品解説」『日本陶磁全集1 縄文』：67頁，中央公論社
- 土肥 孝 1982 「縄文文化起源論」『縄文文化の研究第3巻 縄文土器Ⅰ』：17-41頁，雄山閣
- 戸沢充則 1964 「縄文文化起源論の系譜」『日本考古学の諸問題——考古学研究会十周年記念論文集——』：1-15頁
- 戸沢充則 1985 「概説・縄文文化の研究〔Ⅰ〕」『探訪縄文の遺跡 東日本編』：1-29頁，有斐閣
- 鳥浜貝塚研究グループ 1987 『鳥浜貝塚——1980～1985年度調査のまとめ——』，福井県教育委員会・福井県立若狭歴史資料館
- 永友義典・日高孝治 1985 「堂地西遺跡の調査」『宮崎県学園都市遺跡発掘調査報告書2』：70-97頁，宮崎教育委員会
- 長野真一ほか 1981 『加治屋園遺跡 木の迫遺跡』，鹿児島県教育委員会
- 長野真一ほか 1983 『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』，鹿児島県教育委員会
- 永峯光一 1967 「長野県石小屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』：160-175頁，平凡社
- 永峯光一 1968 「石小屋洞穴発見の微隆起線土器」『古代文化』第20巻第8・9号：178-180頁



窩紋土器研究序説（後篇）

- 中村喜代重ほか 1983 『先土器時代柏ヶ谷長ヲサ遺跡』, 柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 中村孝三郎 1960 a 「新潟県蒲原郡上川村神谷小瀬ヶ沢洞窟遺跡（第一次）調査略報」『上代文化』第30輯：3-10頁
- 中村孝三郎 1960 b 『小瀬が沢洞窟』, 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎・小片 保 1964 『室谷洞窟』, 長岡市立科学博物館
- 中村五郎 1990 「世界史の中の縄紋文化」『滝根町史 第1巻 通史編』：86-103頁, 滝根町
- 西田泰民 1990 「縄文土器の底は見ええたか」『争点 日本の歴史 第1巻原始編』：94-105頁, 新人物往来社
- 橋本勝雄 1988 「縄文文化起源論」『論争・学説 日本の考古学第2巻 先土器・縄文時代Ⅰ』：101-136頁, 雄山閣
- 原川雄二・鈴木俊成 1981 「多摩ニュータウン No. 426 遺跡」『多摩ニュータウン遺跡 昭和55年度 第3分冊』：157-217頁, 東京都埋蔵文化財センター
- 日高孝治 1986 「瀬戸口遺跡」『新田原遺跡 瀬戸口遺跡 蔵園地下式横穴墓』：121-200頁, 新富町教育委員会
- 深澤芳樹 1989 「木葉紋と流水紋」『考古学研究』第36巻第3号：39-66頁
- 古川知明 1984 「立山町白岩尾掛遺跡——縄文時代草創期遺物について——」『大境』第8号：103-110頁
- 前原勝矢 1989 『右利き・左利きの科学』, 講談社
- 宮井英一ほか 1985 『大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原』, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 三宅徹也ほか 1979 『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』, 青森県立郷土館
- 宮田栄二ほか 1990 『塚ノ越遺跡 ほか2遺跡』, 鹿児島県吹上町教育委員会
- 村澤正弘 1986 「相模野第149遺跡」『大和市史7 資料編考古』：290-295頁, 大和市
- 村澤正弘 1989 「縄文時代——定住生活の確立と土器文化（昭和62年11月脱稿）」『大和市史1 通史編原始古代中世』（抜刷）：127-222頁
- 村田文夫 1968 「神奈川県川崎市生田広福寺境内採集の隆起線文系土器片について」『古代文化』第20巻第2号：44-46頁
- 村田文夫ほか 1979 『黒川東遺跡』, 高津図書館友の会郷土史研究会
- 森川昌和・網谷克彦・山田昌久・西田正規 1985 「福井県 鳥浜貝塚 <縄文人のタイムカプセル>」『探訪縄文の遺跡 西日本編』：29-48頁, 有斐閣
- 山田晃弘ほか 1981 『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』, 石器文化談話会
- 山田晃弘ほか 1990 『馬場壇B遺跡 大原B遺跡』, 東北歴史資料館
- 山田昌久 1988 「縄文時代草創期終末土器群の並行関係——多縄文系土器群の変遷と縄文時代草創期の終焉——」『埼玉考古』第24号：138-142頁
- 山内清男 1929 「関東に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号：1-30頁
- 山内清男 1932 a 「日本遠古之文化1 縄紋土器文化の真相」『ドルメン』第1巻第4号：40-43頁
- 山内清男 1932 b 「日本遠古之文化2 縄紋土器の起原」『ドルメン』第1巻第5号：85-90頁
- 山内清男 1932 c 「日本遠古之文化3 縄紋土器の終末」『ドルメン』第1巻第6号：46-50頁
- 山内清男 1935 「古式縄紋土器研究最近の情勢」『ドルメン』第4巻第1号：36-44頁
- 山内清男 1939 『日本遠古之文化』, 先史考古学会
- 山内清男 1958 「縄文土器の技法」『世界陶磁全集第1巻 日本古代篇』：278-282頁, 河出書房
- 山内清男 1960 「小瀬が沢式土器（談話）」『朝日新聞』11月30日12版：10頁
- 山内清男 1963 「洞穴遺跡の編年と年代」『洞穴遺跡調査会会報』第6号：4-6頁
- 山内清男 1966 「縄紋式研究史に於ける茨城県遺跡の役割」『茨城県史研究』第4号：1-12頁
- 山内清男 1967 「洞窟遺跡の年代」『日本の洞穴遺跡』：374-381頁, 平凡社
- 山内清男 1968 a 「矢柄研磨器について」『日本民族と南方文化』：63-87頁, 平凡社
- 山内清男 1968 b 「縄紋土器の改定年代と海進の時期について」『古代』第48号：1-16頁

## 大塚達朗

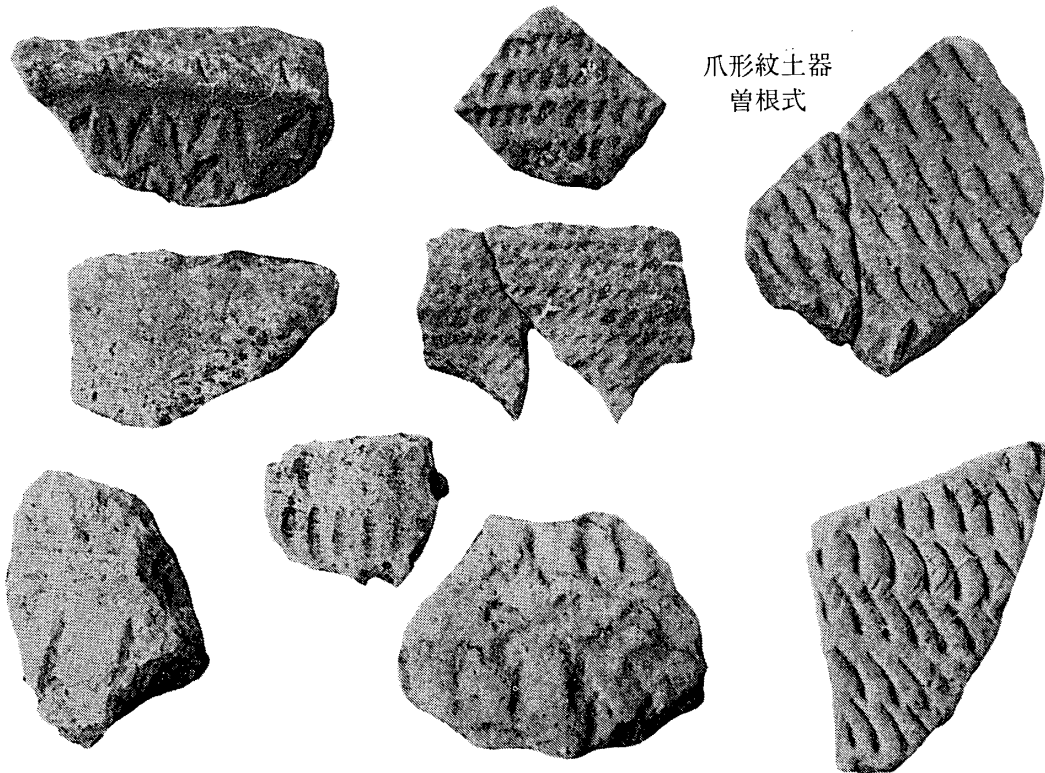
- 山内清男 1969 a 「画竜点睛の弁」『山内清男・先史考古学論文集・新第1集』：1-6頁，先史考古学会（原著1966，未見）
- 山内清男 1969 b 「縄紋草創期の諸問題」『MUSEUM』No. 224：4-22頁
- 山内清男 1971 「序文」『高島町史 別巻 考古資料編』，高島町
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』，先史考古学会
- 山内清男・佐藤達夫 1962 「縄紋土器の古さ」『科学読売』第14巻第12号：21-26，84-88頁
- 山内清男ほか 1964 『日本原始美術1 縄文式土器』，講談社
- 山本哲也ほか 1989 『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』，十和村教育委員会
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡調査概要』
- 渡辺 誠 1977 「近畿縄文時代の遺跡と遺物・4 京都府福知山市武者ヶ谷遺跡の縄文草創期土器」『古代文化』第29巻第7号：55-57頁
- 渡辺 誠ほか 1977 『京都府福知山市武者ヶ谷遺跡発掘調査報告書』，福知山市教育委員会

## 図・図版の出典

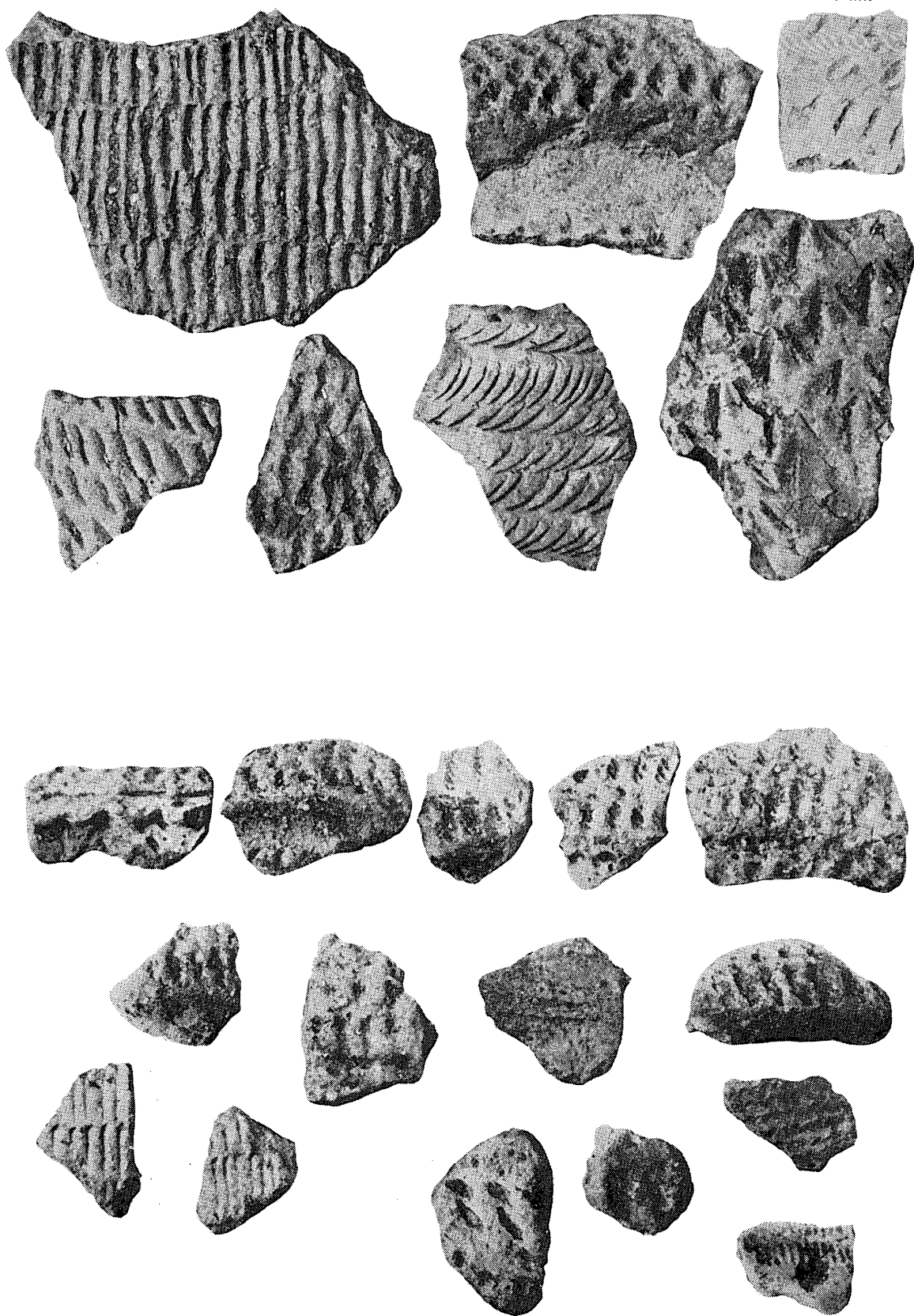
図1：佐藤1974 a 文献より転載 図2：小林1962文献より転載 図3：佐藤1971 b 文献より転載 図4：1～14麻生ほか1985文献より転載，15・16長野ほか1983文献より転載，17宮田ほか1990文献より転載 図5：1長野ほか1983文献より転載，2～4・7大塚実測，5～11永友・日高1985文献より転載 図6：1麻生ほか1985文献より再トレースして掲載，2大塚実測，3原川・鈴木1981文献より再トレースして掲載 図7：1大塚1982文献より転載，2相田・小池1986文献より転載，3鈴木(道)1986文献より転載，4村田1968文献より転載，5永峯1968文献より転載，6加藤1961文献より転載，7大塚採拓 図8：1・5・7～9大塚・小川・田村1980文献より転載，2大塚実測，3・6村田ほか1979文献より転載，4原川・鈴木1981文献より転載，10中村1983文献より転載 図9：1～3，4・5・13・15大塚・小川・田村1980文献より転載，6大塚実測，7～12・14原川・鈴木1981文献より転載 図10：1～7大塚1982文献より転載，8～13鈴木(道)1986文献より転載，14・15田村ほか1982文献より転載 図11：1十亀1985文献より転載，2山本ほか1989文献より転載 図12：岡本(東)1982文献より転載 図13：小林ほか1982文献より転載 図14：1～4鈴木(次)1989文献より転載，5～28白石1980文献より転載 図15：1渡辺ほか1977文献より転載，2古川1984文献より転載 図16：1白石1980文献より転載(加筆)，2原川・鈴木1981文献より転載(加筆) 図17：1山田ほか1981文献より転載，2小野ほか1987文献掲載の実測図を大塚が加筆・修正し，再トレースして掲載，3～5後藤1990文献より転載 図18：大塚1989 a 文献より転載 図19：1大塚採拓，2・4加藤・佐々木1962文献より転載，3後藤1990文献より転載，5中村1960 b 文献より再編して転載 図20：中段中央大塚実測，同右山田1981文献写真よりトレースして掲載 図21：1長野ほか1981文献より再トレースして掲載，2三宅ほか1979文献より再トレースして掲載，3土器は相田・小池1986文献より転載・石器は同文献より再トレースして掲載，4川崎ほか1976文献より再トレースして掲載 図版1～4：山内1979より転載(図版3・4は版面左が天) 図版5：1・3・4大塚撮影，2芹沢ほか1974より転載 図版6：大塚撮影 図版7：藤本 強氏撮影 図版8：藤本 強氏撮影

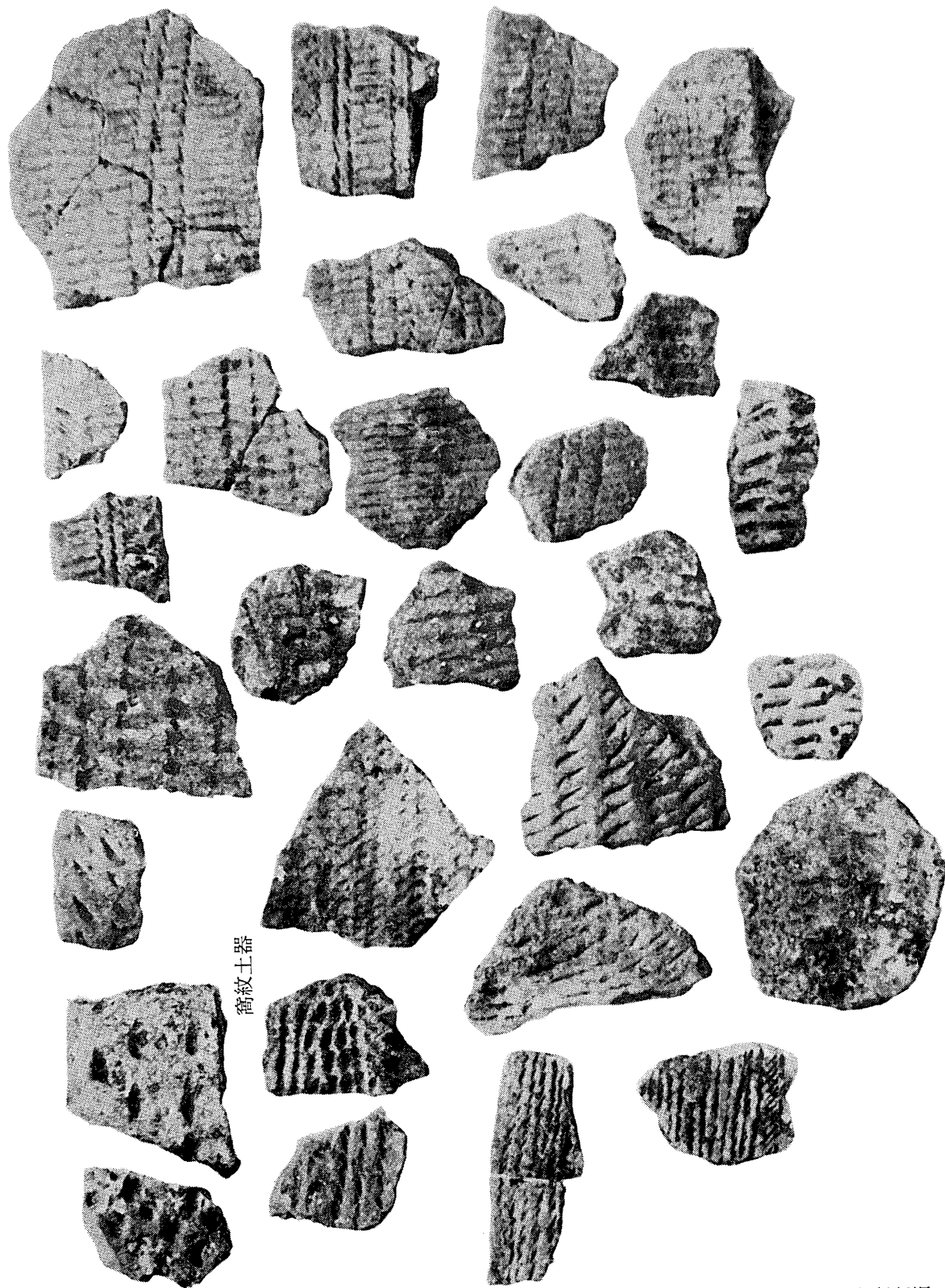


爪形紋土器  
福井式

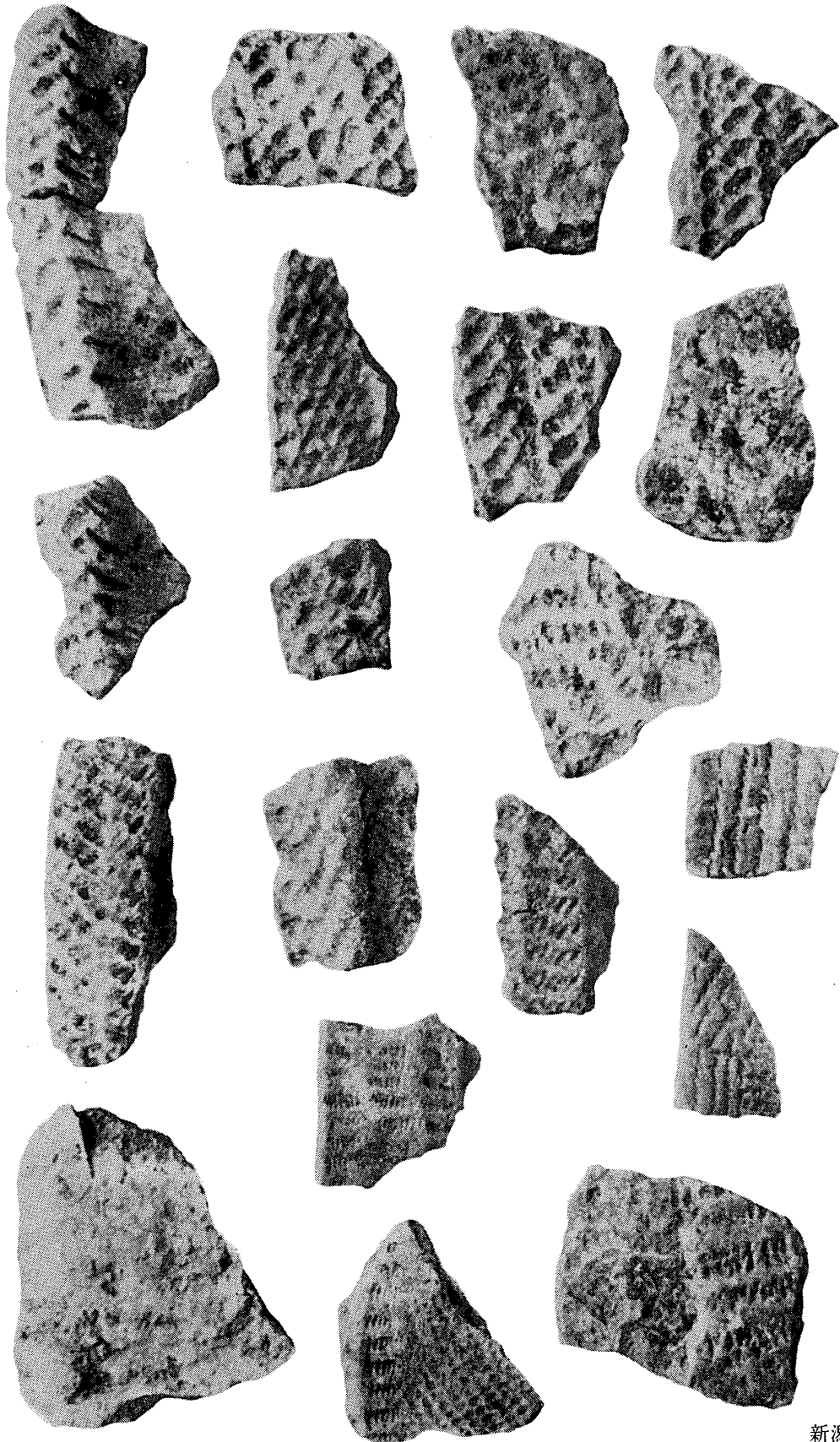


爪形紋土器  
曾根式





窩紋土器



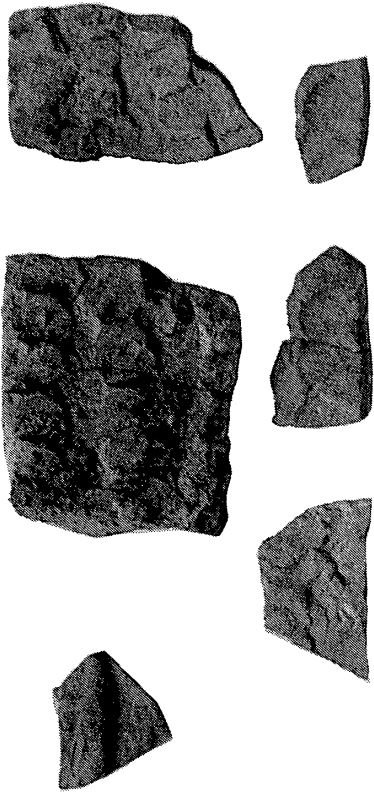
新潟・小瀬が沢



2 : 西ノ園式に類似する新潟・田沢例



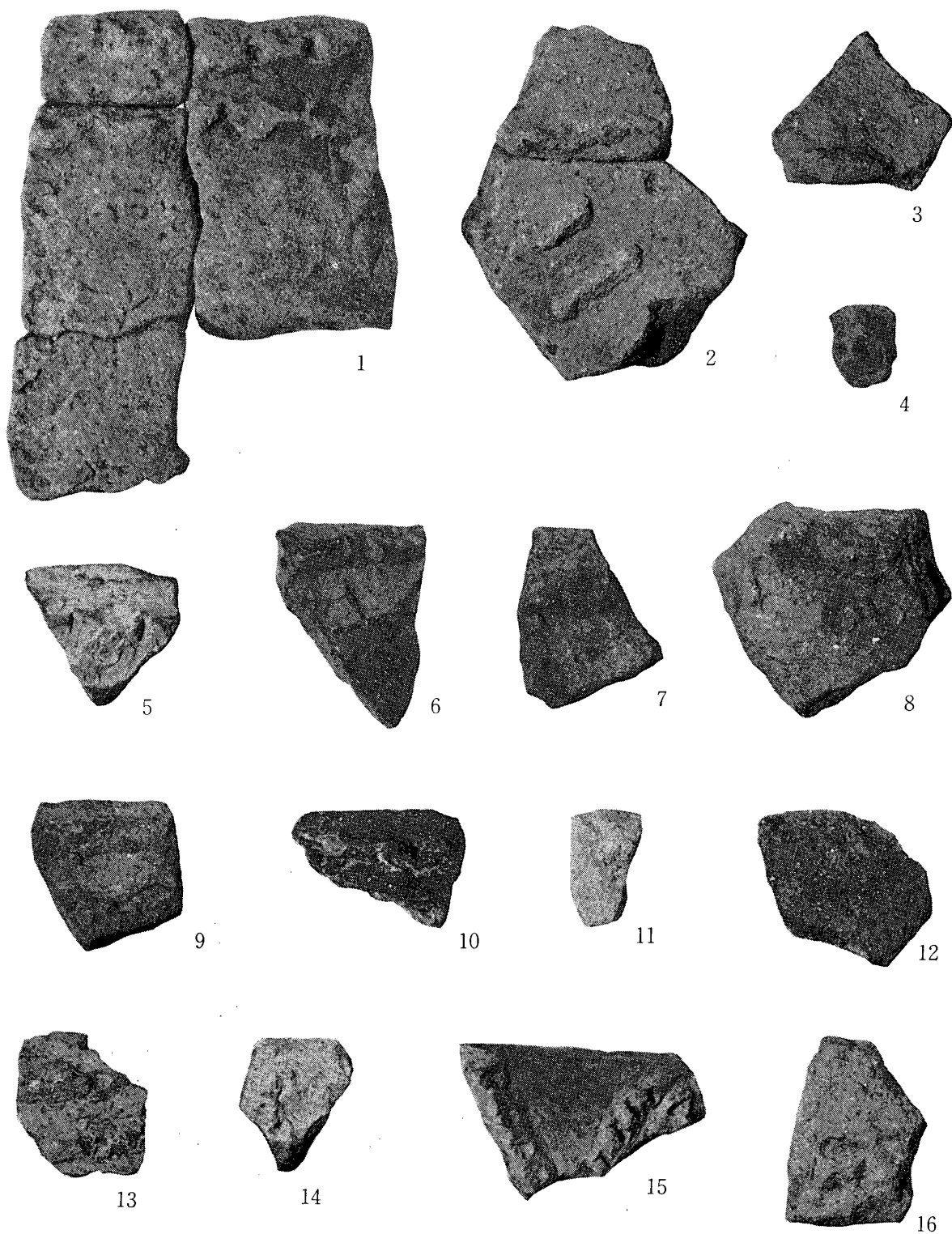
4 : 堂地西式（宮崎・大平）



1 : 西ノ園式（宮崎・西ノ園：上左端は伴う鳥浜貝塚下層式）

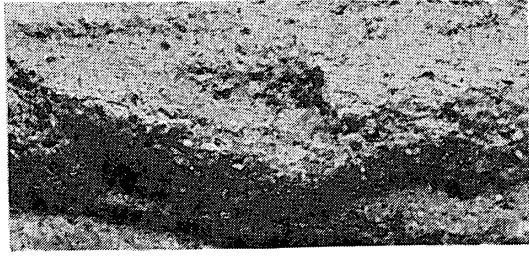


3 : 大平式（宮崎・大平）

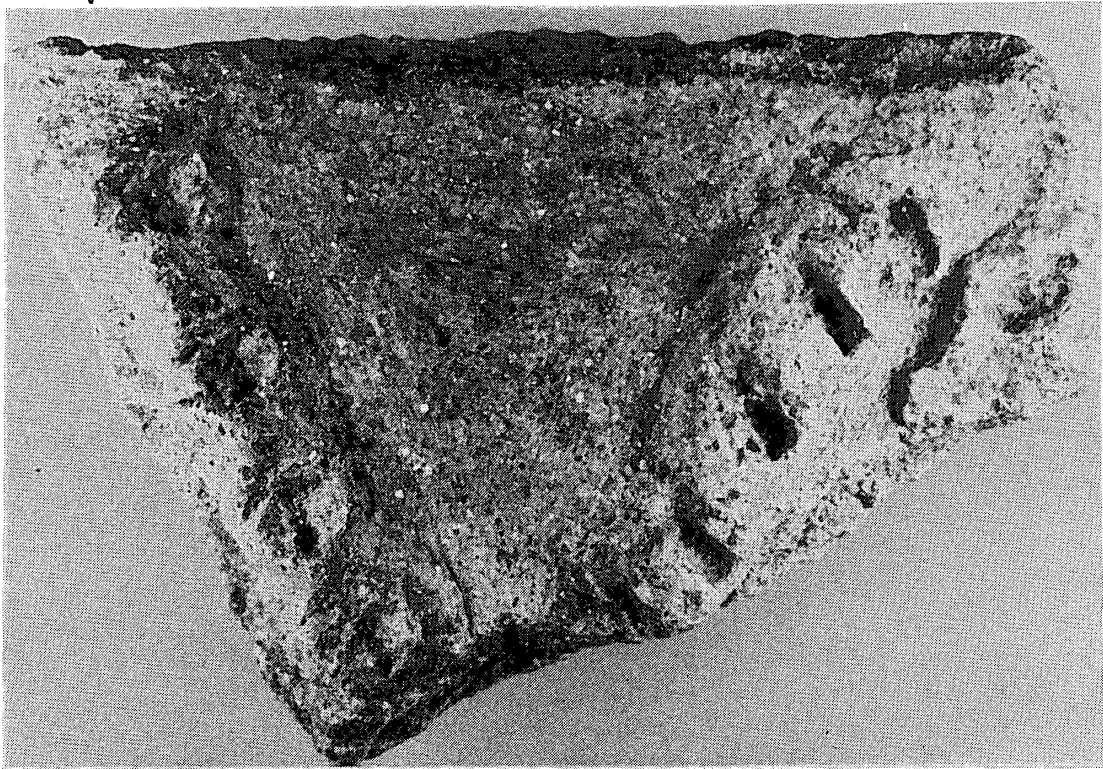
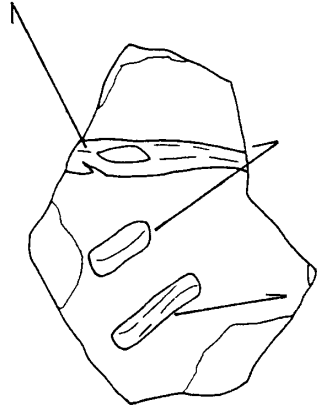


南原式の古い部分（千葉・南原，縮尺1/1：16は伴う泉福寺下層式系連鎖状横走隆線紋）





南原式（古）のつまみ手法と豆粒紋



南原式（古）の隆線上刺突紋・刻紋



南原式(古)の縄紋